

時報

VI

1960

甲南山部・甲南山屈会

時 報

KONAN ALPINE CLUB

No. 6

1 9 6 0

甲南大学山岳部・甲南高校山岳部

甲 南 山 岳 会



目

34年度を顧りみて	広瀬 健三	2
リーダー所感(大学山岳部と合宿主義)	大関 和夫	5
昨年度のリーダーをして	高三 堀田 美昭	7
35年度の方針	高二 永 真 孝男	10
“暮山合宿方針”(大学)		12
合宿日誌	広瀬 健三	14
アタック記録		22
白馬鍾北稜	藤 安 賢 一	22
白馬鍾北稜上半部	大関 和夫	28
杓子岳東壁A尾根	越 田 和 男	29
双子尾根より白馬岳	森 本 全 孝	31
合宿後記	広瀬 健三	34
装備反省	藤 安 賢 一	38
食糧反省	森 本 全 孝	40
“研究。積雪期の杓子鍾東面	大関 和夫	43
高校山岳部合宿報告		52
夏山 剣ヶ岳合宿		53
久山 乗鞍岳ヶ原合宿		57
暮山 猿倉合宿		61
“紀行文”		68
不帰岳第一峰尾根登攀記	倉 藤 孝 次	69
五月の鷹松ダイレクト尾根	広瀬 健三	71
大冠から小冠へ	大関 和夫	73
黒部源流	越 田 和 男	74
文山東面、薬師嶺走	大関 和夫	80
朝～穂高嶺走	飯 田 進	87



次

秋の本曾胸	森 本 全 孝	93
前穂高岳東壁	越 田 和 男	96
秋の大山	牧 野 宏	98
山 嶽 寮 (山の歌)		100
山嶽寮炉辺譚	春 月 廣 太	101
サラリーマン氏と山	雨 宮 宏 光	105
小 窓 谷	田 辺 潤	108
「大学山岳部の在り方」について	越 田 和 男	111
食糧計画	伊 藤 久三郎	116
山で見る夢	藤 安 賢 一	118
先生のグループ ¹⁾ 剱尾山 ²⁾ に登る	高橋 植 村 三 郎	120
秋を歩く	川 村 啓 喜	124
反 省	高 三 安 井 正	125
冬の沢歩き	高 二 乾 隆 也	129
中一主の巻山記	川 村 静 治	131
〃	佐 藤 昌 弘	133
先 輩 近 況	三 沢 寛 也	135
先 輩 近 況		137
記 録 (大学34年度)		142
高校顧問の活動状況報告 (34年度)	高 田 昇	158
甲南山岳会総会記録		159
甲南山岳会会計報告	雨 宮 宏 光	161
甲南山岳会名簿		163
山岳部現役名簿		166
編 集 後 記	越 田 和 男	169

34年度を顧りみて



広瀬 健三

創立当時の先輩諸氏の努力により、ようやく部も充実、更に大きく発展せんとした折から、我が部は不幸にもアクシデントという決定的な打撃を受け、ここで部の発展、飛躍ということについて今一度真剣に考えざるを得ない事態に直面した。それから2年、部の山行きはもう一度白紙の状態に戻り、その基礎を1から積みなおすべく新人養成的なものを続けて来たのである。実際連続アクシデントを起こした翌年の春山は学校当局のさびしい反対に会い、全面的に合宿を中止せざるを得ない様なこともあり、又故福永君の遺体捜索の爲め部の活動はどうしても制限され、創立当時にもまして苦しい年であった様だ。吾々が新リーダー会を構成した年、即ち34年度はいうなればその基礎も次第に固まり、かなりの充実性を取り戻し、再び部が前進せんとした年であったと云えよう。確かに吾々が入部した当時のあの何か重苦しい空気がすっかり取り除かれ、活気あるものに戻り始めて来ていた様だ。

そして幸いにもリーダー会を構成する人員が5名という恵まれた状態にあった吾々は、その好条件を大いに生かし、年間を通じて新しい何か一貫した山行きを行おうとする意欲に燃えていた。即ち春山に年間合宿の重点を置き、夏、秋は別として五月及び冬期合宿は重点たる春山合宿に備うべき山行きにし、又分散的なる山行きを夏、秋に取り入れ各部長がその好みに応じた山行きをし、それによって全くフリーな気持ちで山に親しみ、且つ登山者としての自信をつける様を持っ

て行く、と云う線を立てて見たのだ、それ故年頭の部員総会に於いて春山計画を発表、その方針を明らかにしたのである。その重点たる春山は吾々リーダー会が比較的良くびじんでいる杓子岳を中心とする白馬三山に目標を置き、リーダー多数という条件より判断して放射状登山を計画したのである。その成果、反省は春山報告に別記する故はぶくとして、五月、南岳に於いて新人養成の他に、初歩的ヴァリエーションルート
の登攀を試みたことは上級部員が来る春山に対してある程度の自信をつけた意味で充分な成果があったと思われる。冬期合宿を乗鞍で行い、本格的な厳冬期登山を行わなかったことは昨年度を顧みる時、1つに残りとなることは事実である。僅かに短かい大学山岳部生活に於て貴重な冬山の経験を出すことは惜しいことだ。でも当時の部の状態を見ると、スキー合宿を是非とも行う必要があり、又合宿をスキーと山に2分することはパーティの構成上にどうしても難があったのである。当然考えられるスキー合宿を終えた後、更に山に入るという案も出たが、期間の短かい冬期合宿に於いてはその両方がどちらつかずに成る恐れがある。過去の例からみても部員の負担が甚だ大となると考え、思いきって乗鞍に決定したのである。もともと冬山はあくまで春山に備う為の合宿にする方針をいた吾々であったが、やはりその成果は別として、どこかに入るべきであったと思う。しかしその乗鞍の合宿もスキー練習一本にしぼらず、新人の募集訓練、上級部員の岩稜登攀訓練を行い、春山に備うという目的に対しては少なくとも得る所はあったと思われる。特にスキー練習の効果は充分であったようだ。

夏山合宿の後半を分散的に行い、各々好むパーティに参加させた事及び秋山を全くフリーにし、各自プランを立てそれぞれに合った山行きを行った事は有意義であった。何時も何時もリーダー会の立てた計画に唯漠然と参加する状態にあれば、ともすれば山に対する意欲は薄れ勝ちに成るものであり、又各人が一箇の登山者としてその実力を試めすにも良い機会と成ったに違いない。山岳部という1つの共同体に籍を置く以上、全面的にかような山行きを行うのは欠点も有る。しかし少人数のパーティで

山行きをすることにより、山に対して各部員が純粋な意欲を燃やす為にも、より多くの部員がリーダーの立場に立つ為にも今後も出来る限りこの程の山行きを取り入れてほしいものだ。こうして今、昨年度を振り返ると、その良し悪しにつけ吾々が最良と考え立てた方針に向って中途にてくずれることなく歩めた様である。多数のリーダーの存在は当然時は意見の衝突を見たが、それはあくまで、部を盛り立てんとする所から生じたものであり、各々それぞれ長所を持ったリーダーに支えられ、チーフリーダーを勤めさせてもらった僕らはあらためて感謝したい気持である。34年度の全合宿も無事終了。ようやく我が部も立ち直ってきた様である。今年も多くの新入生諸君を迎え、部の空気に昨年にも増して活気あるものが見られる。部が更にのびようとしている時は、ともすればアクレデントに直面しがちなものだ。じっくり、あせらず前進しようではないか。



大学山岳部と合宿主義

大 関 和 夫

極地法に代表される大学山岳部の合宿主義（組織的登山）に対して、今一度私達は考えてみる必要があるのではなかろうか。部員の大部分は部の合宿の組織に支配された登山のみを行い、一層大切な山と人との関係でなくなってしまう恐れがある。一部の山岳部員が、右手にアルピニズムの旗なるものを掲げ、左手に新人の腕をつかんで山に登り合宿するとしたら、これは苦笑せざるを得ない。部という大義名分の前に部員という個人を考えないのが大分の山岳部であろうが、これは考え直さねばならない。私はまず部員の一人一人が立派な登山者たうんとする努力が為されるべきだと考える。それすら容易ならぬ時、短期間の経験しか持たぬ未熟な個体を組織された部で所謂組織的登山を行う事に疑問を持つのである。正規のかたくるしい合宿を続けていくうちに必ず落伍者が出る。これは仕方ない事として部員の個性を無視して、部が合宿主義をとることは、各個人のコンプリート、マニフェイアの達成という点からみても、効果は少なからう。登山とは、各個人によって種々な意味もあるが、結局「自由精神の発露の場」ではなかろうか。山は人間の自由精神を受け入れる偉大性と包容力を持つものでもある。山の持つ危険性は安易な妥協は許されないが、一部の山岳団体で行われている不当なシブキは山に登る目的を見失って、手段が目的になり下っているようだ。手段が目的となった登山は偉大性や包容力もかすんでしまう。組織的登山（極地法）が登山の最高形式だということは今更いうまでもない。しかし、その重要段階、例えばサポート行動、アタック行動とどれ一つ取ってみてもそれ自体登山を基礎

とし、着実な登攀を基礎としないものはないはずである。従って私達は将来立派な組織を構成し得る個体の完成に努力すべきではなからうか。登山者の完成それは単に体力、技術のみでなく登山の知的要素に於ても又人格をも含んでいることが必要である。これから大いに伸びようとする尊い自由の芽を強いて押し曲げてまゐる、組織万能を振りかざす必要はないはずである。登山は本来総合的な行為であろうが、その一面だけに固執することは、あまり寛心した態度ではなからう。この意味から、**「オールラウンドにして、コンプリートな山行」**ということを経験しなければならぬ。大学四年間を、縦断面集中とか、横断面集中あるいは、極地法一点張りというような定式化した登山からは、登山工は生れても、登山者は生れないであろう。又、十年一月の如く、穂高だ剣だ夏の定着合宿を何の疑問も持つことなく行っている大学山岳部の合宿主義からは「登山工」的部員を生み出す恐れがある。「登山工」的な組織の中で山を登り得ても、自分自身で山を歩く力が欠けている部員が出て来ている最近の部を見るにつけ考えなければならぬ問題である。部員の一人一人が自分自身の登山を求めて努力することがなければ部は登山工の集りでしかない。山の中で単独に切りはなされた場合でも、自信を持って判断を下せる機登山の實力を広く養いつけておきたい。個人の意志を尊重するということは、各個人には、体力能力の相違があり、各個人が自分自身の山を求めるのは当然の事であり、それを尊重しないのは人権無視に等しい。しかし各個人が自分の能力を正確に判断することは極めて困難であろうが、その判断力に欠ける者は登山者として不適格ではなからうか。なぜなら、その判断を誤った時にアクシデントが起るのである。技術練習を中心とした現在の部の行き方も必要であろうが、こうした行き方はいくら押し進めたところで、高級シエルパの養成に終る恐れがある。私達はつとめて山登りを広く理解し、こせついた記録作り等に熱中しない方が良く思うのである。個人の意志を尊重し、種々な人間を包括して、それを伸ばして行こうということは、

山岳部の運営面に於て非常に困難なことであろうが、私達は大きな寛容性も、持たなければならない。色々な人達の意欲を如何に部活動の中に昇華させるかという事は私達の甲南大学山岳部にとって、一番大切なことではなかろうか。すぐれた登山者の集った部であれば、極地法に限らずどんな登山形式でも立派に山に登ることができるであろう。又、反面、私達は山岳部という一つの組織の一員であり、各々が山岳部を形成しているということを忘れてはならない。ただ勝手気ままに、登高意欲だとか、パイオニスマーク等と云って自己本位の行動をとることは許すことはできないのである。結局私達は秀れた登山者の道を歩む時、秀れた部員である様努力しなければならない。最後に私達はあのリーダーなら大丈夫だとか、あの仲間となら完全だという考えに、先立って自分自身と山との関係をもう一度深く掘り下げて考えなければならない。私達は、自分自身に対して謙虚で慎重な行動を取るならば、山は喜びや楽しさを与えてくれるだろう。登山者への道は果しく長い。私達が、幼い中学生や高校生の人達にも手をさしのべ、お互いに皆の山登りを尊重しながら、一歩一歩確実な歩みをつづけようではないか。

昨年度のリーダーをして

高二 堀田美昭

中学の時から第一線に立ってやっていたいかならなかった我々高三の部員は、上二年のブランクを挽回しようと三年間苦勞し、どうにかここまで漕ぎつけた。その甲斐あってか、今までの第一の問題点であった部員不足の悩みも、どうにか解決しそうな模様である。ここまで盛り返せたのは、全々大学の方々と諸先輩

のよき御指導、御援助のお蔭と感謝しております。

ここぞ昨年度の山行きを振り返って見ると、学校から年二回に合宿を減らされてから、一応高校として比較的登高の困難な冬山を除き、スキー場でのスキー練習を行うことに決め、夏と春に焦点が絞められた。

この頃から我々はもう一人立ちしてやらねばならないと考え、大学側からの援助を我々の方から断ったのである。なぜなら今までの合宿を見ても大学の部員やＯＢの方々が多数参加して下さり、極端な例が穂高酒沢の合宿であり、高校の参加人員が４名に、大学、及び先輩の方々を合わせて１０名近く、高校の合宿か、大学の合宿かわからないほどであった。それは部員不足のせいもあり、技術、体力も備わっていなかったから無理のない所である。そして今、問題になっている「甲南学園山岳部」ということも考えなければならぬ点である。が我々は、名前だけは一流の山々に登っている。しかし、我々の実力というものはどの程度あるものか解らない事も問題になった点である。

そして昨年度は夏は劔岳二股合宿、冬は乗鞍岳位ヶ原スキー合宿、春は杓子岳猿倉合宿と大学及びＯＢの参加なしに実施したのである。

夏の劔岳二股合宿、これは一口に云って失敗であった。新人訓練に主眼を置き行なったのであるが、練習不足がたたき、又一人一人の技術及び体力が解っていなかったのも重なったため計画に無理があり、相当変更せざるを得なかった。しかし、この合宿から我々も自信が着き、どうにかやって行けそうなる目度着いたのも事実である。だから一概に「失敗であった。」と言えないかもしれない。

冬の乗鞍岳位ヶ原スキー合宿、これはスキー上達に重きを置いていたので、始め入方尾根を選んだのであるが、大学から、それなら新人が積雪期の合宿にも慣れるし、大学や、ＯＢも行く事だから乗鞍にしないかということでも乗鞍に決めたのである。その結果我々高校のものにとって有益なるものも色々身につけたし、又これからこういう山行きをどんどんやって行きたいと思う。

今年に入って春の杓子岳猿倉合宿、この合宿は我々高二部員の活躍し得る最大限の時であり、又もう高一の連中にバトンタッチするため高一の部員にとっても一番期待していた合宿であるだけに、悪天候に見舞われ登頂出来なかった事は、甚だ残念であった。食料もよく研究し、充分準備し、装備の方も高一の部員がよくやってくれたが、高一と中一の間に部員がいなく行動面にも大部足並みの揃わなかった事も登頂失敗の原因の一つに上げられるかも知れない。しかし、アタックに失敗はしたもののこれからの高校山岳部を背負って行く高一部員にとって、色々考えさせられる所、大であったと思う。我々高二の部員にしても、三十二年度の春山の際、八方尾根で大風雪のため天幕に閉ざされ、強風に襲われ、危くテントを飛ばされそうになったことも、今考えて見るとあれ以来、自信を取り返しここまでどうにかやってゆけたのであるから、大変いい経験をしたと思っている。だから今度の合宿での風雪についてのA、C設置、ガスのためアタックの再度の中止、雨中の撤収、これらすべてが、これからの高校山岳部の発展の上に何らかの形で現われ、プラスになるであろう。

私が昨年度のリーダーをして感じた事であるが、管段トレーニングしている事が合宿にそれだけの努力が実るものか、合宿の前にはいつも試験がひかえているのでその間又元に戻ってしまうのである。こういう事をも考え、今年度のリーダーとも相談し一週間の内、土曜を山歩き、又はロッククライミング、又はキャンプとなるべく山に接するようにし、水曜を総会、金曜をゼミナールという様に山を研究する事にし、ボッカの練習には合宿の前の二週間程を使うことにした。

ここで断わって置くが、私が春山でリーダーをやめたのは何も山をやめるわけではない、今迄の努力が丁度今報いられようとしているし、又リーダーを高二に譲ったのは今まで高一、中三の部員がいなかった為（高一に二人入ったが）来年度も高二の連中にリーダーをやってもらわなければならないから、今からやってもらうのである。

最後に、高校山岳部もだいぶ充実してきた事ですし、これからはより努力したいと思います。大学及び先輩の方々も今までも同様に指導して下さいますようお願い致します。

今年度の山行方針

高二 永島考男

例年どおり、春夏二回の合宿と、冬に、スキー練習を行う。夏山は、今迄の様に、ただ高い有名な山にだけこだわらず、中一から高三まで全部が一緒に楽しく山を歩き、いろいろな山に親しむという意味でも、合宿形式をやめて、一週間程の有意義な山歩き(徒走)をやるつもりである。

冬の合宿は、例年どをり行い、春山も今までどうりの合宿を行うつもりであるが、もっとみんなで行ける山を対象とするつもりである。平素から山の研究会を開き、もう一度基礎からやりなおすつもりである。

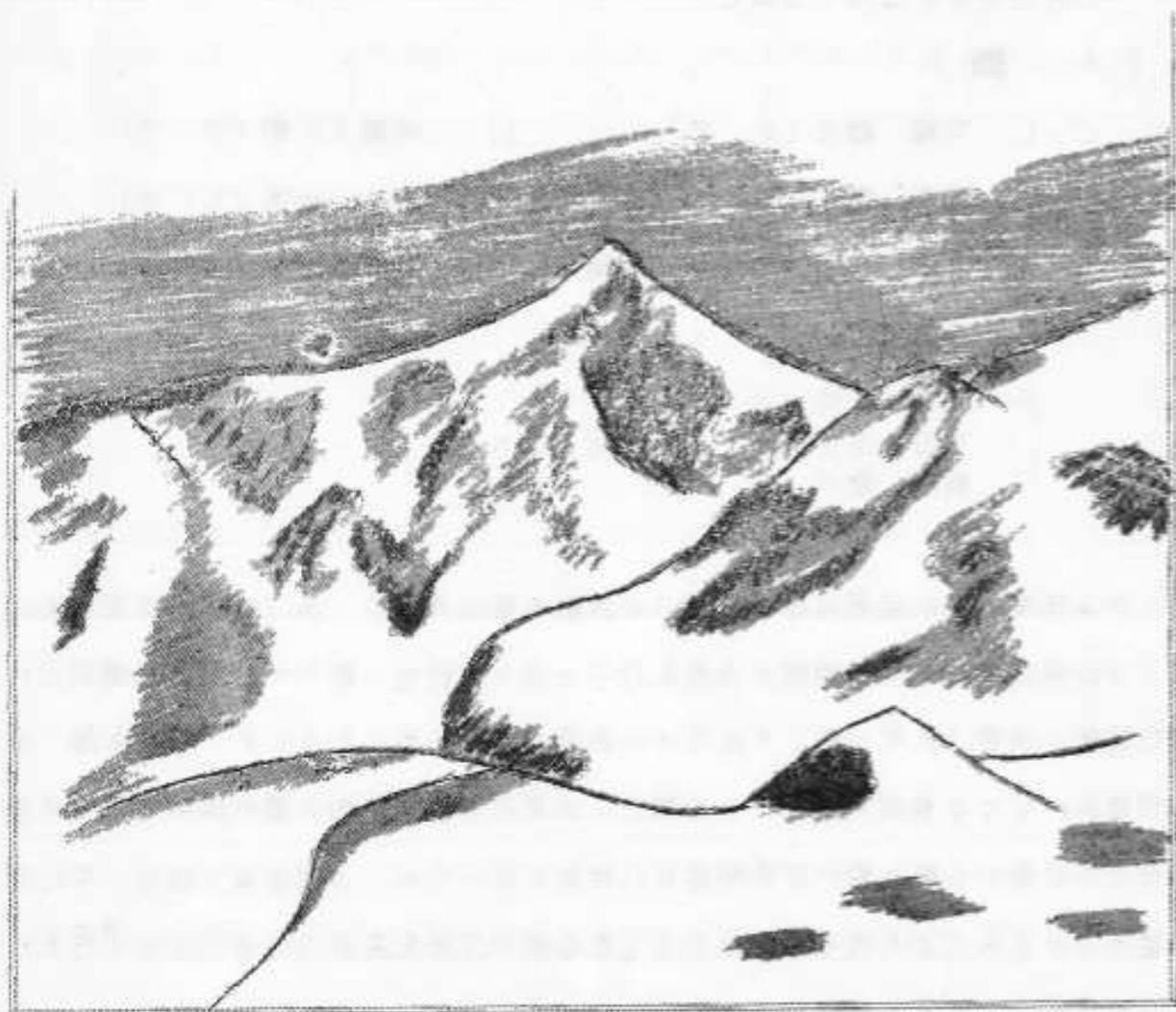
上級部員の人達が満足いかない時は、合宿が終わってから大いに満足の出来るような山行をしてもらう。

以上が大体の今年の山行の方針であるが、日頃から出来るだけ沢山山に行き岩登りに加え、近郊の山々を歩き、もっと山に関心を持ち、山の楽しさを知りたいと思う。部員不足はどうか解決しそうですが、中卒の部員が全然いないので、ぜひ今年の夏山までに獲得するつもりである。

終りに部員一同がしっかりと団結し、チームワークのとれた、家族的な雰囲気になった、明るい部になりたいと思っています。

報 告

春 山
杓子岳東面合宿
〔1960.3〕



(目 的)

1. 双尾尾根樺平に於て、Cを設け、杓子東面について可能な限り多くの方向から研究する事。

即ち、

イ、東面ヴァリエーションルートの登攀、研究。あわせて全部員の氷雪技術の向上を計る事。

ロ、杓子東面の気象及び杓子沢、長走沢に於ける雪崩の観測、研究。

2. 上級部員による白馬鍾北稜の完全登攀。

(期 間)

3月9日より4月1日まで。

(人 員)

C・L 友頼 健三 (E. 3)

L. 伊藤久三郎 (E. 3)

ん、 藤安 賢一 (E. 3) 整備係

ん、 越田 和男 (S. 3)

倉藤 孝次 (E. 2) 食糧係

大岡 和夫 (E. 2) 記録係

森本 全彦 (L. 1) 食糧係

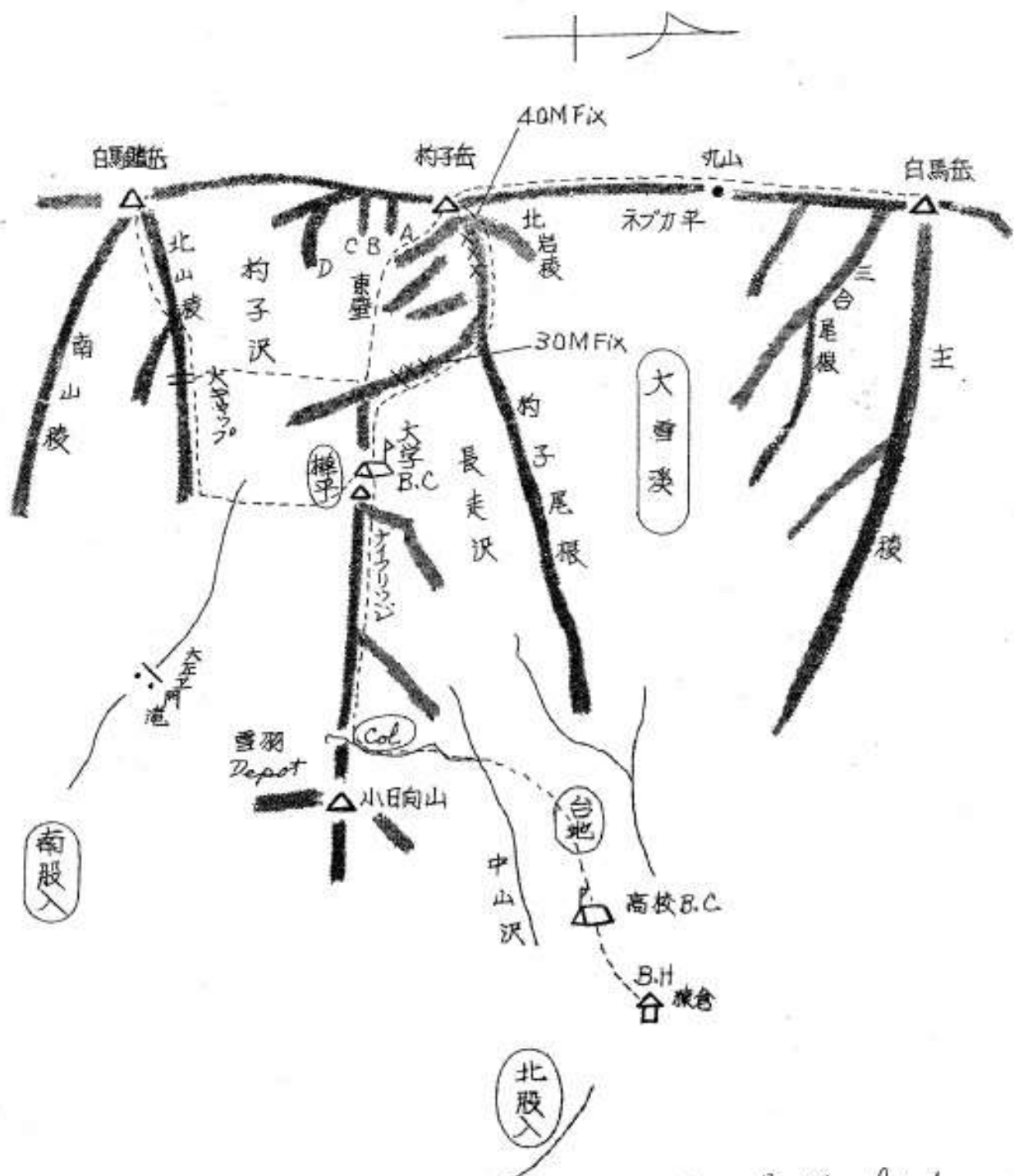
二谷 和成 (E. 1) 気象係

[福井 修 (S. 4)
芦田 匡平 (S. 4)
阿河 徹三 (E. 4)]

荷上げのみ

34年度の春山合宿は白馬三山への放射状登山であり、又これに一年間の統仕上げの意味を持たし長期間の合宿を行ふと云う方針は、新リーダー会が構成された時既に決定されていた。それだけに合宿に臨むに当ってリーダー会は勿論、全部員がかなりの意欲を見せていた様だ。出発前の合宿参加人員の激減は白馬本峰をその目標から取り除かざるを得ない結果となったが、4年部員の協力、参観部員のファイトにより我々が行わんとした合宿の方針を変更させることなく行えたことは何よりであった。

概念図



by K. Koshida

“春山合宿日誌”

チーフリーダー 広瀬 健三

3 月 8 日

先発隊 藤安、倉藤、芦田、福井、阿河、大阪発。

3 月 9 日

本隊 広瀬他 4名 大阪発

先発隊は細野にて先きに鉄道便で送った食料、装備の整理をする。

3 月 10 日 (晴)

本隊、先発隊細野にて合流。直ちに猿倉迄の第一回荷上げを行う。出発前のトレーニングが充分でないのでコンディションを整える為比較的軽い荷物で行く。猿倉小屋に荷をデポし全員細野に帰る。スキーは使用せず。

細野(9.00)——二股(9.40)——猿倉(12.45)——細野(15.25)

3 月 11 日 (雨後曇)

猿倉への二回目の荷上げを行う。全員快調。広瀬、伊藤は猿倉へ泊る。他は細野へ。 細野(10.10)——猿倉(13.40)——細野(16.50)

3 月 12 日 (晴)

広瀬、伊藤はB、C予定地のカンパ平迄偵察に出る。猿倉台地では視界の利かぬ時でも行動出来る様特に赤旗の数を増やす。小日向のコルには既に撤収した。

パーティの雪洞が有ったので今後デポ用に使用する事にする。コルより更に上へと向うが途中で引き返す。小日向尾根はフィクスの必要はなさそうだ。何処かわからぬが雪崩が絶えず落ちている。余り激しいのでコルで時間待ちをする。帰途猿倉台地を細野から荷上げにやって来た連中と会う。予定は猿倉までであったが時間があつたので登って来たのだそうだ。台地の途中に荷をデポし小屋へ帰る。全員猿倉に集結。阿河下山。

(偵察班) 猿倉(7.15)——小日向コル(9.15)——
引き返点(11.00)——

(荷上げ班) 細野(9.00)——猿倉(13.10)——
台地上デポ(14.30)——猿倉(14.50)

3月13日(曇)

昨日の偵察より判断して、一気に樺平まで荷上げする事に決定。コルの雪洞で荷を減らし予定通り樺平迄行く。樺平には一目でわかる大きな樺の木があるが、その根元にデポして引きあげる。コルよりスキーを使用する。冬山のスキー練習の効果は充分で、全員足並もそろい快調に滑り降りる。

猿倉(8.00)——コル(10.30~11.15)——樺平(13.00)——
——猿倉(16.00)

3月14日(小雪後曇)

樺平へ第2回目の荷上げを行う。少しラッセルがある様だがたいした事はない。それでもコル直下は膝までもぐる。昨日入って来た名古屋工大パーティと交替にラッセルする。昨日同様コルで荷を減らし樺平に向う。芦田、福井はコルより下山する。樺平にウインパーを張り、広瀬、二谷を残し他は猿倉へ下りる。夕方から気圧はぐんぐん下る。それに加えての強風。明日は間違

く晴れるだろう。この分だと予定より早く樺平に集結出来そうだ。

倉 (7.45) — コル (10.30 ~ 11.00) — 樺平 (12.00 ~ 3.00) — 旅倉 (14.00)

月 15 日 (晴)

旅倉からは最後の荷上げ。広瀬、二谷はコルに下って合流する。樺平にウイパーと並んでカマボコを張る。昨日もそうであったが樺平はなんと風の強い。さっそくテントに入る。それにしても思いもよらず早く集結出来たもの。あとはアタックのチャンスを待つのみ。二週間たっぷりある。

旅倉 (8.20) — コル (10.25) — 樺平 (12.00)

月 16 日 (風雪)

昨夜から降り出した雪は朝になっても止まない。出発以来初めての流雪。雪。一日中降る。積雪約70cm。

月 17 日 (晴後曇)

全員で杓子登頂の予定だったが痛烈な風、それに天気も思わしくないので中止する。10時頃とにかくジマクシオン手前の岩稜迄広瀬、藤安、大関の三人を出掛け、ザイルをクイックスする。残りはコルに荷を取りに行くがすぐに引返して来た。3時過ぎ越田が来る。昨日の雪でかなりのラッセルがあった様だ。7人せー人だから大変だったろう。

月 18 日 (薄曇)

天気はパツとしない。視界が利かぬ。杓子登頂の目的が白馬鍾北稜の偵察。寒ねているので中止する。コルへ荷を取りに行った連中はコルでスキーをし

て遊んで帰ってくる。

3月19日（快晴）

曇一つない好天。でも風は厳冬期を思わせる程強い。全員を杓子頂上に向う。双子尾根からは我々が目標とする鑓の北稜、杓子東壁が手に取る様に見える。すばらしい眺めだ。ぐっと登行意欲がわいてくる。頂上で剣岳に向って故福永先輩に黙祈。ある悲痛なアクシデントから早や三年。「災難は忘れた頃にやってくる。」気をつけなくてはならない。帰途頂上直下に40mザイルをフィックスする。勿論今後のアタックに備えて帰途をより安全にする為だ。明日はいよいよ北稜のアタック。僕と藤安が行く事にする。夕方取付の偵察に出るが、やはり北稜は長い。かなりのアルバイトであろう。問題は北稜を上半と下半に分ける大ギヤップ手前のナイフリッジの様である。でも充分自信はある。取付き点を確かめ引上げる。

B.C (7.30) — 頂上 (9.30) — B.C (10.30)

3月20日（晴後曇）

る時。キーパーに起こされて天気を見るが悪くない。頂上は晴れているが悪い雲が下の方から広がっている。気温も十度と全然高い。昨日の天気図から判断しても雨が来るのは時間の問題だ。アタックを中止。再びシラフに入る。今日は一日中カードをやる。何んせ合宿打上げインバ代を負けたら払わなければならぬとの事で皆の熱の入れ様も大変。明日の天気も絶望的なので夜はゆっくり神戸放送の電話リクエストを聞く。先に下山した芦田に必ずリクエストする様頼んでいたの、今か今かと待つが遂に出ずじまいで全員がっかり。楽しい一日だった。

る 月 21 日 (雨 後 曇)

よく雨の降る日だ。春は雨が降るので面白くない。ウインパーの方は雨漏りで大変の様である。明日はどうにか晴れそうである。晴れれば勿論北稜の完全トレースだ。伊藤、大関、倉藤は僕らのサポートを兼ねて上半部をアタックする事にする。キーパーに明日を頼んで早や目にシラフに入る。

る 月 22 日 (伏 晴)

1. 北稜完全トレース。 玄瀬、藤安。

2. 北稜上半アタック。 伊藤、倉藤、大関。(別 記)

る 月 23 日 (晴)

1. 杓子東壁Aリッジ 越田、倉藤

2. 白馬本峯往復 伊藤、森本、二谷 別 記

今日も昨日に続いて好天気だ。予定通り2パーティ出発。今日は1日ゆっくりして昨日のアタックの疲れをとるつもりでいたが、Aリッジパーティの登攀を見るため第1フィックスの辺迄出かける。B,Cの前の急斜面を登り切ると東壁は目前に見えるがまだ彼等の姿は見えない様だ。時間的にももうリッジ上に出て来る頃だ。と思いつつ第1フィックスの辺迄来るとカッティングの音が聞えてくる。姿は見えないが壱は相当かたい様だ、澄み切ったカッティングの音が心良く杓子沢に響いている。

やがて彼等の姿が見える。さっそく双眼鏡をとり出して見ると、そう悪いところもないのかコンテリヌアスでどんどん高度を上げていた。こうして仲間の登攀を見ているのも又楽しいものだ。白馬へ行く連中が盛んに彼等に声をかけている。ここからは垂直に見える頂上直下の雪壁もたいしたことはないらしく、簡単に乗り越えてしまった。頂上に立つのを見とどけてテントへ帰る。9時早

早くもAリッヂパーティ帰って来る。昼頃伊藤等も帰る。昨日の北稜、今日のAリッヂと我々の計画も順当に進んでいる。あと一週間、いくらなんでも一回位はアタック出来るだろう。

3月24日 (風雪)

一日中雪が降る。天気図は完全冬型の気圧配置である。積雪約60cm。今後のアタックを考えて見る。Aリッヂをやった越田、倉藤は盛んにBリッヂのアタックを推める。共に自信たっぷりの様だ。僕自身もそう手強いとは思わない。北稜のアタックの疲れも2日間の休養ですっかり取れた。次回のアタックは、Dリッヂを越田、藤安、Bを広瀬、倉藤、Aを大関、森本という事に決定する。考えただけでも楽しいアタックだ。新たなファイトがわいて来る

3月25日 (晴後曇)

アタック出来ぬ事もないが、昼からはくずれそうだ。それに昨日新雪のある沢に入るのは少々危険である。あわてる事はない。でも天気は明日から下り坂となるだろう。少しゆううつに成る。伊藤、二谷、森本はゴルに食糧を取りに行く。

3月26日 (みぞれ後雪)

沈殿。みぞれは昼から雪に変わる。

3月27日 (風雪)

雪は今日も止まない。積雪1mに達す。デントは完全に埋まってしまった。全く冬山の様だ。白馬周辺は本当に天気の良いところである。1日中時間をつぶすのに苦労する。樺平に入ってから12日目である。テントの底もへこん

でしまってそろそろ居心地が悪くなって来た。ホームシックにかかるフツドキ者が出て来る。一年生の森本、二谷は文句も云わず良くがんばってくれる。早くアタックに出たいものだ。でもこれだけの新雪が降ったら晴れたからと云って即ぐに沢へ入れたものぞない。明日は晴れの可能性大。

3月28日（晴後曇）

予定通り晴れたが沢へは下れない。完全に埋まったテントからはい出る。なんと云っても青空は美しい。余り沈黙していても体がなまるので、高等科も猿倉にテントを張っていることだし、連絡方々全員で猿倉迄下ることにする。この際いらなくなったものを下ろす。コルからスキーで一滑りして台地に下ると林間の上にウインパーを二つ張っていた。可愛らしい中一生も来ている。話はずむ。高校も晴れ次第双子尾根を登るとの事。味の素、砂糖等を仕入れて引きあげる。明日は間違いなく晴れると思っていた天気もコルに戻って来た頃からいやな雲が出てくる。コルまでツアーに来た高校生と別れる。久し振りに動いたのをB.C.に帰るとぐったりとくる。

樺平(8.00)——台地高校テント(9.40)——猿倉小屋(10.20)
——コル(13.40)——テント(14.40)

3月29日（曇）

今日こそはと思ったが今にも降り出しそうな空。天気図も絶望的。(梅雨前線の如きものが停滞気味である。) 今後2,3日はまだだめだろう。しょうがないのでB.C.の撤収を開始する。期間はまだ2日有るので最後の望みをかけて広瀬、越田、藤安の三人でウインパーに残って、Dリッジをねらう事にして、存藤ら5名でカマボコの方を撤収して猿倉へ下ってまろう。さびしくなったテントの残りものを食ったりラジオを聞いたりして時間をつぶす。空はますます

暗くなり、時々小雨がパラつく。

3月30日（曇・微雨）

4時起床一面ガス。やはり今日もだめだ。9時の天気図を取る。やはり絶望的。藤安、越田は残念無念と云った表情。遂に撤収と決める。残念なり。ノケ日間の樺平生活に別れを告げる。残りものを捨てるのをさう奴がいて荷は相当に重く、雪の腐ったナイフリッジの降りがちょっと心配である。出発前、藤安と越田は第一フィックスに使ったアイスハーケンとカラビナを回収に行く。往復一時間も費やしてフーフー云って帰ってくる。ナイフリッジの降りはやはりちょっと危険を感じた。アイゼンにだんごの様にくっつく雪に苦しみながら1時間半もかかってコルにたどり着く。快適であるべきスキーもこう荷が重くては辛い。高校のテントには高一生二人だけがいて他は小屋へ天気図を取りに降りているとの事。紅茶をごちそうしてくれる。小屋につく。みんなちよっぴがっくりした様子だったがやがて雨となって我々の感が当たったと云う事になる。4時の天気図も悪いので高校も雨の中を撤収して来る。今晚はニギヤカだ。中学生、高校生、大学生、それに、山本、山下両先生、久し振りの氷のめしを食い、ささやかなコンパをやる。明日は大学撤収と決定。

樺平(12,30)——コル(14,00～14,30)——猿倉小屋(15,30)

3月31日（雨）

撤収。スキーで行けるところまで行く。霊林署の小屋からは、中学生を先頭に勇ましく？ 行進。ずぶぬれで細野は徳栄さん宅にころげ込む。風呂に入りさっぱりし、鉄道便で送るものをパッキングしたりしてから解散とする。越田、伊藤、藤安、高校の安井は残って八方尾根へスキーに行くと云う。無事合宿を終えた安心感と、アタックし残した残念さでなんとも云えぬ気分である。すっか

りガスに包まれた山々に別れを告げ車上の人となる。

～おわり～

春山アタック記録

1. 白馬嶺北稜登攀記

藤安賢一

3月22日 3時起床、天気快晴、気温-6℃

メンバー 広瀬、藤安

我々の第一目標である北稜の登攀期日、我々はこの日の為に過去半年間、希望での検討、秋の假寐、そして入山してから今日迄、下から、そして横から、大体所究はしつくしたつもりである。後は登攀あるのみである。

広瀬と僕はもちを食い、黙々と用意する。ザイル、ツエルト、ハンマー、ハーケン、その他、前日にとりそろえたものをサブザックにつめる。アイゼンをはく。樺平発4時30分、星がキラキラ輝き、美しい空である。しかし、杓子沢に足をふみ入れるとなま暖かい風が吹き、熱気味である。雪はわりと硬い。少し安心する。取付着5時、まず心を静める。キジをうつ。登攀開始5時15分。時間をかせぐためザイルをつけずに行く。我々は使素によってその尾根の長さから見て相当の時間がかかるものと見なした為、行ける所は、ノーザイルで

行こうと云うのが事前の考えであった。急斜面の広い尾根である。ブッシュを利用して強引に登る。ゆるやかな尾根に出る。少し行くとナイフリッジに出る。たいしたものではない。5時45分。これは、第一ピーク迄続く。乗り越すと広い尾根。狭くなって次のピーク迄続く。それを見ながら中央ルンゼ側へ落ち込んでいる沢の上で小休止。ここ迄雪庇は、杓子沢側へ張り出し1mほどにも達する。雪の状態はかなり歩き良いが、ところどころ凍り込みや入り込みが有りとする。6時25分出発。どんどん登る。雪壁状を乗り越す6時35分。1m半程の雪庇が足下にある。細い鋭角の尾根10m程続いて、6m程の雪壁状を登る。細いリッジを乗り越すと第2ピークの上に立つ。軍艦型ピークが見えた。じやんじやん行く、雪のつまったガリーをつめる。かなりの急斜面であるが、ブッシュを利用して強引に登る。尾根上に出ると少しの間ふとももまでのラッセルが続く。その間6m程。やがて雪がしまり硬いところに出た。7時15分。ここ迄ところどころピークをのっこす為、雪壁状のところを登らなければならない。行くうちに尾根は細くなり雪稜の連続である。軍艦型ピーク手前の登りるアンザイレンする。7時35分。軍艦型ピークの稜線上に立つ。8時25分。ここからものすごい雪庇と雪稜が眼前につづいている。それを横目でにらみながら休む。のどがからからである。紅茶を飲み、食物で腹をいやす。少しフアイトと自信が出る。約15分間休む。我々は確保に完全を期し、再び進む始める。一步一步、足場を築き慎重にしかも素早く、中央ルンゼ側の雪壁と化して切れ込んだところをトラヴァースする。雪庇が頭上にある。このあたりは今迄とちがい雪庇は中央ルンゼ側へ張り出し、杓子沢側へは細い雪稜をのこして、すい込まれる様に落ちこんでいる。行けそうにもない。通過。だが緊張は続く。雪稜となった雪庇の上を歩かねばならない。雪庇の高さは1m程くらいである。無事通過する。目の前に凸型にとびだした岩がある。粉雪がかぶさり雪稜の如く見える。杓子沢側をトラヴァースする。4ピッチ目、再

が細いナイフリッジである。傾斜もきつく、くずれそうである。だがわりに雪はしまっている。次に我々が出たのは、ハエマツのある雪段である。掘り出し、掘り出しゆっくり進む。その姿、魚が木枝をわたるが如しである。6ピッチ目である。ようやく大ギマツ上についた。10時30分。ここから稜線沿いに約20m右側へ下る。ケンスイピンとなる水をさがす。あった。おあつらえむきである。その下にもう一本ある。まず最初の水で下る。次に他の水で大ギマツにおり立つ。正面に小ピークがある。我々はこれに取り付かずその手前にある岩を支点に再びケンスイし、北稜ルンゼに降り立つ。ここからは上半部サポート隊、伊藤パーティのトレースがある。その後をついて行けば良い。ゴルへ出る。ゴルから再び登る。雪がくさりかけている。登りきって稜線に出る。ここを初めて大休止をする。11時30分～12時。「がんばれあと少し、7時30分通過、伊藤」と云う紙きれが残してあった。上半部隊の伝きである。

さて、中央ルンゼへ下る。ルンゼは隅の光がほぼ直角にあたり、雪崩の危険を充分に感じる。無気味である。トレースの後をつたいルンゼを降り始める。ザイルはつけたままである。痛かに、まったく神経がつかれる。ルンゼ上部には一、ニヶ所キレフが主じている。ここをほっとする。その後は雪もしまり快適にアイゼンがきく。調子よく進む。だが気分も歩速もいさこかゆっくりである。雪と岩とのミックスを通過し、ようやく頂上に立つ。1時20分。彼と私は握手を交した。いい気持である。この一瞬の感激、自己満足の極限と云うべきであろう。知らぬうちに我々の顔はほころび、どちらからともなく笑いかけている。帰途につく。杓子沢1時50分。ここを再び紅茶を飲み、腹をいやす。杓子岳頂上は2時15分頃通過した様に見える。ジマクションでは、ドッカーリ腰をおろし、我々の聞いたの場であった比叡をしみじみ眺めた。帰幕3時40分。

附 記

以上、雪嶺中速記した記録を僕の主観を文えて、まとめてみたのであるが、この尾根が僕の想像していたよりむしろはるかに困難であったのにおどろかされた次第である。正直なところ、あれほどとは思っていなかった。もちろん尾根全体が困難であると云うのではなくて、軍艦型ピークと犬ぎしアップの間にその困難性が集中している様に思ふ。もちろん、距離的にも短かく全体の5分の1ぐらいである。樺平風江から見た時は中央レンゼ側は少しぐらい中があるだろうぐらいに考えていた。従って、本意をかえってその尾根がよけいに細く見えたのかもしれない。硬い岩ではない。相手は雪である。しかも雪の状態は絶好のコンディションと云う訳でもなかった。軍艦型ピークの稜線上に立つと、そこから、始まるスゴイナイフリッジにいきさか驚くのである。始めのうちは、(先述の記文では2ピッチ目に当る)雪庇が岩をおおって中央レンゼ側に張り出していて杓子沢側はのぞくことすら出来ない。我々が進んだのは中央レンゼ側なのであるが、雪庇の下は50cmぐらい岩肌が露出していて、その下の部分から再び雪が付き、雪のつきぐわいは下向きの拋物線を真二ツに切った様な型になっており、これが約3m程ある。次に雪庇を乗越して稜線上に立たねばならない。この雪稜を5m程進んで雪庇の上に立つ。サイドは中央レンゼ側は雪庇となっている為め、杓子沢側は急すぎて無理、従って雪庇上を通るのは不可否である。しかし、高さが2m程あり、そんなに飛び出していないからまず安心である。ここの少し上でビレーをする。小さなピーク状を乗り越えて少し行くと先述の凸型の岩にぶつかる。これが雪稜の様に見える事は前に述べたが、払いのけると凸型の岩である事がわかる。この飛び出した岩の大きさは、三人の人間の手を取り巻く事が出来るぐらいの範囲であり、高さは肩の辺りである。広瀬は非常に苦労してこれを乗り越えて向う側へおりたが、僕はこれの杓子沢側をトラヴァースし容易に向う側へ出る事が出来た。この岩の前を確保をし岩の後で再び確保した。

これが先述の△ピッチ目になる。ここから再び雪庇が中央側へ張り出しているが、杓子沢割をトラップアース気味に造る。約30m程。後は雪稜であるが、ここを再び小ピークを乗り越す。この部分は、雪がやわらかく不安定である。この登りが約30m程。登りきって雪稜を少し行くと、遠松の上に雪がかぶったナイフリッジである。ピッケルは使用不能。遠松を振り出して、手ずかみにし、四つん這いで行かねばならない。四つん這いの間は約20m半程であったが不安定で非常に長く感じた。その後はピッケルを用いて雪稜を進み大ギヤップ直上に出る。ここから20m程下る事は前に述べたが、アツアツザイレンをとする為の水はすぐわかる。困難と思われるのは大体以上の所である様に思われる。その他の部分はどんどん登る事が出来よう。

上半部については大関が詳述する事になっている。



1. 取付附近の尾根は、少し複雑であり、支尾根が出ていて、一本の線としてその稜線を表す事は出来ない。従って文中の第一ピーク及び第二ピークを明確に指摘するのは困難である。従って又、取付の選定をあらまると、無駄な時間を費す可能性が大である。

2. 雪底が杓子沢側に張り出している事以外別に問題はない。



3. この部分の最初のピークを軍艦ピークと我々は呼称している。このピークの手前でアレンゲイレンをしたのである。又、この辺りは雪底が中央側に張り出している。ブッシュを利用することは出来ない。

2. 白馬鑛岳北山稜上半部登攀

大関 和夫

〈パーティ〉 伊藤久三郎(E3) 倉巖 秀次(E2)

大関 和夫(E2)

カンバ平のテントから真二子岩の頭めがけて登る。この急斜面は割とこたえる登りである。杓子沢へ杓子東壁を頭上にあおさながら降りる。杓子沢はツイルムクラストしており、時折ドスンと足が落ち込み歩きにくい。取付のルンゼは前に偵察していた下のないのを登る。登るにつれて急になる。キックステップをどんどん高度をかせる。ルンゼの上部に陽が当たってきたので、急いで登り切った。北稜を下半と上半に分けるキレット状の岩峰の下のコルにたどりつく。ここでアンザイレン、草付きの不安定な壁をスタカットで進む。登ると又コルである。ここから中央ルンゼへ下降るピッチでルンゼに降り立ち、ザイルをはずす。中央ルンゼを上部に見える三角形の岩峰めがけて登り左手のコルへ。杓子沢側のルンゼへ下りる。この辺りからは杓子東壁の圧倒的フランケがのぞまれ、又、北稜の岩稜とちよっとアルプス的な、ながめである。ツルム附近で一息入れる。北稜も上の方は雪が風の為少なく、岩とミックスした氷雪でアイゼンがきみにくい。ツルムを越し雪稜をたどって頂上へ出る。キラキラと氷の城の様にかがやく剣、毛勝三山を黒部の谷をへだててながめる時、何か剣になっかしさを感じる。風が強くなって来たので白馬鑛ヶ岳を後に杓子岳へ向う。途中、同志社のパーティに会う。杓子の雪庇はB尾根、C尾根上部で割れており、ちよっとすごい。杓子岳よりの下りはフイックスを使ってどんどん降りて行った。雪は割と不安定で、大雪渓側をトラバースをする時、今にも

雪崩そうで気持が悪い。下半部から登っている広瀬、藤安の姿が北稜の岩峰の上をのろのろと動く。大分やばそうだ。こっちは杓子尾根から、声をはり上げてガンバレーと手を振る。ジヤンクレーションピークからアイゼンにつくだんごを気にしながら、ゆっくりと満ち足りた気持で下って行った。奥双子の頭の上に3つの影がある。キーパーの連中がアタックを見守っているのだろう。若い様な雪稜をたどって、皆のいる奥双子の頭へ。テントは下にオレンジ色もあざやかに見える。プリズムで、広瀬パーティの登攀を見つめる。キレットも下りた様なので、皆をテントへ降りはじめた。

B.C (5.30)—— 取付 (16.00)—— キレット (7.00)—— 三本鎖コル (8.00)—— ツルム (8.30)—— 白馬鎖岳 (9.00)—— 杓子コル (9.25)—— 杓子岳 (9.45)—— J.P (10.30)—— B.C (11.00)

3. 杓子岳東壁A尾根

越田和男

3月23日 (晴)

Member. 越田和男(S.3) 倉藤孝次(E.2)

樺平B.C (5.00) の気温 -4°C 。日の出も間近い東天のわずかにロートする中をB.Cを出発、杓子沢へのトラバース地点は、樺平から雪の斜面を一登

りしたところのゴル(2,300mのゴルともよばれる)である。完全にクラストしているのが快適ではあるが、杓子沢の長いトラバースでは足首が痛くなる。A尾根の末端は、一つ大きな尾根の向う側の少し奥まったところである。岩が露出しているがどこからでも取付けそうだ。古いデブリの上を末端めがけて直登する。傾斜は急で下手にスリップでもしたら助かりそうもない。A尾根の末端のすぐそばまで来た時、突然バシッと音がして目の前の斜面に氷が入ったが、全く安心しきって登って来たところをふい打ちされたのでドギモをぬかれてしまった。それで正面から右手へ逃げ、少し入ったところで急なガリー? に取付く。早く尾根に出たいのをアイザイレンせずにかuttingとキックステップでこのガリーを這い登る。ガリーの上は傾斜45°位の雪壁がずっと続いている。傾斜のやや緩いところまでそのまま進み、バケツを掘って一休み。ここをアンザイレンする。(6.20) 雪壁の登りは容易だが慎重を期してスタカットで進むことにする。(正直のところ、ここまで来るとかなりの高度感で、その上クラストしているのがビレイなしでは不安だったのである。) 雪壁の上の二本の樺の木を目指して30m5ピッチで雪稜に出る。最後の1ピッチを登る時トップの倉蔵の前で又バシッとやったがどうする事も出来ずそのまま乗り越してしまう。双子尾根を登る伊藤のパーティとこの時ゴールを交わす。キーパーの広瀬も一人でポコポコと下の方から見物に登って来るのが見える。雪稜に出るとクラストして足首までもぐる。コンティヌアスをジマンジマン登っている間は快適である。双子尾根の三人と盛んに何やら叫び合う。頂上直下の壁に来た時、向うの三人もすぐそばまでやって来て写真を撮ってくれたりする。トラバースして双子尾根に出た記録もあるが、今はまっすぐ登った方が良さそうだ。1ピッチで容易に頂上へ出る。(クラストしていない。) 稜線は相変わらず風が強い。白馬まで行く。伊藤、森本、二谷の三君につきあって杓子の下まで同行する。この寒い中を白馬まで御苦労さんだなと思いながら急ぎ足でトンゴする。フィック

スドザイルはこう云う時実に有難い。頂上から樺平まで25分で下りてしまった。テントではキーパー連から速やすぎて休む暇もないとブツクサ云われる仕まで、全くあっけないアタックであった。

B.C (5.00)	杓子沢へのトラバース地点 (5.20)	A 尾根末端
(5.45)	雪稜 (7.20)	頂上 (8.00)
		B.C (8.45)

4. 双子尾根より白馬往復

森本 全彦

リーダー 伊藤 (E.3) ニ谷 (E.1) 森本 (L.1)

3月23日 (晴)

越田、倉藤を送り出してから、しばらく胃をおいて出かける。

ニ谷は、まだ風邪がなおらないらしく、森本トップでゆっくりとしたピッチで行く。

左前方Aリッジの越田パーティーの姿をもとめながら進んで行く。いっこうにみつけることが出来ず、じらしたのだろうと、時々立ち止まる。

シマングレシンの手前で二人を見とめる。直ちにカメラを取り出し、二人の黒点を写す。杓子頂上まで平行に進んで行くが倉藤のピッチ非常に速く、僕等と同じ位に頂上へたどりつく。二人は、疲れもゼンゼン見せず、杓子北岩稜の見える所まで共に行く。そこで越サンより、北岩稜の写真をとられる。雪が全くなく、すごい岩場である。今日の目的であるAリッジは無事すみ、残りは僕達だけである。ハリキッテる人は、もくもくと進む。左手に夏の合宿地へ

ながめながら -----。 黒部側から吹いてくる冷い風、「チフショウこの
見野郎」とあまりにも無情な風の愛撫を少々バテ気味になって来た身体をうけ
止めながら。

風が強いので、ともすれば片足を上げたひょうしに、姿勢がくずれる。アア小
さい君はそんなアア。(そんな事はない大きい方が風当りが強い)。

昨夏感えてしまった小舎に来た時は、3人ともバテが顔に表われていた。でも
トッポニ谷は、頂上めざして、どんどん進んで行く。自分もうしろをふりむき
クソ、ノンキちゃんごときに敗けてたまるか)といいきかせながら、ニ谷の
後を追う。

「アア、シンドカッタ。ここが頂上か」ほんの一瞬勝利の女神がおとずれた。
ヨーカンを各々食べながら、両眼に写しとった山の名を、ノンキさんに問ねる。

冷寒においたてられながら小屋の焼け跡にのかれる。

食事にしたが、みなあまり食べずにホット紅茶を身体をあたため、そこそこに
してひきあげるなり。

大関さんに「ロク、白馬からの景色はエエゾー」と云われたが、まさにそのど
おりであった。 もう一度云わしてもらおうが、風が強いのと冷たいのにはまいっ
てしまった。人間はガマンがだいじと誰れかが云っていたっけ。

杓子にたどりつきやっと冷風ともおわかれだ。 ジャンクションに残っている
「とってもウマイ物」を食べる。

テントに着いたとたん、みんなとおおいにはしゃぎ、もう一度白馬へ行けるば
かりの元気を取りもどす。 山の味は、この時はじめて味わえるのであろう。

6.20 テント発 —— 7.15 ジャンクション —— 7.55 杓子頂上 —— 9.10
白馬本峰頂上 —— 9.20 白馬山荘で休けい(10分) —— 10.35 杓子頂上 ——
11.25 テント着。

春山行動表

月	日	場所 距離	袖戸	堀野	鎌倉(BH)			BC	A	備	考
					(1500m)	(1800m)	(2000m)				
3	9									先発隊 5名 出発	
3	9									本隊 5名 出発	
3	10									全員ボッカ往復	
3	11									本朝伊藤隊合泊、他はボッカ往復	
3	12									2名 鎌倉 8ヶへ全員入る	
3	13									B, C へ ボッカ	
3	14									B, C へ 2名入る。芦田福井下山	
3	15									B, C へ 全員入る。	
3	16									沈 殿	
3	17									3名ザイルフィックス 3名コルへつくと返す。 越田入山	
3	18									6名コルへボッカ	
3	19									双子尾根より杓子岳へ	
3	20									沈 殿	
3	21										
3	22									本朝、蔵文北線完全登はん。 伊藤、倉蔵、大関 北線上半部	
3	23									伊藤、森本、二谷、甘馬へ。 越田、倉蔵、A尾根	
3	24									沈 殿	
3	25									4名コルへボッカ	
3	26									沈 殿	
3	27										
3	28									全員鎌倉往復。高成と連絡	
3	29									4名鎌倉へ下る。	
3	30									3名鎌倉へ下る。	
3	31									徹 収	

『合宿後記』

広瀬 健三

23日間という吾々にとっては比較的長かった今合宿を振り返る時、若干の盛衰を
逃し、全計画をこなし得なかったものの、長きチームワークのとれた満足すべき
合宿であったと思っている。これは何よりも各部長の合宿を成功させんとした
意欲の賜である。年頭にして登山計画を発表、部長の心にその目標をはっきり
植えつけたことは、今時に於いては良い結果を生んだ様である。しかし何時の
場合も早く発表するのが良いとは言えない。かえってそれに縛られて終い混乱
を来す恐れがあるからだ。でも方針が確定すればなるべく早く発表、部長がそ
の合宿に対して意欲を燃やす様に持って行かなくてはならぬと思う。

前半は天候に恵まれた合宿も後半に入る頃からずれてしまい、遂に杓子ドリッ
グ、ブリッダの盛衰を断念せざるを得ない結果となったが、今一歩、アタックの
チャンスをつかみ方、及び4名というリーダーをフルに動かしたならば、更に成
果を上げられただろう。やはり積雪期に於いて放射状登山を行うならば、毎日の
目をつかんで1時に出来るだけ多くのパーティを出す様に持って行かないと成功
率は低い様である。その点吾々はまだまだ未熟であったがこの種の合宿は吾々
としては初めての試みであったのだからより確実性を持たした意味では吾々のと
った方法も良かったと思っている。終りに、合宿前の山岳会でいろいろと御生
意して下さいました先輩諸兄に心から御礼申し上げます。

附 記

“雪崩の観測”については、我々の二週間渡る樺子生活中にこれといったものがなかったのを発表も出来ないが、これは自然発生の雪崩がなかったと云う事なので、あの程度の天候、積雪量では杓子沢は安全であるとは決して云えないのである。我々は杓子沢の雪崩には特に気を使い、新雪の降った翌日は例え晴れても沢へは入るなどの通則に従って行動したのである。28日もこういう訳で快晴だったが全員で旅倉までツアーした。この時長走沢に新雪雪崩の跡が認められたが、これが我々の合宿中に起った唯一の雪崩だと思う。これは前日が完全な冬型気圧配置で一日中降ったのだから当然出るべきものだった。

“気象の観測”については、天気図を毎日、午前9時、午後4時及び10時の三回記録して全員でよく検討しあった。それをデータとして着山の気象を更に研究してここに発表すべきなのであるが、残念ながらまだまとまっていない。天気図と天気は記録として部屋に保管して、今後の研究の一資料とした。流滅するにせよ、行動するにせよ、全員がその日の天気図を頭の中に浮かべながら、天気の変り変わりを観察していくと云う事は大変大事な事だと思う。

(越田記)

『春山装備一覧表』

テント

6人用カマボコ型(綿)

No. 6

3人用ウインパー型(ナイロン)

No. 9

スコップ 大型	2	
エンピ 小型	1	小日向コルデボ
ホエーブス	3	
大なべ	1	豚舎B.片用
中なべ	4	(100円也の金ダライ)
のこぎり	2	
なた	1	
色丁	2	
ささら	10	
やかん	1	
食糧用一斗缶	10	
ガソリン	30L	
2Lポリタンク	4	うち1つ 食糧用
1Lポリタンク	4	
4Lガソリン缶	5	
竹ごお(赤旗)	60本	B.C~ 豚舎周 40本
スピッツエ	2	コルにデボ

ガイル 12mmナイロン	2	30m
12mm 麻	3	30m うち一本は猿倉
フィックス用	70m	船泊用 12mm 麻ロープ
すてすな	10m	
ハンマー	4	
ロックハーケン 縦	10	フィックス用二本使用内一本回収
〃 横	10	
ハイスハーケン	6	フィックス用に一本使用回収
ハイスバイル	1	
ナスロン ツェルト	1	No. 4 使用せず
線 ツェルト	1	No. 3 猿倉
カラビナ	12	フィックスに二本使用、うち一本回収
携帯ラジオ	1	
寒暖計	2	
携帯燃料	5	使用せず
ローソク	18	使用 12本
背負子	3	
その他		

装 備 後 記

藤 安 賢 一

新品のナイロンテント No.9は、明るくて非常に良いが、真行きがだいぶ狭い。勿論寝た時の話である。従って四五人用であるこのテントには、實際的に云って縦に三人寝るのがせい一杯である。今後天幕を新調する際には、広さ又は入口の大きさ、或いは天井からローソクをたらす事が出来る様にするとか、普通入口に付いているゴミ出し場を真中にも設ける（ラジュースを使う時に便利である）とか云った様に色々と考えて、こちらの注文通りに作らす様にすべきである。

エンピの小型； デボ物を掘り出す為にその場に放置してあったのであるが、雪が降れば、何もかもうずまってしまう、結局は手とピッケルで掘らねばならなかった。もっとも今度の場合は雪洞を掘る為に所持したのであるが、その必要がなかった為が無駄骨となってしまった。

ボエーブス； この附録としてペンチを持って行くのを忘れたが、これも掃除用具ぐらいに止め、出発前に入念な点検を行い、ペンチがなかったらラジュースがつかないと云う様な事が無い様にしたい。このような事はあたりまえの事であるが、物が最新式の上物である時にはつい忘れがちとなる。

100円也の金ダライは中々良らしい。これに両側に、空をあけて針金を通すと立派なナベとなる。今回は一度の使用で捨てて来たが、合宿期間が短ければ、2度の使用も可能であろう。

ササラは10本持って行ったのであるが、これはつぶれやすいものであるから、この位の数は必要であった様に思われた。

竹ざおと赤布は別に数を合わす必要はない。竹ざおは自ずからその本数を制限されるであろうが、赤旗は軽いものであるし、どこにでもひっかけられる事が出る。

三つ道具； 内容は前記の通りであるが、重量と不必要さから猿倉に於て若干を除いた。

その結果ハンマー4、ハーケン各5、アイスハーケン6、カラビナ12という数になった。勿論これで絶対数はたりていたのであるが、ロックハーケンの少なさは、何としても失敗であったと云わざるを得ない。気分的にいつでも打つ事が出来ないというのは非常な弱みであった。しかもフィックス用に、ロックハーケン2、アイスハーケン1、カラビナ2、を使用した為、その少なさは痛切に感じられた、だが絶対数はたりていたのである。しかし装備係である僕としては、気分的に云って心細かった点について深く反省している次第である。

アイスパイル； 我が山岳部に於て初めて使用したものであるが、仲々便利で、本ールドが1つ増えた事となる。この様なものを使うのは邪道であると云われる人がおられるかも知れませんが、僕としては、アブミ等と同等に考えられ大いに使って差支えない様に思う。

ツエルト； 綿の方は北校アタックメンバーの減少化から、使用不必要となり、従って猿倉に置く。ナイロンの方は北校アタックの際に所持したのであるが、ジイバークの必要がなかった為、使用しなかった。

春山食糧について

森本全彦

食糧隊の相言葉である。

1. 調理が便利であること。
2. 軽いこと。
3. カロリーが多いこと。
4. 食べ易いこと。

これ等4つの事を基盤に計画を練ったのであるが、全部みたす事はとうてい出来ない事は明らかであり、特に4は、計画より一歩はずすことにした。食糧品目は次に示す通りである。ここを特に最初より問題となったのは、主食に餅を使用する事である。これは皆よりの意見を聴き、出来るだけそれにどうよう努力した。即ち、餅は全廃に早くもっていくべきであるが、今回直ちに全廃するというようなことはさけ、漸次もっていくべきだという結論に達し、よって今回においては、朝と夜の二回はそば・餅を交代にすることにした。しかし餅を最少限にいくとめるため、沈没の時はパン、そばにしてアタックに行かぬ者は餅の数を減らすことにした。(3日に一度行動出来ると考えて)野菜は制限をうけるので、どうしてもビタミン不足となり勝ちである。これはビタミン剤で補うことにした。

山での行動において3,000カロリー以上の熱量を必要とする。他のスポーツのように短時間の激しい運動においては、炭水化物(穀類・いも類・豆類)をよ

り多くとるべきであろうが、登山においては寒さ、長時間のアルバイト、日数の長い事を考えねばならない。

日本は炭水化物がエネルギー源としての位置は大きい。我々部員もこの習慣から逃がれることはできない。短時間であれば、炭水化物をエネルギー源として行動しても差つかえない。しかし長期間になり、寒さも考慮せねばならぬ登山にとっては、貯えられるエネルギー源を必要とする。もう少し炭水化物を減らし、それを脂肪(肉類・卵類)で補うべきだ。また蛋白質(肉類・粉乳・チーズ)はあまり体内で熱量供給にはならないらしいが、寒さを防ぐという点では欠がしてはならない。主食に餅を使用し、腹もちがいいと感じたのは食べ過ぎであって、胃腸を悪くするものである。本当の熱量の面から云えば脂肪の方がより腹もちがいいわけである。多く食べなければ(満腹感をもたなければ)動けないという考え方はやめるべきだ。アタック食、非常食においてはソーセージの類はあまり好ましくないと思う。この場合こそ炭水化物(菓子類)を用いるべきだ。

長期間の合宿となるとどうしても食欲が減り、目にみえて疲労の色がみえることがある。このようなことをなくすため、ちょっとした調味料を用い、少しでも食欲をそそるよう心がけよう。最近特に食糧がよくなったといわれるが、次はよりおいしく、より喜ばれ、より合理的なものとなるよう心がけ、より楽しい山行にしたい。

食糧一覽表

<主食>		ソバ	30袋
米(B.Hのみ)	3斗	パン	200ヶ
モチ	2斗	カンパン	200袋

< 副 食 >

ソーセージ 100本

ハム ㊦ 5本

チクワ 100本

野サイ 人参
大ウレン草
赤ネギ
白サイ

玉ネギ } B.H. のみ使用
ジャガイモ

乾ブドウ 50袋

チーズ 15P

ベーコン 2kg

● バター 15P

< 飲 糧 水 >

紅茶 5P

スキムミルク 10箱

ココア 3P

< 調 味 量 >

塩 3袋

シヨウ油 1升

コシヨウ 3本

味の素 3袋

砂糖 20斤

< ア タ ッ ク 食 >

チーズ

乾ブドウ

アマナット

チョコレート

ソーセージ

2000年12月29日

1994, 1995, 1996, 1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021, 2022, 2023, 2024, 2025, 2026, 2027, 2028, 2029, 2030, 2031, 2032, 2033, 2034, 2035, 2036, 2037, 2038, 2039, 2040, 2041, 2042, 2043, 2044, 2045, 2046, 2047, 2048, 2049, 2050, 2051, 2052, 2053, 2054, 2055, 2056, 2057, 2058, 2059, 2060, 2061, 2062, 2063, 2064, 2065, 2066, 2067, 2068, 2069, 2070, 2071, 2072, 2073, 2074, 2075, 2076, 2077, 2078, 2079, 2080, 2081, 2082, 2083, 2084, 2085, 2086, 2087, 2088, 2089, 2090, 2091, 2092, 2093, 2094, 2095, 2096, 2097, 2098, 2099, 2100, 2101, 2102, 2103, 2104, 2105, 2106, 2107, 2108, 2109, 2110, 2111, 2112, 2113, 2114, 2115, 2116, 2117, 2118, 2119, 2120, 2121, 2122, 2123, 2124, 2125, 2126, 2127, 2128, 2129, 2130, 2131, 2132, 2133, 2134, 2135, 2136, 2137, 2138, 2139, 2140, 2141, 2142, 2143, 2144, 2145, 2146, 2147, 2148, 2149, 2150, 2151, 2152, 2153, 2154, 2155, 2156, 2157, 2158, 2159, 2160, 2161, 2162, 2163, 2164, 2165, 2166, 2167, 2168, 2169, 2170, 2171, 2172, 2173, 2174, 2175, 2176, 2177, 2178, 2179, 2180, 2181, 2182, 2183, 2184, 2185, 2186, 2187, 2188, 2189, 2190, 2191, 2192, 2193, 2194, 2195, 2196, 2197, 2198, 2199, 2200, 2201, 2202, 2203, 2204, 2205, 2206, 2207, 2208, 2209, 2210, 2211, 2212, 2213, 2214, 2215, 2216, 2217, 2218, 2219, 2220, 2221, 2222, 2223, 2224, 2225, 2226, 2227, 2228, 2229, 2230, 2231, 2232, 2233, 2234, 2235, 2236, 2237, 2238, 2239, 2240, 2241, 2242, 2243, 2244, 2245, 2246, 2247, 2248, 2249, 2250, 2251, 2252, 2253, 2254, 2255, 2256, 2257, 2258, 2259, 2260, 2261, 2262, 2263, 2264, 2265, 2266, 2267, 2268, 2269, 2270, 2271, 2272, 2273, 2274, 2275, 2276, 2277, 2278, 2279, 2280, 2281, 2282, 2283, 2284, 2285, 2286, 2287, 2288, 2289, 2290, 2291, 2292, 2293, 2294, 2295, 2296, 2297, 2298, 2299, 2300, 2301, 2302, 2303, 2304, 2305, 2306, 2307, 2308, 2309, 2310, 2311, 2312, 2313, 2314, 2315, 2316, 2317, 2318, 2319, 2320, 2321, 2322, 2323, 2324, 2325, 2326, 2327, 2328, 2329, 2330, 2331, 2332, 2333, 2334, 2335, 2336, 2337, 2338, 2339, 2340, 2341, 2342, 2343, 2344, 2345, 2346, 2347, 2348, 2349, 2350, 2351, 2352, 2353, 2354, 2355, 2356, 2357, 2358, 2359, 2360, 2361, 2362, 2363, 2364, 2365, 2366, 2367, 2368, 2369, 2370, 2371, 2372, 2373, 2374, 2375, 2376, 2377, 2378, 2379, 2380, 2381, 2382, 2383, 2384, 2385, 2386, 2387, 2388, 2389, 2390, 2391, 2392, 2393, 2394, 2395, 2396, 2397, 2398, 2399, 2400, 2401, 2402, 2403, 2404, 2405, 2406, 2407, 2408, 2409, 2410, 2411, 2412, 2413, 2414, 2415, 2416, 2417, 2418, 2419, 2420, 2421, 2422, 2423, 2424, 2425, 2426, 2427, 2428, 2429, 2430, 2431, 2432, 2433, 2434, 2435, 2436, 2437, 2438, 2439, 2440, 2441, 2442, 2443, 2444, 2445, 2446, 2447, 2448, 2449, 2450, 2451, 2452, 2453, 2454, 2455, 2456, 2457, 2458, 2459, 2460, 2461, 2462, 2463, 2464, 2465, 2466, 2467, 2468, 2469, 2470, 2471, 2472, 2473, 2474, 2475, 2476, 2477, 2478, 2479, 2480, 2481, 2482, 2483, 2484, 2485, 2486, 2487, 2488, 2489, 2490, 2491, 2492, 2493, 2494, 2495, 2496, 2497, 2498, 2499, 2500, 2501, 2502, 2503, 2504, 2505, 2506, 2507, 2508, 2509, 2510, 2511, 2512, 2513, 2514, 2515, 2516, 2517, 2518, 2519, 2520, 2521, 2522, 2523, 2524, 2525, 2526, 2527, 2528, 2529, 2530, 2531, 2532, 2533, 2534, 2535, 2536, 2537, 2538, 2539, 2540, 2541, 2542, 2543, 2544, 2545, 2546, 2547, 2548, 2549, 2550, 2551, 2552, 2553, 2554, 2555, 2556, 2557, 2558, 2559, 2560, 2561, 2562, 2563, 2564, 2565, 2566, 2567, 2568, 2569, 2570, 2571, 2572, 2573, 2574, 2575, 2576, 2577, 2578, 2579, 2580, 2581, 2582, 2583, 2584, 2585, 2586, 2587, 2588, 2589, 2590, 2591, 2592, 2593, 2594, 2595, 2596, 2597, 2598, 2599, 2600, 2601, 2602, 2603, 2604, 2605, 2606, 2607, 2608, 2609, 2610, 2611, 2612, 2613, 2614, 2615, 2616, 2617, 2618, 2619, 2620, 2621, 2622, 2623, 2624, 2625, 2626, 2627, 2628, 2629, 2630, 2631, 2632, 2633, 2634, 2635, 2636, 2637, 2638, 2639, 2640, 2641, 2642, 2643, 2644, 2645, 2646, 2647, 2648, 2649, 2650, 2651, 2652, 2653, 2654, 2655, 2656, 2657, 2658, 2659, 2660, 2661, 2662, 2663, 2664, 2665, 2666, 2667, 2668, 2669, 2670, 2671, 2672, 2673, 2674, 2675, 26

[illegible]



双子尾根カンバ平のキャンプからのぞむ杓子鑓東面は美しい。急峻な雪の壁の杓子原鑓鑓北稜の岩稜、白馬三山のうちでは、秀れたバリエーションルートである。後立山連峯はフオッサマグナ、すなわち、糸魚川―大町―松本にかけての大断層線に沿っている。したがって東面は急斜面を落ちこんでおり、西面は比較的緩傾斜である。杓子岳白馬鑓岳もその例に洩れない。杓子鑓東面の岩は無雪期は手のつけられない、アンサンドロックであるが、積雪期は氷雪にコンクリートされて、スケールは小さいながらも、秀れたバリエーションルートを私達に与えてくれるのである。積雪期の杓子東壁が、福田、山口先輩により初登攀されてから、すでに二十数年の歴史を持っている。しかし、これを完登したパーティはようやく十余を数えるのみで、そのほとんどが残雪期の五月である。後立山の積雪期に於ける共通の問題である悪天候は登攀を困難にし、更に地形の特異性と多雪により暴発する雪崩は容易に登攀の機会を与えない。又、報告や記録が余り一般に発表されていないので、一部の人達以外には知られていない。後立山東面では特異な部分であろう。

登攀小史

杓子東壁

杓子東壁を初めて登った甲南高校山岳部と当時の日本の登山界について（特に学生登山層）少し触れてみよう。「日本の登山界の枢要な位置をしめる学生登山層は、ヒマラヤを想定しての極地法その他の集西登山へと移行していったのである。立教のナンダゴット遠征はその一つのピークであった。しかし学生登山層のすべてが、そうした傾向に向ったわけではない。ごく一部ではあったが、より困難な登攀こそ登山者にとるべき道であるとした一派があった。東京高次、浪高、甲南、松高等に代表されるものである。」（吉田二郎著―鹿島槍研究―P129より）この様に、私達の先輩は穂高に類しそして鹿島槍、不帰、白馬東面

に輝かしい数々の足跡を残していったのである。1937年3月、甲南高の山口雅也、福田義次先輩によりD尾根の初登が行われた。その後翌々年1939年3月、関西学院大学の浅野広三、小倉續、永野寛の三氏によりA尾根より白馬嶺岳北山稜下降というファスト、トレースがなされた。戦前の登攀はこの2っだけの様である。その後、戦争の為山は静寂な年月を経たが、1954年3月登嶺会の吉田二郎氏の単独登攀が戦後の杓子東壁に登った最初の記録らしい。

(ルートはA尾根)。しかしこの記録は岳人137号にて登嶺会により記録から削除された。戦後、いち早くこの東壁に目をつけたのは、名古屋大学である。名古屋大学はこの壁の尾根を北から第一〜四尾根として第一(A尾根) 第二(B尾根)への登攀を1956年3月に成功している。戦後といっても1956年(昭和31年)まで、杓子東壁を訪れた岳人はなかったわけである。又この年5月、東京白校会の森畑、野口の両氏によりA尾根に登られている。翌、1957年3月、千葉大学がA尾根、そして再び東京白校会の森畑、野口氏が杓子東壁に5月に入られ、B尾根を、同時に同会の渡辺、青木の両氏により、D尾根に登られた。この頃になると、杓子東壁も割合に知られる様になり1959年5月登嶺会が、最後まで登られずにいたC尾根をはじめ、A、B、D尾根と杓子東壁の全てのルートの登攀を完成された。又登嶺会では杓子東壁の厳冬期登攀を試みておられるが、この冬には成功の告報をきく事ができるかもしれない。杓子岳東面のバリエーションルートとして、私達が杓子岳北岩稜と呼んでいた北東稜があるが1959年9月、登嶺会の遠藤、佐藤両氏によりビバークを加えて登られたが、この尾根の積雪期登攀もいずれ、行われることと思う。

以下は杓子東壁の各尾根の積雪期完登パーティーである。私の集めることの出来た記録だけであるので、これに欠けたものもいくつかあると思う。もし御存知な記録がありましたらお教え下さい。

A 尾 根

- 1 1939年3月29日
関西学院大学(浅野, 小倉, 永野) DAS, EDELWEISS, 5号
- 2 1956年3月31日
名古屋大学 星野, 八木 名古屋大学部報 1号
- 3 1956年5月4日
東京白萩会(森畑, 野口) 白萩 119号
- 4 1957年3月25日
千葉大学 登壇者氏名不明3人 千葉大学山岳部報告 1号
- 5 1959年5月3日
登壇会(鈴木, 大久保) 登壇会報告 32号
- 6 1960年3月23日
甲南大学(越田, 倉藤) 本誌載

B 尾 根

- 1 1956年4月5日
名古屋大学(星野, 八木) 名古屋大学部報 1号 註1
- 2 1957年5月2日
東京白萩会(森畑, 野口) 白萩 119号
- 3 1959年5月4日
登壇会(高橋, 唐沢) 登壇会報告 32号

C 尾 根

- 1 1959年5月3日
登壇会(佐藤, 布施) 登壇会報告 32号

D 尾根

1 1937年3月27日

甲南高等学校(山口, 福田) 甲南高校部内雑誌 Vol. V Ⅲ-I

2 1957年5月2日

東京白樺会(渡辺, 青木) 白樺 119号

3 1959年5月3日

登嶺会(真壁, 広瀬, 梶浦) 登嶺会報告 32号

※ 杓子北東稜

1959年9月24 ~ 25日

登嶺会(遠藤, 佐藤) 岳人 141号

註一、名古屋大学はB尾根を4月4日も登っているが途中で引返している。
5日に再びアタックして、下半部はAB間ルンゼに登っている。

白馬鑓岳東面

白馬鑓岳から出ている三本の岩稜を、杓子側から、北山稜、中央稜、南山稜と呼ぶ。1937年3月、杓子東壁の初登と共に甲南高校の喜田豊次、武田六郎先輩によって初登が行われた北山稜は、比較的知られているが、南稜については、今まで1950年3月の京都大学の記録が最初のもので発表されて来た。(関西学生山岳連盟報告 創刊号、山と溪谷223号、京大時報1号) しかしこれよりも、20年程前、1931年3月、甲南高校の田口一朗先輩のパーティにより、南俣から登られた記録が、部内雑誌Vol. V No.1にある。これが白馬鑓岳東面の尾根の最初の記録であるが、知られていない。

白馬三山東面では、この白馬鑓岳東面の岩稜が白馬の主稜、三合尾根に次ぐバ

エーショナルルートと云われ、その後いくつかのパーティによりトレースが行われている。中央稜というのは、北山稜のツルハ附近より南山稜との間のルンゼに派出された大きな岩稜である。この中央稜は、1959年5月3日に千歳大の松尾、今井両氏のパーティと明治大の加藤、菅両氏の二つのパーティによりトレースされた。

登攀諸条件の考察

1. 気 象

北アルプスの北端に位置する白馬三山に於ても、三月の声を聞く様になると、春の訪れが来る。しかし依然風雪の猛威は稜線をふるわせる。ただその周期が次第に短くなり、5日のうち1日は行動できる日があると思う。(1930, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39年の平均晴天日数は1/2である。) 3月下旬から4月に入ると、晴天は多くなる。積雪は、時おり1m近くもあることがあるが、山の雪は春の訪れと共に減って行く。後立山は、黒部川をへだてて平行する剣立山と似た気象条件を示し、それよりやや良い場合が多いことを頭に入れておくべき。剣立山は日本海から直接の障壁となってそびえているので、気象変化ははげしい。剣立山と距離的に大差のない白馬三山は同様な悪条件にさらされるのは当然であろう。北アルプス南部の穂高に比べれば、白馬三山は悪条件の中にある。

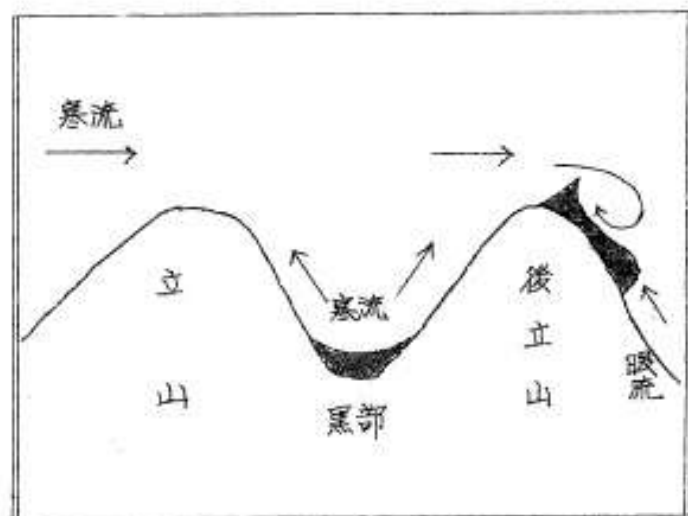
以上、春の白馬三山の気象について、概念を述べた。

2. 積雪期の状態(特に雪崩について)

日本海を越えてシベリヤから吹いてくる、季節風は、後立山連連の主脈に依ってさえぎられ、信州側、即ち、杓子鑓東面に、ぼう大な積雪をもたらすことは、

例年かわりのないことである。

杓子鑓東面の雪の状態は、非常に変化しやすく、ある時は腰位までのラッセルを強いられ、又ある時は、アイゼンでどこへでも行けるという状態の時もある。しかし大体において、三月の下旬になると雪がしまつて来て、



歩きよくなる。杓子沢は、ウインドクラストしている場合が多い様だ。図の示す様に立山の風陰側は黒部となって、その空気は暖まらないのに反して、後立山は平野部の暖かい空気と合流することが考えられる。又西面は緩斜面に対し東面は急斜面で、図の様に一部反転する気流を生じ、雪庇は大きく東面（富山側）にはり出すのである。杓子の東壁の登る際、A、D尾根はさて置き、B、C尾根の雪庇に対する注意は必要である。又、雪庇の崩落による雪崩の危険もあるので充分警戒の要があると思う。雪崩については、この廻りのものを詳しく調べると相当な論文となろう。白馬三山東面で雪崩発生のもっと多い時期は、春山では3月上旬であろう。冬山については経験がないので、春山の雪崩についてのみ述べたい。春、三月中旬にもなると気温も上昇して春山らしい良い天気が続く。しかし、積雪は1mにもなる事もあるが、雪質は湿気をおびたものとなり、しかも気温は氷点下なので雪崩の発生は少なくなり、あまり、見る事ができない。杓子鑓東面の地形、風、積雪等から考えると鑓岳南山稜と中央稜には含まれた中央ルンゼや杓子沢に雪崩の発生が多い様である。杓子沢及び中央ルンゼの斜面は30-40度の間の急傾斜を示し、しかも春の斜面は多量の積雪による斜面の均整化により、表層雪崩の条件を具えている。更に東面から南東面に向いた斜面では日光の照射時間も長く、雪崩に対して不利な地形である。

明治、千葉大の二重遭難の如く、杓子鑓東面のルンゼは多くの雪崩の危険を有しているから、行動には慎重こそ、状態の良い時を待つことが必要である。この様に杓子 鑓東面は雪崩の発生するのに好都合の条件を有しているが、三月も下旬になるとほとんどその発生を見ないのは雪質によるのだと思う。一般に表層雪崩は乾燥雪崩と湿潤雪崩に分けられるが、この附近では前者を多く見ることができる。湿雪になりやすい三月中旬頃でも気温が低いため、湿潤雪崩の発生は少ない。しかるに、春の降雪後の、快晴の日はこの沢やルンゼは雪崩が出ると思っている。又降雪中の雪崩の危険も忘れてはいけない。最後に中山沢、長走沢の雪崩であるが、あまり雪崩の発生はないが、しかし、一度発生すると、おそろしい大規模なものとなり、昭和33年正月の嶺山岳会の長走沢の遭難の様子に森林帯をもうなめにするのである。カンバ平の稜線から長走沢の下部、猿倉台地を見おろすと、長走沢の雪崩のおし出した後であろう樹木のない部分がある。

3. アプローチ及び根拠地

アプローチについては大体二つに分けて考えることができる。南股入よりと北股入(猿倉)よりのものである。かつて甲南、蘭学の人達は、南股発電所の取入口をベースとして使い、小日向山のコルへ テント又は雪洞を出して、そこを根拠地として、杓子、鑓東面を登っている。しかし、現在南股には、使用できる小屋がなく、又雪崩の危険を考えるとやはり、猿倉よりのルートが最適であろう。ベースキャンプの位置として、カンバ平か、小日向コルのいずれかは、パーティの力によって決められると思う。カンバ平は、アタックには好都合だが、荷の集積には大きなボツカ力が必要である。小日向コル、カンバ平は共にすばらしいテントサイドを私達に与えてくれる。又猿倉台地から一気にラッシュして杓子東壁を登った記録が東京白樺会にあるが、これは5月であり、3月では少しむりであろう。

以上杓子嶺東東面研究という題目には、ほど遠いお粗末な内容のものしか書けませんでしたが、それは私の不勉強と経験の不足の事故お許し願いたい。登攀ルートについての概念、時間記録を少し書いては見たが、まだまだ杓子東壁白馬嶺東面を理解していない未熟な自分をかえり見て登攀ノートとして、登攀小史、その他のみにとどめました。白馬三山研究として白馬本峯東面についても少し調べましたが、この附近は良く雑誌等で書かれておりますので、省きました。記録の整理と活用という事が如何にむずかしいかという事を、理解できただけでも勉強になりました。そして、又この資料の採集に協力して下さった、千葉大学、名古屋大学、明治大学の山岳部そして、東京白稜会又、蒼山入山の前に御好意溢れるお手紙を下された登嶺会、高橋伸行氏等一面載も無い方に山を運じて名前を知っているだけな頼りに資料の拝借をお願いすると、こちらの期待を上回る御好意溢れる御返事をいただいて、すっかり恐縮しました。私達も、良き登山者へ一歩でも近づくとする道程の中で、この様な有難い先輩があることは幸せであると思うのです。

参考文献

- 千葉大学山岳部々報 No.1 (千葉大学山岳部) ・ 白稜 119号東京白稜会
追悼—白馬嶺ヶ岳遭難報告—(明治大学山岳部、千葉大学山岳部)
登嶺会報告第32号(登嶺会) ・ 甲南時報 No.3 (甲南学園山岳部)
名古屋大学山岳部々報 No.1 (名古屋大学) ・ 甲南高校山岳部々内雑誌 Vol. VII-I
Das Edelweiss X号(関西学院大学山岳部) ・ 岳人 141号 138号、56号。
甲南時報 No.5 (甲南学園山岳部) ・ 鹿島嶽研究 朋文堂 吉田二郎著。
岩と雪 7号 ・ 山と溪谷 223号、251号。
関西学生山岳連盟報告 創刊号 ・ 登山全書 冬山篇 河出書房。

高校山岳部合宿報告

1959年度

夏 釣・二股

冬 乗 鞍

春 猿 倉

『夏季劔岳二股合宿』

(人 員) C・L. 堀 田 美 瑠 (高 2)

S・L. 竹 原 洋 爾 (〃)

S・L. 安 井 正 (〃)

小山 正 人 (高 2) 高 橋 久 治 (高 1)

山城 国 暉 (〃) 善 野 進 (〃)

武 田 捷 一 (〃)

藤 原 邦 彦 (〃) 石 渡 先 生

永 島 孝 男 (高 1) 森 原 光 生

今年の夏山は、リーダー3名が夏山経験3年目に達する故、一つの、おなじで行なう事にした。又、夏山が初めての人が6名もいるので、合宿形式にする事に決まった。合宿をするとなると、どうしても、酒沢か二股にしぼられるが、酒沢は居住性がいたって悪かった経験があるので二股に合宿する事になった次第。

8 月 1 日 大阪発

8 月 2 日 (精)

富山 — 弥陀ヶ原ホテル (10.30) — 天狗平着 (12.40) 発 (14.00)

— 雷鳥沢 (16.20)

今年からバスは追分小屋の少し上の弥陀ヶ原ホテル前まで延びた。そこから暑さに、まいりながらも、雷鳥沢のキャンプ地に着く。

8 月 3 日 (晴)

番島沢(8,00)——御前小屋(14,00)——剣沢(11,35~12,20)

真砂沢(13,20)——二股(14,45)

真砂沢から二股沢までの道。去年を思い出して、ゆううつだったが、今年は楽に行けた。

8 月 4 日 (晴) グリセード

二股(8,30)——三ノ窟雪溪

三ノ窟の雪溪を、ハッ峯から滝の落ちている所までのぼり、そこで練習する。初めての着が多かったが、みな上達の早いのに驚く。練習中、コルから岩ナダレが落ちてきて、気味悪かった。

8 月 5 日 (晴)

A. 源次郎尾根

パーティ。 堀田、安井、永島、高橋。

出発(7,30)——真砂沢(7,30)——取付き(8,10)——稜線上(11,00)
——頂上(2,00)——テント(4,30)

真砂沢まで、猛烈に上ばす。しかし取付いたが最後、急にスピードはにぶりテントについた時は、うすぐらかった。

B. 三ノ窟より頂上

パーティ。 竹原、小山、藤原。

出発(7,00)——三ノ窟コル(9,45)——池の谷乗越(11,00)
頂上(12,10)——真砂沢(14,30)——テント(14,35)

ハッ峯上半を行くつもりであったが、一名三ノ窟雪溪よりバテた為、計画変更乗越より頂上へ行き、長次郎谷を下りて帰る。

8 月 6 日 (晴) 荒 瀨

きのう、両パーティに一名づつバテた人がでたので、今日は晴れても、荒瀨という事に決る。きょうも又快晴である。川辺で遊んだり、岩かげで昼寝をしたりして、のんびり通す。みんな元気をとりもどしたようだ。

8 月 7 日 (晴) ミノ志より頂上

パーティ 堀田、竹原、小山、安井、山城、藤原、武田、永島、善野、高島。

出発(6.30)——コル(8.35)——池ノ谷乗越(9.40)——頂上(11.00)——(11.30) 発——真砂沢(13.50)——テント(14.55)

きょうは最後のアタック日、全員をミノ志より、頂上へ行った。

8 月 8 日 (晴) 撤 収

出発(7.45)——池ノ平(9.30)——仙人峠(10.00)——阿曾原(14.00)

きょうはもう撤収、いつも思う事だが、なにかに残りな気がする。仙人峠のお花畑で、踏れわたった、なつかしい剣の雄姿を、いつまでもながめていた。今年は阿曾原から樽平までの新道が工事の為、使えず、軌道にのせてもらう。温悪くして無蓋車に乗った人は、こごえそうだったとの事、去年あれだけ必死になってとばしても3時間余りもかかった所を、わずか20分程でいってしまうこの文明の利便におとろくばかりであった。くなお竹原君は兄のゴリさんが剣沢で合宿しておられたので二股を別れた。

～ 甲南高2年 安井 記 ～

食 糧 反 省

まず脂肪分が少なかった、と云うより、ほとんどなかった。これは エッセン腺の不手際により、油、バター、チーズ等を忘れた為である。以後こんな事のない様に気をつける。

この合宿の朝食は、毎日みそ汁と干物ばかりであったが、これからはソーセージを入れたスープ等もまぜてみるのもよいと思う。次に昼食は、乾パンとフランスパンを交互に使ったが、これからはもう一つビスケット等も使い、パンの使用をへらしたい。夜はみなおいしそうによく食べてくれたのはうれしかった。全体的にみて、油分の不足は大失敗であったが、野菜、動物性蛋白質は定らず余らずでうまくいった。

又、これからの合宿では、この料理は何カロリーあって、蛋白質が何gある、これなれば夕食として使える、この様に献立を考え、栄養価の高いものを集めて、へたな料理をするよりも、我々は、日常食になれたものを使って、みんなに喜んで食べてもらえるような料理を作れる様になりたい。

高 二 小 山 記

❧ 冬の乗鞍岳スキー行 ❧

乗鞍岳位ヶ原山荘甲南ルームで、大学山岳部の冬山合宿の半ばから参加、スキー訓練を行う。

期 間 12月24日 - 12月30日

人 員 C.L. 堀田 美 昭 (高 二)

ム. 安 井 正 (高 二)

小 山 正 人 (高 二) 山 城 国 雄 (高 二)

竹 原 洋 爾 (。) 武 田 建 一 (。)

藤 原 邦 彦 (。) 乾 隆 也 (高 一)

永 島 孝 男 (高 一)

12月 22 日

安井他5名 大阪出発

12 月 23 日

位ヶ原山荘へ入る。

12 月 24 日

大学の人達とスキーをする。

12月25日（吹雪）

堀田他 大坂 花

12月26日（快晴）

肩の小屋まで、スキーツアーに出る。風が強い。大学の人達と別れ、肩の小屋まで登り、滑り下る。凍傷にやられた君が出る。
堀田他、入山して来る。

12月27日（曇）

大学と共に、スキー練習。

12月28日（曇）

肩の小屋へ、スキーツアー。

12月29日（曇のち吹雪）

頂上へ、大学より十分程、おくれて出発するが吹雪となる。肩の小屋の下で上から下りて来る大学と会い、引返す。夜はコンパ。

12月30日（快晴）

安井、小山、乾は大学生と頂上へ行く。11時に下山。

（安井 記）

1959年冬山スキー台宿食料計画

高 一 乾 隆 也

(主 食)		チ ー ズ		2P.
米	2斗5升	〔野 菜〕		
フランスパン	40個	ジャガイモ	25個	
乾 パ ン	20袋	玉 ネ ギ	17個	
マカロニ	7袋	ニ ン ジ ン	14本	
(調味料)		大 根	2本	
味 噌	400g	白 菜	2個	
しょうゆ	1升	ほうれん草	10束	
ソ ー ス	1升	キヌベツ	1個	
砂 糖	10斤	〔魚 類〕		
味の素	1缶	塩 じ ゃ け	1匹	
塩	1斤	みりん干	15枚	
ケチャップ	400ml	〔その他〕		
マヨネーズ	200ml	細茶漬のり	50個	
(肉 類)		福 寿 漬	2缶	
牛 肉	400g	の り	30個	
豚 肉	200g	わ か め	2袋	
ベーコン	200g	カレールウ	3個	
ハ ム	100g	メリケン粉	100g	
ソーセージ	5本	じ ゃ ん	15袋	
ラ ー ド	50g	紅 茶	3箱	
バ タ ー	3P.	緑 茶	200枚	

スキムミルク	2箱	カリント	2袋
マギー	20個	氷砂糖	1袋
(暗晦島)		こんぺい糖	少量
チョコレート	20個	すゐめ	10枚
ア×	4袋		

今度の合宿では、肉と野菜を一類にした料理が大半である。勿論山では肉類より脂肪を取らなくてはならないのだが、それもそれだけ一類だけだとあきてしまうと思う。そこでビタミンがあると云うだけではなく、食欲をそそるのに又く事の出来ないのが野菜だと思える。又、このようは料理は応用性に富んでいと云える。なぜならば、いためると、肉と野菜のいためものになるし、そこにスープの素を加えると、煮込みスープになる。又、片栗を加えればシチューにも出来る。この様にマギーや片栗を加えるだけで全く異った味の料理が出来上がるからである。今度の山行で初めて食べたと思われる、関東煮、バラ寿司は普通の山行きには、あまり適していないと云えるが、炊事を小屋にまかせたので、うまく出来た。そしてみんなめずらしそうに喜んで食べてくれた。しかし合宿となるとテント生活なので、この様な物は作っておれないし、この料理に使っている日本酒のあっさりした、野菜よりも油物に適する、玉ねぎ、ニンジン、白菜、ほうれん草をこれからもっと多く使いたい。マカロニは夕食に二回使ったが、どちらも副食になってしまった。これを主食にしようとする分量が多すぎる点を考へて少くし野菜を多く加えて、主食としてこれから試み米の分量を少くしたい。朝食は味噌汁と飯との簡単な献立になりがちだが、ボッカをする日等があるので副食をもっと加えなくてはならないとわかった。そのボッカの日の朝食としてカス汁等をしたい。

朝食はパンを3回しか使用しなかったのは重量の点に於て失敗であった。これ

よりはフランスパン又は乾パンにとどめたい。

乾物類で云うと、干鰯、梅干、塩・タケアン、等が少なすぎた。

嗜好品では、アメ類が全くと少なく、1回のスキー練習で1袋がなくなってしまふので、チョコレート等高価な物を少量にとどめ安くてみんなが充分食べれる物を多く使用したい。

そして、練習でなく、小屋又はテントの中に入つての嗜好品(少し時間をかけて作る物)をふやしたり。

—— 以 上 ——

春季猿倉台地合宿

(参 加) C. L. 堀 田 美 昭 (高2) 三 沢 寛 也 (中1)
S. L. 安 井 正 (高2) 川 村 静 治 (中1)
S. L. 永 島 孝 男 (高1) 佐 藤 昌 弘 (中1)
食糧 乾 隆 也 (高1) 山 本 三 郎 光 生
食糧 山 城 国 輝 (高2) 木 下 先 生

以 上 10 名

今度の春山は去年、大学の人達につれてきてもらった杓子岳を、我々だけの手で登ってみようというので皆1月頃からハリキっていた。ところが山へ行く前に

なると、受験勉強のため合宿に参加できない者が、何人も出来てしまった。内二人は去年杓子の頂上も踏みボッカ力も大変あった、優秀な部員であっただけに、我々は大きなショックであった。又その反面、かわいい小さな中一部員が全員合宿に参加してくれるという事で新にファイトをもたした次第。

そこで、^{山本}パーティ全体を見て去年程の力がないと云うので、中一部員と先生は猿倉小屋泊り。ベースは猿倉台地にはり、高一部員が入る。アタックも杓子低一つにとどめる。山本先生が久方ぶりに参加されて、若い中学生部員をしっかりと指導して下さり我々大いに感謝する次第である。

3 月 23 日

高校部員のキスリングが11～12質になって、皆ひめいをあげた。大阪駅では、伊丹さんや牧野さんや竹原、小山両君等の見送りをうけて20.25発、長野行準急に乗り込む。例の如く又ぬれぬ汽車旅である。

3 月 24 日 (風 雪) 沱 瀝

松本(4.46)着 —— 四ッ谷(7.30) —— 穂波宅(8.30)

松本駅で山本先生に合う。高田先生は、スキーに行つて足を捻挫されたとのこと。

さて、四ッ谷に着くと深々と雪がふっている、トラックも二股まで行けない。さて困った、ともかく穂波さんともまで行こうというのでバスに乗り込む。穂波さんここでリーダーが、おじさんや先生の話聞いた上で協議し、今日の天気、二股からのかなりのラッセル、昨夜からの睡眠不足等の理由で沱瀝と決まる。(後を考えた事だがこの合宿失敗の原因の一つにこのことがあげられる。)

3 月 25 日 (晴 後 曇) 猿倉へボッカ

パーティ、堀田、安井、永島、乾、山城、

出発(7.00)——二股(8.00)——旅倉着(12.30)——発(2.00)
——徳栄宅(4.00)

きのうの休養で、体の調子はいい、天気もいい、全葎補とエッセンの一部の荷
上げである。二股からの不帰の峠、いつ見てもごつい。思った程も、うまら
ず調子よくいく。小屋で砂礫湯を呑み、走るようにして御野に帰った。尚この
日、中学生と先生は、入方尾根へ行つてスキーの練習をした。

3月26日 (雪後雨) 旅倉及び台地へボッカ。

パーティ、堀田、安井、山城、永島、乾、三沢、佐藤、川村、山本先生

出発(6.30)——二股(7.30)——旅倉小屋(11.00)

きょうも又、雪が深々とふっている。膝までラッセル、全くいやな日である。
こんな天気ではきのうの様にのんびり、楽しくボッカ等しておれない。さっさと
小屋へいそぐ。

パーティ、堀田、安井、山城、永島、

小屋発(2.30)——テント予定地(3.20)——発(3.50)——小屋
(4.05)

昼飯をたべてから、全葎補とエッセンの一部を、台地の入口の方の予定地にデ
ポしてきた。台地へ出るまでの斜面、かなりのラッセルでまいった。

3月27日 (風雪) テント設営

パーティ、堀田、安井、山城、永島、三沢、佐藤、川村

小屋発(8.50)——テント地(9.30)——発(12.00)——
小屋着(12.)

きょうも又、じんよりとして風が吹きまくっている。高校の連中は、個人葎補

を持ち、中学生に残りのエッセンを持ってもらって出発する。寒くて寒くて、テント二つ張るのがせいいっぱい。すぐに中学生は下りてもらい、我々はテントにもぐり込んで沈黙。

3 月 28 日 (晴 後曇) ブロック切り・

パーティ、堀田、安井。

テント発 (7.50) — 鎌倉着 (8.30)

パーティ、堀田、安井、乾、川村、三沢、佐藤、山本先生、

鎌倉発 (9.30) — テント (9.50)

ブロック積み (10.00) — 完了 (11.00)

きょうは久しぶりの青空。アタックに出たいが、まだすべき事ができてないので、みおくる事にする。そして、小屋の人達も呼んできてみんなでブロック切り、多人数でやると早くできあがる。又、今日樺平より大学の人達がおりてきて下さり久しぶりに、楽しくだべり合う。昼から大学の方達が樺平に帰られるので機達も小日向のゴルフ場へ一泊に行った。

3 月 29 日 (曇、強風) アタック中止

パーティ、堀田、安井、永島

出発 (4.00) — コル (5.20) — テント (6.00)

満天星空、しかしかなりの風がふいている。さて出ようとした時、堀田シートを切る。ワッパにかえて歩き出す。しばらくして、堀田様の調子が悪く、一人返す。どうも風邪らしい。二人で出なおす。コルの下の所で、日の出を待ったが時間がたつと共に、にわかに曇り出し、厚い雨雲におおわれた。後継は全くがすり、視界なし。風も強さを増す。およそ30分程待ったが、天候回復の気ざしもみえず、やむなく引き返す。くやしそうな永島の表情も印象にのこる。

3 月 30 日 (曇 後 雨) 撤 収、

撤収開始 (17.00) —— テント張 (17.30) —— 猿倉 (17.50)

食当 2 時に起きた時は晴れている。飯をくいかけると雨がぱらつき出し、後線、杓子岳の方は全くガス。今日は中止との事、全々ついてない。午前中、トラップでひまをつぶす。昼から堀田、安井、小屋におり天気予報を聞いたが、ここ当分晴れそうな様子もないので、協議した結果、今日のうちに撤収する事にさめる。撤収になると、何事も早くすませる。晚、大学の人達とも一緒(大学も今日で全員猿倉に集結)に菓子たべながらだべりあう、又山本先生に、山岳部の事についていろいろ御意見を話してもらい我々大いに考えこんだ次第である。

3 月 31 日 (雨) 下 山

猿倉 全員出発する。雨はじあじあ降る。肩が重くて、思う様にスキーが動いてくれず、こけてばかり、全く惨々の思いをして細野におりた。明日中高部員全員を八方尾根でスキーをやるつもりだったが、天気が良くなりそうにないので、ここを解散。

——(甲南高 2 年 安 井 正 記)——

春山合宿食料反省

高 一 乾 隆 也

今度の合宿は2度目なので計画通りスムーズに行なわれた。今回は朝食、夕食は全て料理に必要な材料は、洗い、切り、全部一つのポリエチレン袋に入れた。カレーライスの例をとると、野菜の玉ねぎ、じゃがいも、ニンジンの皮をむき、洗い、切り、又牛肉はいため人数の分量を入れそしてルウもそのようにした、一つの袋が夕食の一回分と云う様に計画した。この初めての試みは食事にかかる時間が少しでよい事、それに、あとあとになっても料理に使う材料がたらなくなったりしないので安心して食べる事である。皆んなから出た不満は昼食の乾パンである。これはフランスパンよりは好評だが腹持ちが悪い点である、そこでフランスパンを一個添え乾パンを少しへらし一回分とする。副食にジャムだけでなくソーセージ、チーズ、又安価なちくわを使用したい。

次はめん類である、主食に入れてくれとのことであるから、非常食だけに入れずもっとどしどしと、主食に入れようと思う。

最後は、調味料である、塩等は多かったが、ソース、砂糖は少く、紅茶や、スープ、いため物はおいしくなかった。

砂糖は多く持って来たが、一回に使う分量が多いからだと思う、今後あらためたい。

次に気の付いた点は、アタック食である、これは2回分を用意したので、夜テントの中でよりわかるのにめんどろであるので一回分づつ割る必要がある。

野菜は全部洗い、切ったのでくさらないかと心配した、次回よりは乾燥する必要が多分にある。

パッキングの点では、ぬれると、形がこわれ、底がぬけたり、破れたりするので
もっと丈夫なパッキングケースを使うか、重量が軽ければ石油缶を使用したい。

今度の経験から次の合宿には一つの料理の材料をポリエチレン袋につめ合わせる
事。主食を米、モチ、マカロニ、そばの四種類を使用したい。

— 以 上 —

春山合宿食糧計画

乾 隆 也

(主 食)				(その他)	
米	12升	ベーコン	400g	ふ	1袋
モチ	160個	チーズ	48個	佃煮	200g
そば	12人分	バター	5P	わかめ	3袋
フランスパン	120個	ソーセージ	30本	カレールウ	15人分
カンパン	60袋	ハム	5本	メリケン粉	1袋
		ラード	100g	マギー	50人分
(調味料)		(野 菜)		片栗	3袋
みそ	600g	壬ねぎ	20個	きな粉	1袋
しょう油	0.5升	ジャガイモ	15個	ジャム	15個
砂糖	8斤	ニンジン	30本	ママレード	15個
コショウ	3びん	東京ネギ	3束	ピーナツバター	20個
味の素	3袋	レモン	8個	紅茶	3袋
塩	2斤	キャベツ	2個	紅茶	3袋
ソース	0.5斤	白菜	2個	スキムミルク	3箱
ケチャップ	3びん	タケノコ	4個	ナヨコレート	30個
マヨネーズ	2びん	大根	2本	氷砂糖	200g
		ほうれん草	15束	トーナツ	12個
(肉 類)				ウイスキー	10びん
牛肉	800g			ア メ	3袋

紀 行 文

1959年度



不帰岳第一峯尾根登攀記

倉 謙 孝 次

4月30日 快晴

O.B 福田氏、広瀬、柏木、大関、大津、倉藤

本日の行動は唐松沢を経て、一二峯間ルンゼより、第二峯、鷹松岳、八方尾根の縦走と決定していたが、あまりの上天気なので、合宿中第二の目的たる第一峯尾根アタックと変更される。

3時40分 南股B.C出発、気温が例年より少々高いのが気になったが、ライトの光をたよりに南滝のルンゼをつめる。兩岸にそびえる岩壁は薄明りに照らされて、全く無気味である。途中フライヤーをたいて、福田氏愛用の8mmで撮影する。南滝は雪にうずもれず、ゴーゴーと水しぶきをあげ、落下している。

南滝乗越に着く頃になると、辺りも明るくなり、西の方に一峯の雄姿を望む事が出来る。そこに登るのだと思うと胸がわくわくする。不帰沢、唐松沢の合合より少々登った所のルンゼをつめる。第一峯尾根を右稜、左稜と分ける。このルンゼは急な上に、雪の状態が非常に悪く登るのに苦労し、先んだったこの *fight* もどこえやら、全くバテ気味であったが、福田氏の8mmのお蔭で我々は小休止。これ程有難たく思った事はない。ぐんぐんルンゼを汗水たらしてつめると、(ラッセルは深い所で30cm)一辺に視界が開け、第一峯尾根の中腹部に出る。二峯東北壁のすごい岩壁が眼に入る。右稜左稜のジャンクションで中食を取る(9.30分) ナイフリッヂが焼いている。3 party 漸成の

コンテナンスを進む。雪がくさっている為、雪のずり落ちるのを注意するだけで、雪稜としては容易な方であるが、初めての自分にとっては何処そのものがある。左に先輩諸氏が残した二峰の甲南ルートを行き、前進する。ナリフリッダノ時間半のアプローチで頂上真下のフェイスの取付きに着く(11.30)

一見した所この岩場は、ハイ松とだけかんばのmix したもので、快的とは云いがたいが、登頂には左程困難を有しそうではなさそうだ。広瀬party, 伊藤partyと続いて登る。最後に残った、大津, 倉藤, 大関のpartyが登ろうと思った時、雪がくずれシユルンドの中に落ちる。他の二人の内誰かが自分を確保してくれたと安心して横を見ると、他の二人共穴の中で *Back and foot* の形で止っている。三者顔を合わせてニタリ、それからバク笑と変る。上からリーダーのドナルド一言。あわてて這い出し登頂にかかる。

予期した通り左程困難を感ぜず、岩登りより、木登りと云った方がよいかも知れない。るピッ子で頂上に立つ。3 party である為、時間を相当食う。0.15 分頂上に立つ、ここで記念撮影後、雪崩の危険もあるので小半刻程、雑談し、下山にかかる。帰途は一、二峯間、レンゼを尻セードで下る。小さいな雪崩が所々でドンドンと音を立てながら落ちて居る。冠わぬ一峯尾根アタックであった。

< 時間記録 >

3:45 B.C. → 6:00 第一峯尾根末端 → 8:40 一峯コル
9:30 ~ 11:00 バットレス → 11:30 ← 0.15 頂上
13:00 → 13:30 一峯コル → 14:45 出合 → 13:00 南
池 → 15:30 B.C.

五月の唐松ダイレクト尾根

広瀬 健三

不帰東面、それは旧制高校の先輩諸氏により多くの秀れた登攀がなされた所である。ここは僕にとって思い出の有る山でもあった。当時甲南高校山岳部員であった僕は不帰第一尾根に登攀すべく冬、春と再度にわたり南股に入ったが、結果はその目標が吾々にとって大きすぎた様で又この機会に下山したのだ。

4月29日、吾々は数年振りで南股平にベースキャンプを張った。目標は新人訓練の他に上級部員による不帰第一尾根、第二尾根甲南ルートに登攀がそれであった。第一尾根は計画通り行ったものの、第二尾根は雪の状態が甚だ悪く、止むを得ず放棄したのであるが、出発前、偵察程度に止めておこうと考えていた唐松ダイレクト尾根の登攀を本格的に考えたのである。

5月3日、キーパーに起こされシラフを出たのが2時、気温はかなり高い様だが空は一面の星、今日の天気は保証済みだ。準備が手早く出来たので出発を早める。パーティは僕と美田。3時テント元。ここから南滝迄はもう幾度となく通った道である。両岸の狭まったこの沢は何度来ても余り感じの良い所ではない。自然とピッチが上る。南沢の左手の急斜面を登り切り、唐松沢に出る。物凄いデブリだ。典型的な唐雪崩で唐松沢自身が雪崩れている様である。こんな雪崩に会ったらひとたまりもないだろう。ここから唐松岳直下迄この沢をつめるわけだが、連日の寝不足の為かかなりのアルバイトだ。高校時代も丁度このあたりだったか不馴れなラッセルに悩まされたものだ。そんな事がつい最近の

て来る事の様に思い出される。次第にあたりが明るくなり、今迄の何が重苦しい気分が急に晴れやいになる。

ダイレクト尾根の取付き迄の最後のピッチはかなりのラッセルがあり、相当苦しい。取付く前に今一度不帰三峯側より偵察する。雑誌「岩と雪」には未登の尾松ダイレクトと物々しく載っていた様だがそう手強い様には見えない。

間違っただけ尾根に取付いてしまったら馬鹿らしいので慎重に取付きを確かめる。

7時30分、尾根の末端に着く。うまそうな物を食べ元気をつける。やはり緊張しているのか二人共今迄の疲れは吹飛んだ様だ。アンザイレンする。7時45分登攀にかかる。先ず尾根の右側よりまきながら背に出る。雪と岩が交互に交り合いさほど困難を感じないが浮石が物凄く多いので神経を使う。オーバーハング下部の多少へこんだ場所で第一回目のジッヘルをする。7メートル程のハングを左にまきながらかなりの傾斜を持った段状の岩を直登する。ハングの上部はスツキリしたテラスを作っている。ここより比較的ハエ松の多く殖われているリッヂを登ると、ひよいと雪のベッタリついたテラスに出る。岩ツバメが吾々の姿に驚いて飛び立って行った。

白馬鐙に勾ったパーティをさがすが見当らない。不帰三峯に取り付いているパーティが盛んにコールをかけながら登っているのが手に取る様に見える。ラストの登ってくるのを待って雪の細いリッヂを太もも迄もぐりながら行く。左右の沢は深くないのでスケールは全然ない。やがて岩のナイフリッヂに取附く。尾根はその後広く成り、コンティニアスで50メートル程進み、偵察の時、最っとも難関かと思われた急傾斜の岩の下に来る。右側のクラックに入り強引に上部に出んとするがサブザックがひっかかり思う様にならずあきらめて左手を直登する。上部は全く浮石の巢の底があって、それを両手で押えながら、かなりの時間をかけてこれを乗り越す。ここから頂上まで入ノリッヂが続いている。

このスノーリッジは期待した程の物でなく、早まる心を抑えて頂上に立つ。9時丁度、ナイロンザイルをまく内にアタック成功の突窟が出さくる。

夏の剣岳主稜線

大窓より小窓へ

大関和夫

大窓より小窓に至る剣岳主稜線のトレースは、積雪期はともかく夏山には、大半が藪こぎに終始するためか訪れる人は少ない。しかし、求開の尾根歩き楽しさと言うか、何かこの稜線には魅力があった。二股合宿の7月25日、越田、牧野両氏と僕の三人は、合宿第一日目で源次郎、ハッ拳等へ出かける連中と分かれ、小窓谷を登って行った。仙人小屋の横から小黒部谷へ降りる。大窓雪渓を一時間あまりかかって登り切る。大窓からは、左手の岩場を登るが、やがて、ものすごい藪こぎを強いられる。始のうちはタイミングが合わず、はい松の中で首だけ出して前にも、後にも進めず、進退難まったりしたが、はい松をつかんでどんどんピッチを上げる。大窓の垂の下はじめじめした陰気な岩場である。積雪期のフィックスザイルが岩に残されて風をひらひらしている。この不愉快な岩場ではホールドをつかんだとたん、5mもあろうナメクジが手の所に居てゾーフとした。この辺では実際こんな所に来た事がい々になって来た。大窓の頭の岩の上でぐっぐと一息ついた。池の平山の下までフワフワとハイ松の上を心良く歩んだ。丁度ロックガーデンの様な所を下り小さなコルに着く。ここから池の平山までは岩場である。今にも崩れそうな岩場に取り付く、一ピッチ登

ると水晶が多く散乱している。三人で形のよいのをひろって岩場を登りきると池の平山の頂上である。チンネ、小窓のながめがすばらしい。池の平山の稜線を行くが雪溪のトラバースやハイ松でかなり悪い。小窓へ下るルートがわからず草付のかしを下りかけると下はすごい滝だったりにして、大分時間を取ってしまう。小窓へ下る草付ともろい岩場の上降は気持がよくない。小窓へ降り、グリセードで滑り出すと、やれやれと、とたんにハイ松でやぶれたズボンが気になった。足から少し血が出ていた。やぶこぎはあまり好きではないけれど、この稜線は考えていたより人が歩いた跡が少なく、なにか未知の山みたいな楽しさがある。ズボンの破れから夕方の冷たい風が吹き込む。三人で走る様に二股への道をしるす。

(時間記録)

二股B,C	(7.00)	大窓	(9.40)	大窓の頭	(12.30)
池の平山	(15.30)	小窓	(16.40)	二股	(17.20)

“黒部源流” 越田和男

茶師沢～黒部源流～五郎沢と云うルートは最近では極く一般化され、もっぱら、ザックのうしろにOKWVとかでかでかと書いた連中の右往左往するところとなっているが、まだまだ捨て難い味のあるところもある。この計画は昨年もあったが台風の為に中止となったので、甲南はこの方面に入るのは始めてである。今年の計画は、最初、広瀬が上の廊下から奥のタル沢、越田が源流及び黒部五郎までの岩登りと云う事で進められたのであるが、夏山参加人員が少なくなっ

たのをこの両パーティを一緒にして源流、雲の平及び五郎岳の岩登りと云う計画になってしまった。全く

全く晴天に恵まれて楽しい山旅が出来たが、食糧計画の思わぬ失敗から五郎岳での岩登りが出来なかったのは残念であった。又、立派されていながら実行までに至らなかった上の廊下、それに奥のタル沢、金作谷等来年は是非行きたいものだ。今年はどうやらこの方面の偵察と云う事に終った様だ。

(人 員) 広瀬 健三(E3) 越田 和男(S3)

大津 肇宏(E2) 瀧本 洋(L1)

(紀 行)

7月28日 快晴

剣岳二股(7,45) ~ 剣沢雪渓上端、昼食(11.50~12.45) ~ 別山乗越(14.40) ~ 雷鳥沢テントサイド(16.00)

昨日で無事剣岳の合宿を終了し今日から縦走に移る。二股を阿曇原へ下る伊丹と別れ、内蔵助平へ入る牧野のパーティとは、ハレゴ谷の出合で別れる。縦走用の食糧は全て雷鳥荘に預けてあるので荷は軽いが、中田の靴ズレがひどく痛々しい。中田の歩調に合わせてゆっくりと剣沢を登る。8時間以上も費やして雷鳥沢へやって来た。天気図は快調、明日の晴天も確実だ、夕日に映える立山がとても美しい。中田は気の毒だが明日下山する事にする。

7月29日 晴

雷鳥沢(7.45) ~ 浄土山(10.00) ~ 五色ヶ原(15.00)

朝、広瀬のピッケルが盗まれているのに気がついた。いやまったくお話にならない。ここまで来てドロボーにやられるとは。昨夜は5本のピッケルをテントの横へっきさしておいたんだが、門田のピッケルをそのままにして、スイス製(エベレスト)のを持って行くんだから大部専門家の様だ。なんとしてもピッケルを山で盗まれるなんて、一昔前の先輩達に話せば何と嘆かれることだろう。

山の開発はやはり山の俗悪化を供なうものなんだ。雷鳥沢のテントサイドは今日も登る人降りる人とごったがえしている。盗んだ奴が今頃自分のザックにつけてほくそえんでいるのかと思えば腹が立ってしょうがないが、何んとも手のほどこし様がない。

中田と別れて出発する。室堂から直接澤土山へ登る道をとるが、急な登りでかえって時間を喰ってしまった。贅沢な食料の荷が重くてしょうがない。今日の行程ではザラ峠への下りが一番つらい。五色ヶ原は上の平にて幕営する。夕暮の五色ヶ原を充分楽しんだ後シラフに入る。明日も晴れるだろう。

7月30日 晴夕方一時ガス

出発(6.45)～スゴ乗越(10.50)～養師岳中腹テントサイド(15.30)

越中沢岳までは草の多い草原の登りだ。越中沢岳を越えると、スゴの頭までイヤな登り降りが続く。スゴ乗越への降りはマサにゴキゴキ。降りるにつれて暑さを増す。この辺りは景色も悪いしヤケクソに暑い。乗越しから30分登ったところで昼食とする。午後は又イヤな登りが続く。養師岳のテントサイドはスゴ小屋から一時間ほど上のところにあるが、狭くて早く行かないと場所がなくなる恐れがあるので少しとばす。テント場に着いた頃からガスがかかって今にも降り出しそうな天気になったがやがて晴れた。飛騨側にスバラシイ雲海が出来て、夕日に映える剣、立山が美しい。穂高からやって来て剣まで向うと云う大工犬の人達から、我々より一日先行して穂高へ向っている伊藤パーティの事を聞く。元気に養師を越えていったとの事。我々も負けずにがんばろう。このテント場もにぎやかだ。雷鳥沢の二の峰をやるまいと、なんでもかんでもテントの中にしまっておく。

7月31日 晴

出発(7.00)～養師岳(9.50)～太郎兵衛平(12.30)～黒部瀧
流養師沢出合(16.30)

今日は待望の悪部入りだ。快調のペースで兼師を越える。兼師決へは、兼師峠から中俣へも下れるが、我々は物の本に書いてある通り左俣を下る事にして太郎兵衛平へ向う。太郎小屋で道をたずねると、尾根づたいに道がついていて、中俣、左俣の出合まで出られると云う事なので教えられた通り一たん太郎山へ登り、左の尾根づたいにどんどん下ると急に沢まで降りる事が出来た。兼師峠から直接来た和戸商大の人達に聞くとブッシュに悩まされて大分苦勞したそうだ。兼師沢は、最初左岸の踏跡に行く。踏跡はやがて不明瞭になるが沢はなるくひらけているので気の向くままに、或は左岸に、或いは右岸にと、どんどん下って行く。出合に近づくにつれて谷は狭まり水量も増してくるので踏跡を忠実にたどって行く方が案だ。我々は太郎山から二時間もあれば出合まで行けるだろうと思っていたところ、何んと4時間もかかってしまった。いいかげんいやになった頃、出合に出た時は喜しかった。兼師沢の右岸の河原より一段上った所にテントサイドを見つける。我々の他に誰もいないテントサイドは久しぶりだ。今日まで7日間連続動いたことになるので明日は沈黙と決め、遅くまでだべったり、ラジオを聞いたりする。ウイスキーもこの際うんと減らしてしまう。

8月1日 晴

沈黙

午前中洗濯して乾くまで裸でゴロゴロする。悪部の水は我々の希望通り美しくそして冷い。

午後兼師沢の左岸を五分程登ったところにあるカベツケ平と云うところへ行ってみた。残雪を抱いた山々の見える林にかこまれた草原は、西部劇の風景に似ている。水場があれば良いテントサイドだろう。越田と大津は釣竿を持って本流を下る。左岸を20分ほど下ったところでゴルジュに出くわす。対岸へケーブルがついているがそれに乗らずもう少し下る。ゴルジュをぬけたところのトロと瀬の間に岩魚を見つけ、夕方までねばって大きなやつを三つものにする。

(竿一間半、毛鉤) 塩焼きにして食べたがこれこそ最高の珍味だと喜ぶ合う。

京大の人が三人となりてテントを張ったが魚は釣れなかったらしい。

8月2日 快晴

出発(7.30) ~ 鬼平(9.30) ~ 出水平(11.15)

始めのうちは、踏跡を忠実にたどり、岩をへつったり、藪の中へ入ったりするが面倒くさいので、ジヤブジヤブと川の中へ入り、気の向くままに河原に行く。一時間ほど進むと前方に滝のある小ゴルジュに出くわす。物の本によれば右岸を高巻させよとあるがすっかりしなないので強引にトラバースして滝のところは左岸の藪の中に行く。わずかに踏跡があるが途中で消えているので、未本沢の出合のちよつと下流で沢身に下り、浅瀬を右岸へと渡る。ここを河原から一段登った所の草原が鬼平である。美しいところだ。鬼平から五郎沢の出合の出水平までは広々とした河原である。出水平はテント場としては気分の良いところではない。カベツケ平や、鬼平の様に草原ではなく、ブッシュだらけでテントサイドもない。ここから15分程上流の祖父沢の出合は、やはり草原で祖父平と呼ばれているが、ここはテント場として快適である。五郎沢で夕方4.5尾釣ったが本流のものより型は小さく半分位である。

8月3日 快晴

出発(9.30) ~ 祖父沢 ~ 雲の平(10.40)

今日は出水平にテントをそのままにして、音に聞えた雲の平なるところを見物に行く事にする。祖父沢は急な登りを楽ではないが、後を振り返ると黒部五郎岳が刻々と姿を変え、又まだ見ぬ雲の平への期待に足どりは軽い。

ガイドに導かれた団体客や一般登山者に出合う。早朝三股小屋を出たんだろう。雲の平はギリシヤ庭園だのスイス庭園だのと色々勝手な名前が付けられているが、どれがどれだか解らない。五色ヶ原や太郎兵衛平と大差ない様に思う。アラスカ庭園らしきところで日向ボッコして、カビキパンだらけの昼食を取る。

歸りに妙なところから祖父沢に降りようとして、スゴイブツレユに悩まされる。祖父沢は釣れると聞いていたので、米を垂れながら下るが一匹釣れたのみ。夕食後五郎沢を二匹釣れたのでラードをいためて食べた。

食糧係の鶴水が、米があと二食分しかないと言う。一人一食ノチ合の計算で持って来たのに知らぬまに二合づつ食べていたのだった。予備食のパンはあるが、今年始めて採用したドイツパンと言う奴がだめで、ことごとくカビしてしまっている。一屆ゲンナリとして物言う元気なし。

8月4日 晴後曇一時小雨

出発(8.30)～五郎沢右股～黒部五郎岳カール(11.00)

五郎沢はなるい沢と言う事だが、右股へ入ってからはずっと登りが続く。五郎のカールと言うところは予想以上にすばらしいところだ。かなり上部に神戸大学の人達とテントを並べる。我々のあわれな食事を見てクラッカーをめぐんでくれた。なんにもお返し出来ないの、紅茶に最後のウイスキーを入れて、こさやかな交歓ティーパーティーをやる。話しがはずみ久し振りに愉快であった。夕方広瀬と越田は五郎の岩場と言う奴を偵察に行く。正面のバットレスが登り甲斐ありそうだと思うが、易いやら難かしいやらは取付いてみないと解らない。夕立にあい急いで逃げ帰る。

8月5日 晴

出発(10.10)～五郎乗越(10.50)～三俣蓮蓮岳(12.15)～三俣小屋

7時頃神戸大の人達は双六へ出発、広瀬が昨日からバテ気味で目まいがすると云うので、今日の岩登りは越田と大津とで行なう予定だが、今朝になって大津も腐ったパンにあたってハキ気をもようしケロケロやる始末なので岩登りを断念する。どうにもしようがないので最後の米を炊いて、十時過ぎに三俣へと逃げ出す。小屋へのまき道を避らず、三俣蓮蓮岳へ登り山頂で大体止の後テントサイドへ下る。三俣小屋で米を1.5升買うが450円也、テントサイド使用料一入

10円計40円也も取られ気分が悪い。 テントサイドはすこぶるきたなく、管理人の誠意の無さが腹立たしい。 夏山最後の晩をゴミタメの様なところで寝るのはなんとも残念だ。

8月6日 快晴

出発(5.30)～伊藤新道～湯俣(9.00)～東沢発電所(12.00)～濁～七倉～葛温泉(7.00)

伊藤新道は、湯ノ俣川へ下るまではゴキ下りである。 湯俣川には立派な吊橋がいくつも架けられ気分が良い。 湯俣を過ぎる頃から段々暑くなって来る。 東沢の発電所では軌道を待って昼寝する。 待ちに待ったガソリンカーがやって来たが荷物しか載せてくれないのでガッカリして又歩く。 濁を過ぎて少し行ったところで鵜木が胃けいれんを起こしてぶったおれたが折よく軌道に乗る事が出来た。 この軌道どうやら交渉次第で乗せてくれたらしく、なんでも女の人だのむと良いそうば。 七倉では軌道に乗り合わせた京都の湯沢さんと云う夫婦の方に乗をいただきどうやらおさまった。 広瀬と鵜木は夜行で、越田と大津は、葛温泉で一泊という事にして解散とする。 とんだ幕切れとなってしまった。 これも食料の失敗だとは一寸云い過ぎだろうか。

内 蔵 助 平、立 山 東 面、薬 師 縦 走

大 関 和 夫

リーダー 牧 野 宏 (E.3)

大 関 和 夫 (E.2) 森 本 全 孝 (L.1)

二股からハシゴ谷乗越を経て、内蔵助平へ。内蔵助谷から立山富士の析立へ出て、一の越で、立山東面の岩で遊が、五色を経て藪師岳そして肩峯へ下山した。全日好天気にもぐまれ、三人組の楽しい山旅であった。

7月28日 晴

二股BCを撤収、雲の平班と共に剣沢渡渉地点まで来て、分かれる。まず僕が渡渉してザイルを張り、カラビナを使って、キスリングを渡す。人間はザイルを使って渡渉するが、おそろしく流れがきつく、もぐって底の石にしがみつく位のものだった。これも三人共背が低いかからだにあきらめ、しばらく、ぬれた服をかわかす。ハシゴ谷を先に偵察に来た時よりも早くかけ登り、乗越で昼食をとる。後さほど目合うのも知らない三人組は、内蔵助平を足の下に望み、「ええとこやなあ、はやいところ、行ってみたいろ。」等と写真を撮ったりして悦に入っていた。内蔵助平めがけて走り下り、先に進んでいた神戸商大パーティを追い越し、本谷出合まで行く。ところが、川は水が多すぎ、通行もできず、ブッシュもひどく、本谷出合からノビッチの所で、こんな所とは思わなんだと、又引返して、本谷出合の台地でテントを張る。マブカがものすごくいて、縦走第一日目でこんなけったいな所で夜を明すとはと、少々いやになって、さっさと寝てしまった。

二股(9.25)ハシゴ谷(8.20 ~ 10.30) 乗越(11.40) 本谷(15.10) 引返す(16.00) 本谷出合(16.20)

7月29日 晴

朝目をさますと良い天気、大タテカビンの岩壁に陽があたり、やはりなんか山深い感じ、あたりには人一人いない。川に沿って進むが時々、高まきを強いられ、ブッシュをつかんで強引に登る。とにかくすごいブッシュである。六甲あたりのマブコギなら、僕らもかきわけて進めるが、ここらのブッシュなら反対にはねとばされそうで、仲々進めない。熊にぞもなったら早く行けることだら

う等考えて着いブッシュの中を突進する。北海道の熊笹に似た笹がはえていて、時々がっくりかえされて、チクショーと起きあがろうとするがキスリングが重くて助けを呼ぶ。やっこここのブッシュから出た時は、さすがにうれしくて川岸にへたって水ばかりのんだ。割に早くブッシュから開放されたので、荷は残し偵察に出る。サンショウ魚を見つけて取ろうとするがちょっと大きすぎて手が出ず。途中飛行機のプロペラが落ちている。すごい大きい岩を見つけて行ってみると岩小屋がある。内蔵助谷の雪溪まで行って引返す。テントサイドを決めていたので、キスリングを持って内蔵助谷の雪溪の下へ。テントを張った後、内蔵助谷をつめる。雪溪の上を歩いていると、足もとがぐらぐらとしてドスンと大きく落ち込んだ。三人共ギャーと声を張上げにげる。熊の糞を見つけ、少し進むと上の雪溪で動くものがある。熊とちがうかどにザ腰を見ていたら、グリセードをして下ってくる。まさか熊のグリセードもないだろうと思っていたら、猟師だった。涼しい快適なテント場だった。まき等集める必要もない。大きな水がゴロゴロしていた。飛行機の落ちたのを見つけて、その翼のジュラルミン板でパンを焼いて食べる。

本谷(9.50) → 二俣(10.50) → 内蔵助谷(12.50) → 二俣(13.20) → 内蔵助谷(14.00) (15.00 発偵察へ16.00 まで)

7月30日 快晴

内蔵助谷をつめて真砂子岳カールに出る日だ。内蔵助谷は昨日復察して雪溪へ出たら大丈夫だが雪溪までのガレ場とクレパスの通過が問題だと思った。朝目をこまめにシラフの中で、やばいなあと考えて心配していたが、起きだして、飛行機の翼のジュラルミン板でパンを焼いたりして朝食を用意しているうちに忘れて、しまった。テントを出て5分程歩く、少しガレを進み下降にかかろうとした。少しヤバイ所だと思い、二巻手の森本を振り返って、声をかけようとする。その時森本はスッーと後引かれる様に墜落した。二、三度岩にぶっかったが、

うまいこと、大きなキスリングが岩のクラックみたいな所にぴっかかり止まった。これにはゾーオーとしてしまい。あわてて、キスリングをいて、「じっとしておれ。」とドンさんと助けに行く。さすがのカンロックある森本も、青い顔であった。傷は全然なく、少し腰を打った程度であったのでドンさんはカンロックの荷物を対岸の雪渓の上へはこび、僕は、上に残した荷物をザイルで下ろす。この時ドンさんのキスリングの上にさしこんであったスコップがはずれて、激流の中へ姿を消す。朝から全たく、ついていない。ドンさんと二人で森本の荷物を分けて持つ。森本は個人装備は持って行くときかないので、とりあえず立山へ出なければと考え、内蔵助谷の雪渓をつめる。森本には鎮痛剤をのませる。内蔵助谷上部は割合急で、あった。夏の急な雪渓のボッカは、積雪期より神経を使う。真砂岳のカールについた時はホッとして、大分へたっていた。立山の稜線をゆっくりと歩んで一の越え。

内蔵助平(7.10) 内蔵助谷二俣(8.50) 真砂岳カール(10.40~11.30)
雄山(13.10) 一の越(13.50)

7月31日 快晴

雷鳥荘へ食糧をボッカへ行く。森本の打撲傷も、大したことなく、3人そろってお花畑の中をのんびりと雷鳥沢へ下った。雷鳥荘で、カビのパンを処分。一の越にもどって昼飯を炊いた。午後2時半から立山東面を見に行く。京大部報にある中央山稜と呼ぶらしい尾根を下降し立山東面の三つの岩稜をスケッチしたりした。雄山でABCテレビが送信テストをやっている。黒四のダム地点と無線を話をしているのが、みな大阪系だったから、田舎者の僕等はこの文明の利器に感心して寝い事見物して、夕焼けの中を一の越へ下りた。

一の越(9.30) 雷鳥荘(10.10~10.50) 一の越(12.00~14.30)
雄山中央山稜(15.10) 一の越(17.00)

8月1日 快晴

竜王東尾根を岩登り。一の越のテント場から10分程草原を横切って行くと、雪溪に出る。これをトラバースして、一峯ルンゼに登り北面フェイス直下のバンド伝いに竜王東尾根末端部の東面フェイスにまわり込む。この竜王東尾根は1930年京大の永島吉太郎氏によって初登が成され、一名、永島尾根と呼ばれる。一峯東面フェイスを、僕、森本、牧野のオーダーで登る。剣岳と良く似た岩場でビムラムが良くきいて、快適なフェースクライムであった。3ピッチを一峯の頭に立つ。ここからコンティニアスで進むが、たいして悪い所はないのでザイルははずす。右に、雄山がせまり、左に兼師、槍と並ぶ北アの峯々をながめて、僕等三人だけのこの尾根は、あの混雑した剣の岩場に比べ別天地の様だった。雄山のアリの様な人の行列をながめられるのでよけいにそう感じる。ここでは声が少しきこえてくるだけだ。東尾根の尾根筋はハッ峯上半位のものだが細いのでおもしろい。2峯へかかりロックガーデンのAケンの様なフェイスがあり、この左手のクラックをルートに乗越す。三峯の下のゴルから南稜をスケッチする。大分むずかしそうな岩稜だ。三峯東面フェイスを、森本と二人で登る。2ピッチの短いフェイスである。三峯と竜王岳頂上の間は残雪が尾根の上にあったり、お茶畑できれいな所だった。ここを寝ころんで、槍、穂高をスケッチしたり、ココアをのんだりして、一時間程のんびりした。三人をケルンをつんで、浄土山を経て、一の越のテントへもどる。昼からテントを五色へ移そうかと三人で相談したがあまり多くのパーティが五色方面へ行くので、混雑した山歩きはごめんだと半沈黙とする。本を読んでいるうちに、テントの前の草原で昼寝になった。

一の越(7.10) 取付(7.20) 二峯(8.20) 竜王岳(9.00~10.00)
一の越(10.40)

8月2日 快晴

一の越より五色原を経て越中沢乗越まで。一の越より浄土山を下り はじめる

と竜王東尾根南面が見える。第三峯の壁がスケールがありおもしろそうだ。写真を撮り、道を急ぐ。ザラ峠のザラザラ道はいつもいやな所だ。五色原の中央部の特別地区と立札のある仲々きれいな所にへたり込んで、ラジオに火をつけてお昼の料理を作る。縦走の味である。犬鷹山からの下りの暑いこと。越中沢乗越の雪渓の上に、キメシメサイドがあり、ここに泊る。針木岳が正面にみえる縦走路の横のテント場である。人一人近くにはいない。静かな所だった。

一の越(6.45) ザラ峠(9.40) 五色原(10.30〜10.40) 越中沢乗越(13.00)

7月3日 快晴

越中沢乗越よりスゴ乗越、間山まで。越中沢岳までは広い原野で死持が良い。越中沢山頂上でもテントは張れる。スゴ乗越はいつも暑い。スゴ乗越の小屋横の水場には水がなく、築師へ登りにかかる雪渓で、ジュース、紅茶をたらふくのんで満足した。今日のテント場は間山の下である。この辺はきたない所だった。太郎兵伍平から来たという単独行者に有峯への道を聞いて、少し話をする。他のパーティと一箇のテント場はうるさくて、仲々寝られなかった。

越中沢乗越(6.25) スゴ乗越(9.30) 間山(12.10)

7月4日 快晴

築師岳を越え、太郎兵伍平へ。例の調子でテントの中から手を出して、ラジオに火をつける。飯ができるまで寝ている。朝飯は前の晩に炊いた飯を焼飯にするのが、献立だった。他のテントは続々出発する。こんなに多くのパーティになるのは始めてだった。いつも変った所でテントを張っていた僕等は他のパーティとすれちがいにして、同じ方向へ進む人達とはあまり会わなかった。築師岳は意外に近かった。太郎兵伍平へかけ下る。太郎兵伍の小屋の近くに2張テントがある。テント場をききに行き、大阪のI高校だったのでし

ばらく話をする。子ウサギが出て来て、皆を追いかける。太郎兵衛平の草原であっちへにけたり、こっちへにげたりの子ウサギは、カンロク君のタックルも無なくにげていった。つかまったら、晚のカレーの肉にされると思ったかウサギも必死だったらしい。夕飯を炊いていたら立山のボッカがノケ人位のギョウバでやってくる。ちよとした行列だ。なんでも地蔵を作るとかで来た、一人のボッカが話してくれた。

富山(6.40) 岩井谷の頭(8.20) 薬師岳(9.20) 太郎兵衛平(13.00)

7月5日 晴

太郎兵衛平より有峯を経て、小見へ。太郎兵衛平で気持のよい一夜を明かして、有峯へ下る。長い夏山も終る日だ。歌をうたいながら、どんどん、お花島の続く道を下って行く。折立まで森林の中の急坂だ。昨日のボッカが近っていた。技師の人達に会う。ダンプカーのうなりが、だんだん大きくなり、ダムの工事場に下り立つ。折立峠の下をトンネルを通り、足の下に有峯ダムを見おろす。ダムの町有峯、ダムは水をためはじめていた。ここからの自動車道路は重いダンプカーが走るのか、まったくの水平で、仲々道はつきない。やっとダム地点へ着き、工事場の人におしえてもらった事務所で、車に乗せてくれる様子のみに行くがだめらしい。小見まで歩くと五里以上あるらしい。ドンさんが交渉してくれる。運よく、小型トラックに乗せてもらい、三人ニコニコと、去り行く薬師を見ながらトラックの荷台にしがみついて、ふり落されない様にしていた。富山の巻し、ビールはもう目前と思うと、僕等三人は自然とうれしくなるのをした。

太郎兵衛平(7.00) 折立峠(9.30) 有峯(11.30)

富山地铁小見駅(14.30)

＝ 釧・穂高縦走 ＝

飯 田 進

期 間 7月27日 ～ 8月3日 (月)

部 員 リーダー 伊 藤 久三郎 (主 3)

倉 藤 孝 次 (主 2)

小 松 史 昭 (理 1)

飯 田 進 (主 1)

34年度夏期合宿は釧岳二股にB、Cを置き10日間の合同合宿の後三班に分れ、立山東面、黒割漣流方面と穂高の縦走と分散合宿を行った。二股では連日雨にたたられたが縦走では毎日晴天に恵まれ全く快適であった。途中主食のパンにカビが発生し食えなくなったのは残念である。それとキスリングの故障は失敗であった。これは自分の事なので仕方がないが、他の人に迷惑をかけて全く申し訳ない。些細な事でも注意ががんじんである。

7月27日 晴

二股発(7.00)～真砂沢出合(7.55)～長次郎出合(8.20)

～ 傾御前(10.30)～ 雷鳥沢着(11.40)

二股合宿を終えた我々四人は皆より一日早く穂高への縦走についた。真砂沢出合より四爪アイゼンをつけ、くさった雪をふみしめながら傾沢を登る。長次郎、平蔵と釧の誇る雪渓を右手にながめながらボッカであえいだ道を逆行途、少し足がくたびれた頃御前に着く。ここで一服カンパンをかじる内に、ガスがまさ出して西風が少し吹き出したのでさっそく御前を降り、今日の予定地雷鳥沢に到着。

まずは足馴らしに終る。横の高校のテントのやかましいのに悩まされながら夢の中。

7月28日(火) 晴

起床(5:00) 出発(7:00) ~ 一ノ越(8:40) ~ 浄土下(富山大研究所)(9:15) ~ ザラ峠(11:30) ~ 五色ヶ原(13:20)

前日同様の晴天にいさんで出発。雷鳥より一ノ越迄は一般路だけに人が多い。行列を作って一ノ越へ。我々はここを列を離れてすいた道浄土を向う。はるか遠くにポツリポツリと槍のホサキが見えている。嗚呼、あれを越えて行かねばと思うと何か途なき旅路の様な気分になる。横の小松君は一しきりに感激して、早く槍に行きたいといっているが、こちらはすぐ目の下にある五色へ早く行きたいのである。しかし道は浄土より次第にけわしくなりガウガウの石道が続き如何なるピークもまめにその上を通っており、だんだんと荷物が肩に重い込みだした。昼近くにようやくザラ峠にさしかかる。ここも又、石ばかりの峠を名の如くザラザラし全く歩きにくい所である。この坂道を無事通過すれば五色は本当に目の前なのだが運命の神様は無事通してくれなかった。こともあろうに小生のキスリングの負皮をつけねからはずしてしまった。南無三、此の重い荷物を麓高迄どうして運ぶか、いや五色までもつらい事なのである。負皮をくっつけてある糸が腐っていたのを修繕せずにおいた小生の不注意から皆にとんだ迷惑をかけてしまった。しかしここで永く止って居るわけにもいかず、先づは五色へ行こうと云う事になった。五色には小屋もあるし、何とか出来るだろうとゴワレたキスリングを肩にかっいでやって小屋にたどりついた。しかし小屋の人の「先日XXの人達が新しいキスリングをこわして、捨てて帰ったな。」という失望の話を後にして又エッチラコッチラCamp地に着いた。ままよと思案はテントを張ってからと仕度にかかる。空は青空、豊かな青草の上萬岳を前にして、

ふり返れば淨土の間から立山が顔を出している。実にすがすがしい所である。このよき環境で智慧をしぼってキスリングの修理にかかる。結局切れた糸を針金で代用する事になり、しばし針、木の前で針仕事を始める。伊藤さんもキスリングのほころびをつくらっている。倉藤君は食事前には一服と前の小屋をバレがタのついた新生を買ってきた。キスリングもどうにかなおり、食事にかかる。水は雪溪の水である、朝は水がとまってる事だろう。水を燃やしているところにも堂林君の人が来た。いやな感じである。

7月29日 (水) 晴

出発(6:30) ~ 越中沢岳(8:35) ~ スズ小屋越(10:30) ~ スズ小屋(11:50) ~ 間山下(13:00)

ここ四日間ずっと晴天が続いている。気温も並である。朝起きて見ると雪溪のテントは大半は消えてわずかに一つだけ、それも、もう出発の仕度にかかっている。こちらはあわてず食事をしてからスズ小屋に向う。昨日と同様こまめにピークを通りながら進む。どうしてこう越中の人こんな面どくさい路を作ったのかうらめしくなる。越中のマンキレタンめがと思いつつも歩け歩けである。登ったり降りたりしながらやがてスズ小屋にかかる。まだ朝の霞であるがここで食事を取り元気を付けて一気に間山をめざす。スズ小屋より間山までは青草に灌木がまじり、テントを張った後がそこかしこに見られる。我々のテントは間山のすぐ下の小さな雪溪の横に張る。到着したのが早かったのを比較的よい場所が取れた。下はかたい粘土である。夕方間山に登る、薬師岳が柔和な姿を見せている。明日も良い天気だろう。ハダレであるがあまり冷たくない。重い荷物を背負ったせいだろうか、何しろこの二日間は実に苦しかった。明日の薬師越は軽かもしれない。

7月30日 (木) 晴

出発(6:15) ~ 間山頂上(6:25) ~ 薬師北峰(7:15) ~ 薬師南

前峰(8:45)～薬師峠(11:00)～太郎山(11:30)

朝日をあびた薬師岳が美しい姿を映しだしている。黒部側に落ちる美しいカールが雪渓をのせてきらきら輝いてまぶしいばかりである。富山側は岩石が露出して黒部側とは全く対称的なものとなっている。我々はその中間にのびている緩い坂を登る。風が少しあって暑さをセーブしてくれる。風もこんな時は有り難いものだ。頂上に着くと穂高へ行く人や逆に進む人達で賑って写真を撮るのに不便を来たす有様。アルプスも人が多くなったものである。頂上での一服に雪渓を食器に入れしモンジュースをかけて食った。実に美味しく、真に山ならではの薦がする。何回も何回も雪を入れればジュースをかけて食う内にジュースが無くなった。美味を満喫した所で太郎山に下る。太郎山へは薬師を下り、なだらかな美しい坂を登って小川に沿って進む。何か外国映画に出てくる山村の様な美しさを。草花が茂り、その中を細い道が通っている。右手に道を取って行くとやがて太郎山との鞍部に出ここから小屋まで少し急な坂になる。小屋を過ぎると小さな雪渓が野原の真中にありここにテントを張った。太郎に着いたのは我々が一番先らしく、絶好の場所をさがし、早いとこ枯水を集める。テントを張って囲りを見まわすと、実に楽しい気分である。薬師が柔和な型を聳え、右の方に雪の平がカスんだ様に見える。ここまで来るとさすがにアルプスの真中であると云う気がしてくる。夕方散歩をしていると、有峯の灯がチラチラと見えて何だか潮熱を感じさせられた。雪林置さえ来なかったら更に良かったんだが残念である。

7月31日 (金) 晴

出発(5:30)～上ノ岳(6:25)～赤木沢(7:30)～黒部五郎(9:30)
～黒部真下(11:00)

からりと晴れわたった青空のもとに草原を歩く。上ノ岳より黒部五郎迄はハイ松が続き時には肩までの高さに達している。左の方には赤牛、水晶、鷲羽岳と

歩く方向にそのえなかなかに良き眺めである。他のパーティはもう姿が見えず、ただ「め組」のハッピーを着たリーダーさんが居る。城勢のよいパーティが我々と前後して行くだけで静かな山行に気をよくしながらドンドンと飛ばした。やがて黒部五郎の石ころの多い斜面の下にきた。登って見る迄は仲々の登りだと思っただが実際には思った程でもなかった。やはりもう足が馴れっこになってしまったのかも知れない。頂上に着くと先発した他の登山者達が多勢たわろしていた。下りは頂上から出ている、けわしいヒークを通過して下りているコースとカールのまん中を下るコースがあるが、我々は後者の方を選んで下る。テントはカールの雪渓がつかした所に張れる所が沢山あるので一応荷物をここに降ろして、更に下の方を探偵しに行ったが、水の便や、薪心持等から荷を降した所にテントを張った。昨日同様ここも草原で寝心地満点である。また午前中の事であり、久し振りに豊富な水を得たので、これ又久し振りにジューズを洗濯した。ここのカールはひまわりをして、雲の平に向って走っている。山は今迄の薬師上ノ岳等と比べるとさほどのスケールはないが岩場があり一寸面白い所である。小生も何処か適当な所を見つけて登ろうと思ったが帯に短かし袴に長して岩登りは断念した。皆もあまり登る気がないらしくゴロリと横になってカンパンをかじりながら今迄たどったコースを地図をひろげて見たりキスリングの肉割を干したりしているだけである。兎に角毎日毎日昼迄に予定地へ着いてしまうので午後は退屈してしまいアメ玉やヨーカン等の嗜好品が全くなってついには副食のソーセージにまで手を出す所様で、食糧係も初めは断固とそれを拒否してはいるがやはり誘惑には打勝てず次第にソーセージも少さくけずり取られて行った。今日も午後はた

8月1日 (土) 晴

出発(5:30) — 黒部乗越(5:55) — 三俣連筆頂上(8:00) — 双六小屋(10:30) — 縦沢岳(11:00) — 硫黄沢乗越(11:30)。

アルプスの真添くそぞり立つ黒部五箇岳を後にして森故の中を三俣連峰をさして登りは続いた。森林をくぐって行くので道は悪く、根が四方に張り出し、水が頭上にもかぶさって少しばかり歩きにくい所である。三俣連峰へは知らぬ間に到着した。槍ヶ岳を中心に左手に北鎌尾根、右に穂高の連峰が望まれ我々の道も一歩一歩目的地に近ずいていることを知らされた。ここからは右手に道がついておりゆるやかな坂を上り下りして最後双六池に向つてぐっと下りになる。双六池では多勢の人達がキャンプをしており小屋宿りの人達も散歩していてにぎやかな所である。ここからは又急な上りになっており硫黄沢乗越まではすぐである。硫黄沢乗越のキャンプサイドは堅い粘土と石ころで水も小さな雪渓タマリ水である。ここに我々と同時に着いた東北学院の人達がシルコを御馳走して下さった。嗜好品を持たぬ我々は何のおかえしも出来ず残念であつたが、しばしなごやかな交歓風景であつた。

硫黄沢乗越 ～ 北穂高岳

8月2日(日) 晴

出発(5:10) ～ 槍ヶ小屋(7:30) ～ 大喰岳(8:30) ～ 中ノ岳(9:05) ～ 南岳頂上(10:30) ～ キレット岳(11:20) ～ 北穂小屋(14:10)

アルプスのメッカ槍ヶ岳が頭上にのしかかってくる、西鎌の登りである。槍見温泉の方から登ってくる人が一入ポツリと見えてくる。西鎌を登り終ると日曜日とあって附近は人の海である。それで槍の頂上へ登るのをあきらめ北穂へ向つた。このコースは一般登山者が後から後から列を作り道端には空缶や折箱等でずい分とよごれている。四五年前と比べるとずい分きたなくなったものである。北穂の頂上は小さく我々の大きなテントを張るのは困難な様なのでビバークする事にして雪をとがして食事にとりかかった。うまそうなッパがぐつぐつとにえている横を誰かがかけて行つた。なぜにこうも行儀の悪い人が居るの

だろうか。山へ来たらそんなものはいないのだから悲しい事である。

8月3日 (月) 北穂へ上高地。

出発(5:10)～酒沢岳(7:15)～穂高小屋(7:30)～酒沢上ヒュッテ(10:25)～上高地(12:10)。

朝、人に足を踏まれて目をさます。まだ凍りついている酒沢の雪渓を踏んで進む。途中酒沢岳で大きな落石があった。人が落したものであるが本人はすました顔をして通り過ぎて行った。石を落したと云う事がさほど重要だとは思っていないのかも知れない。奥穂よりツリ尾根を通り前穂の上り口で右に折れ下る。酒沢の長い河原から林に入りやがて河童橋が見えたきれいな水の流れて顔を洗い上を向くと穂高の山々が填れた青空にくっきりとそびえている。我々の旅も終わったのである。長い様であったが実際は一週間しかかかっていないのである。よい天気にも恵まれて沈黙をしなかった事が段々の足を速めたのであろう。長い縦走においては体力を保存する意味で沈黙もよいかもしれない。しかし、今度の様に天気に恵まれていると距離を少し短かくして毎日歩いた方が時間的にも結局は得であると思う。それに足が歩く事になれて来ると登りも案外楽な様である。とにかく楽しい縦走であった事に間違いはない。

秋の水曾駒岳、宝剣岳

森本全彦

リーダー 大関(E.2) 飯田(E.1) 森本(L.1)

10月13日

大関、森本 三名より、飯田、大関より、大阪発23.34東京行。

10月14日 曇り 後小雨

上松よりゆっくりとしたピッチで、今日の宿泊地5合目金懸小屋へ。時々顔を見せる太陽をあびながら、右左と黄金色をはなつ稲を見ながら、のんびりと行く。三合目附近で小雨に会い、用意して来た傘をさしながら進む。伊勢湾台風の為、大木が道にどんとあぐらをかいており、台風のすごさを、ここでも思い知らされる。一ヶ月半も練習をやめたためだろうか、疲れが非常にはげしく感ぜられた。

9.40 上松 ～ 10.20 駒岳神社 ～ 11.00 二合目 ～ 12.00 敬神 ～ 16.00 金懸小屋

10月15日 晴

金懸小屋より宝剣小屋へ。

冷さが身にしみ、食料も各々が、パッケージづつ持って来たため、すぐにへるようすもなく重たさを感じると共に、食料の無計画に腹がたった。中岳の登りでW.V.の一人と合う。

正午前宝剣小屋へ着く。風と雪の被害を最少限度に、くいとめるためか、トタン屋根も窓ガラスも全部ヒリヒリはずされておき、雪が厚く積っていた。名古屋の人々より、東京学大のメツチエン3名が、伊那側で行方不明とさく。真銘の程はわからないが-----。

一度千蔵教カールへ下るが、明日の行動の事を考へ、宝剣小屋へもどる。

8.00 金懸 ～ 10.30 二合目 ～ 13.30 宝剣小屋

10月16日 曇り 後吹雪 後雨。

小屋のすぐ前には天狗岩がデーンと腰を落ち着けており、見れば見る程天狗に似ている。小屋より天狗岩へトラバースするが、木曾側は、風が強くて岩登りはむりなので伊那側へまわる。宝剣岳東面の岩稜を大関、森本で登るが2ピッチで途中のルンゼに下る。岩は逆層で岩をさけて、草付きを行かねばならなかつ

た。又、浮石が多く、思いのほかやばかった。

宝剣岳はこの様な岩ばかりの様なので中岳の方へ行く。

飯田、森本で中岳東面の岩(ロックガーデンのブラックを大きくした様な壁)を登る。初めは、フェースでガレをコンティニアスで進むとキヤッスルみたいなクラックを登るが、飯田はピントが打てず、岩をさけてガレをつめて中岳頂上附近へ出る。

小屋で昼食時台風が近づいているらしいというので、そうそう撤収して下山する。食料もそんなにへったようすもなく重荷を肩に感じ、ピッチをあげて上松へ。一年共は大関さんについて行くのがせいっぱいで上松についた時は、一ぺんに今までのガンバリがぬけてぐったりしてしまった。

(稲島の方へ下山する予定であったが、台風で道があれいているとのことだったので断念する。)

8.00～12.00 宝剣附近岩登り、 1.10 宝剣～18.35 上松駅

新雪の前穂高東壁登攀

越田 和 男

〔参加〕 越田和男(S.3) 田中収(E.3) 小松史明(S.1)

〔紀行〕

10月14日 雪

松本→上高地→松高ルンゼ末端、

沢渡より降り出した雨は、中の湯ではミゾレになり、上高地では雪となった。

ガスの切れ間から見える岳沢にはべっとり雪が付き、アイゼンを持っていないのが不審である。ピーケルは持って来て食べたと思う。

残備は夏天で、食糧もパンとそばのみにしたので荷は軽い。集又の谷に入る頃から降雪は激しさを増し、視界が利かぬ上、三人共始めてであるので松高ルンゼなるものがどの辺にあるのやら見当がつかぬ。その内に積雪量は一尺にも達し松高ルンゼ末端の河原にテントサイドらしきところを見つけて除雪し幕営する。

上高地(2,50) 穂沢園(10,30) 松高ルンゼ末端(13,20)。

10月15日 晴後曇 中島新道より集又台地へ。

昨日とは打って変わった上天気、新雪の峰々は光り輝き美しい。松高ルンゼ左岸につけられた中島新道の急登には雪が付き非常にづらい登りであったが、幸いにも上から一人下って来たのでラッセルは助かる。部分的には相当危険を感ずる様な処もあり、3時間も費やして池にたどり着く。池は話に聞き予想した通りすばらしき別天地であった。他に2パーティ入っていた。一尺程の積雪量を半分解けかかった様なみぞれ雪であるので、テントを張るには全部除雪せねばならず非常に面倒くさい。午後はA沢のゴルあたりまで偵察に出ようと思ったがガスが降りて来たので中止して、池の附近から四峰の壁をとくとながめる。^{松高ルンゼ末端(2,00)}_{集又池(11,50)}

10月16日 晴 A沢より前穂高岳往復。

ガスがひどいので予定していた東壁アタックを中止。ガスは上がりそうもないが、降り出す気配もない様なので、A沢のゴル附近を偵察する事にして出発する。A沢の雪は深く部分的に太ももまでもぐるが、前日のパーティのラッセルがあり比較的楽に登れる。A沢のゴルから前穂頂上まで足をのばすが、稜線上は風が強く楽ではなかった。小松がバテ気味だったので、頂上で簡単な食事をとって即ぐに引返す。A沢の下りは重たい雪に足をボコボコととられ降り難い。

テント(2,30)~A沢ゴル(9,50)~頂上(10,30~11,00)~A沢~テント(12,00)

10月17日 晴 前穂東壁A.Bフェイスアタック。

5.3の起床。台風が近づくと言うのに思いがけなく晴れた。昨日の天気図で黄
海にあった高気圧が張り出して来たのだろう。三人共大いに張り切り7.00テン
トを出発する。A沢の登りは幸いが、見下ろせば雲海、その向うに八ヶ岳、富士
山・南アルプスと遠望する眺めは苦しい登りを忘れさせてくれる。A沢から東
麓第一テラスへ出るルートはルンゼを一つ間違えて引き返すのに30分以上のロ
スを出してしまった。A沢の略奪点から二つ目のルンゼをつめるべきであったの
だ。ルンゼ内の雲は重く苦しいラッセルであったが、田中が猛烈なアアイトで
これを突破した。このルンゼのゴルからV字雪渓に至る斜面のトラバースは実に
悪かった。夏の草付きに新雪のついた状態で、一歩一歩ステップを極めて慎重に
歩いたが、後から思えば当然アンザイレンすべきであったと小生リーダーとして深
く反省している。V字雪渓まで来ると雪が深いので安定感が出てホットした次第
であった。Bフェイスの取付きで越田、田中、小松のオーダーでアンザイ
レン。左端のカンテ状のところを1ピッチ、続いてV字雪渓側のゆるい斜面を1
ピッチ登って第二テラスへ出る。第二テラスにも30cm位の雪がついている。
コンティヌアスでも行けそうだが今度は慎重を期してスタカットで中央のクラッ
クの下までトラバースする。Aフェイスは中央クラックからの一般的なルートを取
るが、1ピッチ目の上の方のガブリ気味のところで小生浮石に手をかけてしま
い、あわててビトンにぶらさがってしまう様な事もあって、一ピッチ目が一番ヤ
バかったと思う。レッチには雪がついているのでトップは大部気持が悪かった。
これと云ったルートファインディングの必要もなく5ピッチで前穂の頂上に立つ。
頂上からの絶景を楽しみながら昼食を取り、A沢至由でテントへ帰る。

テント(7.00) ~ T₁(10.00) ~ T₂(10.40) ~ 頂上(13.15 ~ 14.00) ~
テント(14.55)

〔装備〕 ギヤル(麻30m2本) カラビナ 10
ハーケン 14(使用2本、うちビレイ用1)
ハンマー 2 すてびな:

10月13日 雨 撤収。

池では朝からみぞれが降り、時にはボタン雪ともなる。予定の日数も過ぎたので撤収して上高地へ下る。途中い々と云う程雨にたふされた。松高ルンゼの末端で一体みしただけであとはノーストップで上高地へ。ずぶぬれの体をバス乗場のたき火で乾かす。 テント(11.45) ~ 上高地(15.30)

来る日も来る日も山は笑ってくれなかったが、唯一日の晴天をタイムリーに利用してアタックを敢行する事が出来、何とも後味の良い山行であった。四峰に登れなかったのは残念であったが。

秋の大山

牧野 宏

牧野 宏 (E.3) ニ谷和成 (E.1)

10月13日 ◎ 大阪 22.00

10月14日 ●

大山口7.05 ~ (バス) ~ 大山寺8.00 ~ 10.00 ~ 6合目小屋15.

大山寺で管理事務所によりレインジャーから伊勢台風による道路の被害を念のため聞いておく。雨中を6合目小屋に向う。晴天であれば元谷から北壁を予定していたが雨の為断念。6合目小屋には水がないので雨水をためたが10分間程でハンゴ一杯の水がとれる程の雨で水には不自由しなかった。

10月15日 田風が強く時々●

6合目小屋8.00 ~ 頂上9.00 ~ 剣が峯9.45 ~ 梶尾根ヒーフ往復
~ ユートピア小屋10.00 ~ 三鈴峯 ~ ユートピア小屋12.30 ~
振子沢 ~ 地獄谷文鳥テント場14.00 ~ 16.30 ~ 壁沢F1引き
返しキリン沢F1 ~ テント18.00

今日も台風18号の為前線が活発となり悪天候。ユートピアから振子沢を下って地獄谷に入る。振子沢を下るには振子沢への尾根道を約15分たってコルに出してから振子沢に下るとよい。途中山ブドウの木がたくさんある。テントを張ってから壁沢サリン沢へ遊びに行く。

10月16日 ◎ 時々 日

テント7.50～鳥越峠8.20～P18.35～P29.00～鳥が山9.30～
10.10～鳥越峠11.00～テント11.15～12.45～地獄谷～6号堰堤上部
14.40～大休口15.30

鳥が山のピークは大きなスラブで出来ておりローソク型の岩の近くまでお倒れからんで頂上に立つ。大山に来て始めて霧がはれたので頂上を40分、色づいた秋の景色にうっとりした為今日中に下山するには時間が心配になり、走ってテントに帰る。直ちにテントをたたみ地獄谷を下る。

伊勢湾台風の為、地獄谷の荒れ方はものすごく犬山寺でレインジャーに云われた通り完全に地形が変わっている。一般コースであるのに途中ザイルの使用を強いられ今さらながら自然の力にドギモをぬかれる。ガイドブックで1時間半の大体口までだがピッチを上げたにもかかわらず時間がかかり、今日中にはサトに帰れなくなった。

10月17日 ◎

テント8.45～地獄谷下流～テント9.15～加勢龍川渡渉10.30～
野井倉12.45～下見13.35～浦安15.15

時間があつたので地獄谷をさらに下ってみる。食糧が全々なくなり野井倉でサツマイモを尖敬し腹の虫をおさえる。下見まで橋が全部流失しておりバスが不通、腹のへっているおりにバス道を歩くのはこたえた。

山 嶽 寮

山岳部歌 山の歌

黎明の峭壁に聳ゆる峯は
環堵纏う久遠の姿
連る山脈渺茫として
紺青の空玲瓏に眠り
夢と希望に心は躍る
これこそ我等が憧れの山

嗚呼永劫の時の歩みに
夜らで立てる無音の峯よ
龍は去って白日の下
陽炎燃えて頂上に舞う
我等が叫び塵空に消えて
嶺に立つ山岳の壺

静かに夕陽落ち行く辺り
あかがね輝う山端の梢
黄昏漂う谷間の木藪
星の光の漏るる岩窟
自然を己が居館として
彷徨う我等が憩いの處

山岳寮炉辺譚

香月慶太

今年の春は暖い日が多かつたからか、サラ雪もすっかり融んでしまつて五月の陽を浴びた小舎の軒端から落ちる滴くも雨垂れに似た音をたてゝいる。一日の軽いツアーから帰った仲間はまだ夕食には大分時間もあるまゝに、皆炉辺に集つて例によつて紅茶の廻し呑みで寛いでいる。

× × × ×

自在に懸っている夕餉の汁鍋の加減を見ながらこの舎の主はいつもの様に語り出す。

「山岳寮が出来てから早いもので三十年を越えた。その当時の人むだんだん亡くなつたし、何れにせよ三昔ともなれば山岳寮の持つ意味を知らぬ人も多からうから、そんな事などを話して置きたいと思うんだ。

山に行く人、殊に学校山岳部を主体とした登高行の団体的な行動をとる人達には、何んと言つてもお互いの融合が悪ければならぬと考えたのが事の起りだつた。兎角勝手気儘な気分になりながちの甲斐の連中は団体行動、協同作業に対する自分を犠牲にした責任感と奉仕精神を涵養しようとしたのが狙いだつた。所謂せいたくを離れた生活、粗食と不便、不自由に耐える経験を持つて置くことがその獲得に必要なトレーニングであることは勿論だ。然しそうした行動から結ばれるという事にも増して、精神的な融和結合が肝要なんだと痛感した。各人が考えていること、悩んでいること、その総てをアケスケに話合う場を持つのが最も大きな

目的だった、そんな意味で小さい家は山仲間だけの自炊生活をしようと、御影に長産の一軒を借用に及び、入口に掲げた表札が、〝山岳寮〟だったのだ。

残念なことにはこの夢の計画は寮生活数日にして学校から内鎖を命ぜられ消滅してしまつた。それは〝山岳寮〟それ自体の目的に対する批判から禁止されたものではなく、思想的団体、集会に対する当局の取締りが余りに過激であつた爲めに、単純な事勿れ主義から出た学校命令なつた。生活としての〝山岳寮〟の幕切れは本当にアツケないものに終つてしまつた。

だが私の夢は醒かつた。せめてその目的に半分でも生かしたいと思つて設けたのが、報告オニ号の〝山岳寮〟欄なんだ。この欄では仲間の人達が何を考え、何を経験し、何を望んでいるかを自由に発表して、或いは深刻に考え合い、或いは愉快に笑い合い、各々が互いに理解し合つて行くことを期待した試み。果してその趣旨が完全に盛られてきたかどうかは疑問があるとしても、私としては甲南山岳部、山岳会のある限りこの〝山岳寮〟はいつまでも続けて行きたいと念願している。

追々齡をとつて来たこの主に炉辺の守りが出来なくなつたとしても、どうか仲間の諸君は折りある毎に集つてこの〝山岳寮〟の意義を汲んで炉火の焔を絶やさないうようにしてほしいと思うんだ。ほんとうに頼むぜ。

聞き終つた一人が炭の小枝で炉をかきまわると樺火の焔が一しきり明るく燃え上つてみんなの顔を力強く照らした。主は静かに安堵の面持ちで一同を眺めわたした。

× × × ×

飲み残した紅茶をのみ干して主は又話出した。

〝寮のことで思い出したが先日古い書籍等を整理していたら乗鞍の位ヶ原山荘に関する福島清教との契約書が出て来たんだ。その頃のことを知る人も極く少くなっているからこの機会に一とほり話して置こう。

山小舎が欲しいと言う願望は曩に云つた山岳会の時から終始持ち続けていて一時はロックガーデンに依ろうとして運動したこともあつた。然し先輩を持たぬ高校生では、殊に山岳会の解散を命ぜられる様な情勢の中にあつては一寸手に負えない大事業に過ぎた。それから十年も経つて社会人も増え、甲南山岳会が正式に発足した頃、偶々乗鞍で小舎主の福島清毅が位ヶ原に山荘を建てる計画を持つてゐることを知つた。というより甲南が乗鞍に山小舎を依りたいと何かの機会に話した折に清毅が、それなら一ツ一ツに依りまじしようかと云つた契機になつて計画が急に具体化して来た。早速山岳会で交渉委員を依り掛け合いが始まつた。田口、湯川、喜多、山口、山岡等がその衝に當つてくれた。当初はせいぜい冷泉の小屋位のもので建てる気で居たところが清毅の構想はなかなかそんな小さなものでなく、所謂山荘と云うに適はしい立派なものを依るという。それでは当方は対等にはとてもおつき合ひは出来ない・資金がそれ程集まる目途はなし又利用度から考えてもそんな大きなものを乗鞍に持つのは勿体ない、それに支那事変も益々拡大して来るし、と云つた次第で遂に山荘は清毅が主体になつてこしらえて、甲南は一部の資金を負担するに止める。その代りに山荘の一隅に、甲南の部屋を設らえて常時優先的に甲南の人に提供する、との協定を手を打つことにした。出資については先方の希望で貸付金の形式を取ることになつて会員部員から集めた六百円を昭和十五年九月に清毅に渡して證書を収めした。その證書がこれなんだ。サツト読んでみると、

借 用 証 書

私銀貴殿より左の条件を以つて金六百円也確に借受候はつき条件を遵守可致万一違約の節は即時金額返還可致候

條 件

- 一、本金員は建設費に充てる事
- 二、無利子たる事

- 三、貸付の日より五ヶ年同額置後昭和二十一年一月五日に金百二十円也を返済し
以後五ヶ年同毎年一月五日に金百二十円也完返済昭和二十五年一月五日に返
済し終る事
- 四、小屋完成の日より向ふ十ヶ年向階下東北面を室を甲南山岳会員及び甲南高校
山岳部員に独占使用せしめる事
- 五、甲南山岳会員又は甲南高等学校山岳部員の宿舎若該室の定員拾貳名を超ゆる
時は、隣室又は之に代る室を一人一畳の割合にて使用せしめる事
但し毎年十二月三十一日より一月四日朝迄は一人一畳を超ゆる事あるべし
- 六、該室は別紙設計図通り作る事
- 七、該室を取壊の際は之に代る室を設け才四号の條件にて使用せしめる事
但しその設計に就いては貴殿の意見を徴する事
- 八、借受金完済迄は該家屋の権利を移転せざる事
但し貴殿の承諾を得たる場合は此の限りにあらず

以 上

昭和十五年九月二十三日

福 島 清 毅 ⑩

湯 川 孝 夫 殿

となつてゐる。宛先を湯川にしたのは金貸貸借に任意団体の山岳会を当事者とす
るのが不適當であつた事と、仲間が戦争に召集されて行く中で、彼は色言のため
に応召の誤れが無かつたからだ。

当時折衝に當つて呉れた人達は湯川を始め殆んど亡くなつてしまつたし、大東
亞戦争の勃発、激化、終戦に続く混乱時となつて清毅との連絡も杜絶えて、協定
もついそのまゝに過ぎて来た。今更貸借関係を云々するのは差控えたいが清毅は
チャンとそのことを辨えていて甲南の屋中には特別の扱をして呉れるのは嬉しい。

吾々の仲間の歩んで来た記録の中にはこんなこともあつたと云う事をみんなも知

知つて置いていゝんぢやなかろうか。再び同様の計画が出来て来るのを期待してゐるのではないか、一つの事業に皆の力を結集する仲間の気分の盛上りが今の会や部には欠けている様に見えるのは何とも淋しいと思う。

清穀が近く大阪に来るそうだ。是非会いたいと云つて来た。私も二十数年振りに会うのを楽しみにしている。みんなも彼に接して、今は亡き先輩達の活気に満ちた往時の情を彼の想ひ出話の中から見出すことも決して無駄ではないと思うんだが、どうだろう。？

× × × ×

陽も漸く西に傾いたようだ。屋根の雪解けの音も小さくなつて来た。炉の鍋の汁も充分煮え語つた模様だ。サアぼつぼつ食事にしようぜ。炉辺にくついていた仲間が一斉にずり下つて円陣が大きくなると食器が配られ、亦これから賑やかな一時が小舎のランプの灯の下で続けられる。オイ誰か薪を持つて来いヨ。炉をもっと明々と燃えそうぢやないか。

(三五—五一—八)

~~~~~サラリーマン氏と山~~~~~

雨宮 宏光

早いもので学校を出てからもう二年、すまじきは宮仕えの悲しさとか、毎日会社えいかねばなりませんので、好きな山もほとんど御無沙汰です。同じ勤めるなら学校の先生など一番良いですね。僕なら勤評問題で旗をふる間にせつせと山えいきますのじ。それでも閑のないものはそれなりになんとなく閑を休つて三回程山

え行きました。勿論日数がないので近くしかいけません、結構楽しかったです。
学校を出た年の四月それは丁度初出勤の三日前で
すか.....

最後の親のスネをかりつて富士山へ行きました。この時は何せ勤めの身となれば
遠くへいく機会もないからとにかくいける内にいつておこうと考え.....な
んとなく汽車にゆられて遠くへいきたかつたのです。.....

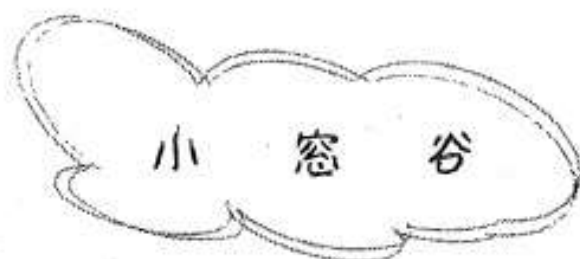
『これが最後だよ』.....という親共の声を尻目に勇躍家を出ました。
なにしろ当時は頑丈に出来ていました。一晚夜行にゆられてなんともなかつたの
ですから。しかし山の方は全くお恥しい次才、一日目五合目の小舎でわて、明日
天気晴朗なれど風強しで充分頂上這いける天候であつたにもかゝらず、七合目
あたりで、全く突然にバカらしくなつてそのまゝ山を下りその日の夜行で帰阪し
てしまいました。余りにも無計画にボヤーとひと出た様な山は、いつも中途半
端で終るようです。八月十五日にしかつた日も過ぎてやつと閑になつたのですが、
雪溪もない夏山はいつでも仕方ないので休みを冬に残す事にしました。しかし
冬になると.....ここが一番の泣き所を.....二三日の休みではどうしてもスキー
になつてしまいます。そして学校を出て最初の冬はスキー学校に無試験で入学し、
毎日かなりしぼられてきました。しかし甲南仕込のスキーは、ゲレンデでは余り
通用せず、他人様の軽快なウエーデルングを模目に、直滑降ばかりしていました。
五月のゴールデンウィークをむかえて、まさに山へいく絶好の機会なのですが、
皮肉なもので、小生の会社は、日曜、祝日、は特に忙がしく休むなどとは思ひも
ありません。大阪駅のホームでデカイキスリングを担いで、ウロウロしている奴
を見てみると山へいけない自分がなんだか悲しくなりました。その腹いせでもな
いのですが、六月の梅雨の最中その年は空梅雨だつたというのですかどしや降り
の雨の中、松本迄いけば晴れていると、会社のY君と二人、サカリのついた犬み
たいに出発しました。雨が降ろうか風速四〇米とこようか、とつておきの貴重な

休みを無駄にすごす気にはなれなかったのです。しかし現地は大阪以上の土砂降り、現役時代が一番好きだった沈黙のサラリーマン氏には思いもよらぬ事結局山をあきらめてスリムな担いで我間へまわり温泉につかって帰って来ましたが、ふりっづいた無精の雨は、濡りの汽車の窓をも激しくたたいていました。

八月の終り、取引先の人達と木曾駒へいきました。この時は天候にもめぐまれたのですが、連れに女性がいち、め岩魚など釣って、なんとなく山麓をうろついただけ、もつとも頂上へは登りましたが、暑い草いされのしつこいような印象が残ってる程度です。それでも夜焚火をさかんにして暖かいテントで寝る事ができた自分は幸福な奴でした。

冬も素直でスキー合宿があるときいたのですが、年末の殺人列車におそれをして結局志賀高原でなんとなく滑って来ました。学校を休めてから今日迄、およそ現役時代とは違った山登りしか出来ませんでした。それは、それなりに結構楽しかった。それでも以前の写真を見て、ふと急な雪崩にアイゼンをさしませていく自分の幻想にとらわれる時、今の山登りが、まだるこしくて、イライラする事があります。重荷を担いで、ラッセルにアエいた時の自分が、恐らくもっとも値打のあった俺だと思えば仕事に追われるとはいえ、ハイキングしか出来ない今が、損けくなります。勿論仕事も大事ですが、山えいけない自分は大切なものを知らず知らずの内に失っていくような気がするのです。この間、阿部さんと田辺君が、土曜の夜行って、月曜の朝帰りという、全く色気のない朝帰りスキーを実行したときいて、感心する以上は、つくづくサラリーマンの山というものを、わびしく思いました。しかし自分もそんな気持ちだけは失いたくないと思います。閑がなければ町の匂いのする裏山でもいゝから歩いてきて、山へいく心だけはいつまでも大事に育て、やりたいと思つています。ただ閑がないからといって山えいけない事は、決してないと思うのです。けれど今の自分があずかな休日を手近な山で楽しむのが、精一杯で、現役時代のような本格的な登山を行えない

という口惜しさを、あきらめる事ができないのは、なまじつか山を知っただけに、
なんといつても、悲しい事です。



田 辺 潤

11月の連休を利用してどこかえ行こうではないかと話が出たのは夏すぎであ
ったが、2日間と云う時間的制約をうけている我々にとって行き得る適当な山は
なかなかないもので誰しもが考える穂高、後立山方面は無理だし、そうかと云つ
てせっかくの連休をハイキング的な山行につぶすのも勿体ない気がして、結局自
動車が利用出来て時間的にも比較的豊かな銚子の西面へ入ろうと云う事になった。

しかし西面へは入ってもあの早月尾根だけはもう登る気がしないし、それより
もめつたに人の入らない、しかもアクシデント以来我々には馴染の小窓谷周辺に
なんとなく魅力があるんじゃないか、そしてそれにはその周辺でどこか登れそう
な所を見に行こうではないかと話がまとまり、阿部と現役の四年の連中とで出か
ける事になった。

久振りの上市、空は雨模様でどんよりと曇っている。早速トラックをター
して乗りこむ。水々の紅葉が美しく、以前やはり西面をやる目的で偵察に来た時
と同じ林に我々を迎えてくれる。番馬島の小屋は冬山の荷上に来ている連中で一
杯だ、それに小屋番も変って市会議員の弥助がなっているのにはおどろいてしま
った。早々に小屋を後にし、デカの追憶碑にお参りして白萩川を逆登る。川はダ
ムがふけ所も出来て以前とは大分様子が変わっている、S字峡のすぐ下のダムはか

なり大きなもので、梯子を使って乗越さねばならない。減水期なのでS字峡も案
に徒渉出来、岩壁のトラバースはしなくてすむ。池の谷の出合あたりで、へばっ
つてしまってどうにもならぬ。それにここからはかな止まで行かないとキャンプ
サイトはないなどと勝手な理由をつけてすこし小高くなつた所にテントをはる。
今日中は小窓谷の入口あたりまでも偵察に行きたいところだがその元気もない。

しばらく休憩して、せめて池の谷の入口でもものぞきに行こうと出かける。しかし
ものの／＼のれも行った所でオノの滝にぶつかってしまって進めない。まわりの
すばらしく高い泉涯の彼方の曇り空からポツリポツリと雨が降り出した。さすが
はイケン谷などと考えながらひきかえす。雨がはげしくなつて来た。上は雪だろ
う。現役が晩飯を作ってくれるまでぐっすり昼寝する。山へ来た方が体が休まる
のだ。

明るる朝、あまり天気はよくないが今日中は偵察出来る所までいつて下山せね
ばならない。はやくからやりなさいと阿部をおこすが、なんだかんたんと云つてなか
なみおきぬ。やつとこころ時に出発する事が出来た。現役の連中は我々と一緒に
行くのかけむたいのかどこか他所へ行くらしい。なさけない奴等はかりねなどと
少々腹をたてながら白杖川を進行する。雪は10〜15cm位で予想外に少な
い。

小窓谷の入口の滝は雪がついて真直ぐには乗越せない。アンサイレンして大窓
側をまいて乗越す。最初から難場だ。「デカ」のケルンが雪のしとねをかぶって
静かに我々を迎えてくれる。すぐオノの滝を乗越さねばならないが、これもスト
レートには越せない。左岸をまかねばならないが、づるづるのなめらかな岩壁に
雪がついて悪そうだが、せまいバンドに沿って一段登り、ハーケンをうってホー
ルドをさかすが何も無い。片足だけがのるスタンスが一つあるだけだ。不安定な雪
をホールドに体をよじつて強引に乗越す。久振りの緊張と、ファイトがわいてく
る。小窓谷の側壁は相も変らず黒々と空にそびえ立ち、新雪と枯草と相俟って凄

い様相を呈している。右手に小窓尾根の背までのびているルンゼのあたりより雪溪が残っている。雪溪と云うよりは、むしろ氷河に近い感じで、くずれた雪溪がセラックスの跡にごろごろとこぼれている。ガスが溜る平山の方から下り出し我々が偵察せんとする池の平山の側尾根をかくしはじめた。この側稜は、下から見ると、上よりその顕著なものか3本あり、一番上部のものは、尾根と云うよりは、壁にちかく、その頂は大窓、小窓間の国境線線上のピークをなしている。2番目のものは、下半が背の平らな、遠松つきのゆるい傾斜で、上部ではそく、池の平山の頂へとひかる岩稜となっている。3番目のものは、その大部分がブッシュの入りまじった瘦尾根で、他の2本にくらべてほとんど登攀価値がある様には見られない。これらの3本の尾根の間には夫々ルンゼが入っているが、傾斜から推して、あまり深いルンゼとはなっていない筈だ。一方、小窓尾根側は谷の下半分は、大きなオーバーハングのいくつもはり出した単付の岩壁で、とても手がつけられないであろう。唯前述のルンゼが小窓尾根のどの部分に出るのか興味のある所で、積雪には充分登降路として使えるものではないだろうか。小窓尾根側上半部は、いずれも最下部に於て滝をなしている底の浅い、幅の広いルンゼとなっており、その奥にマッチ箱ピーク、及び小窓尾根の頭の側壁、かかまえている。いずれにしてもこれらの登攀の可否は、今後の偵察に待たねばならない。

假等が遭難してビウアークレタと思われる地点まで上り、雪が降り出したのと時間がなくなつたので、オノ目の偵察を終えて引かえす。

直つてながら、この原稿を書きさしにしてこの5月22、23日とオノ2回目の偵察に出かけたので、その時の様子を簡単に書いて見る。まず、池の平山の側稜は、最上部のものは、岩壁ではなく、3つのピークをもった岩稜で、その最下部のものは他から竝立しており、下から見ると時は、それらが重なり合つて岩壁に見えるものであつた。岩は完全な逆層で、しかもその各々のスタンスが甚、乃至は

草付で、下から見た程アプローチも長くなく、決的なクライミングが出来そうにもない。2番目の尾根は、小窓谷中最も登攀の可能性のある尾根だろう。前述した様に下半部は、2段になった傾斜の比較的ゆるやかな道筋で、中央部より上は、いくつもの小さな岩峰をもったブイフリツサとなっており、小窓のゴルより見た所では、北総の東嶺を思わせる様な尾根である。しかしこの尾根の取付は非常に悪く、最末端は、逆層のオーバーハング気味で簡単には取付き得ないだろう。上部或は下部のルンゼへ入ってサイドから取付く方が容易に思われる。

それから1回目の偵察の時には見えなかったが、1番目と2番目の尾根の間のルンゼは意外奥までのびており、上部は池の平山の側面となっており、2番目の尾根に次いで興味のもてそうな所だ。オ3番の尾根はやはりブツブツが多くて問題にならない。

小窓谷川は、下半部の大きいルンゼを除いていすれも登攀の可能性はない、と云うより小生にとって登れる自信は全くない。

全体的に見た場合小窓谷の両岸は、期待していたよりも、ずっと登攀の可能性のある所は少く、わずかに、池の平山の上より2番目の尾根と、その上部のルンゼの奥の側面ぐらいしか手のつけぬものばかりであった。

『山岳部の在り方』について

時に新入生諸君に ～ 理三 越田和勇

春夏秋冬、登山のシーズンには必ずと云ってよいぐらい遭難事故のある今日、登山と云うスポーツに色々と社会的な批難が持ち上るのは当然の成り行きであり、

遭難と言うものが社会的な罪悪であると言う事は、我々が常に或る「社会」に属している以上明白な事であります。そこで、我が甲南山岳部がこの遭難を避けるべく如何なる方針をとっているのかを少し述べて置たいと思ひます

× × × ×

我々山岳部が登山で事故を起こし一団員の尊い命を失つたのは三年前の事であつた。この遭難事故に対して当時為された徹底的な批判、反省が現在部の方針としっかり結びついている事は言うまでもない。この反省文の中の計画や行動の具体的な物はこゝではさけるが一つだけ、これはいつの時代にも学校山岳部と言うものがある限り、絶対に忘れられてはならない重要な一頁がある。それは「進歩」と言う事に対する誤つた考え方」と題した次の様な一文である。

「我々は、常に部の進歩と言う事を唱えた。しかし、我々の謂う進歩は余りにも技術偏重に陥み、山岳部本来の使命であるべき良き登山者の養成を忘れていた。こんな考えがえてして『僥倖』と言う様な誤つた考え方を展開させる。部は登山者を養成する場なのだ。目先の功にとらわれて焦る事はない。この点が欠けていた。今迄良き登山者を養成すると云う考えに基いて行動した事があつたか？この点今後充分に留意したい。今一度云う。部はクライマーを養成するに非ず、登山者を養成する場所である。」

以上の事は最近遭難を起こした殆どどの大学山岳部に当てはまる事ではないかと思う。更に当時のリーダー兩宮氏の言葉を借りる。我々が一個の完成された登山者をらんとするに、四年間の部生活は余りにも短い。そこでしたばたする必要はない。部生活では登山の基礎的技術と知識が習得されたらそれで充分である。登山者への道は果しなく長い。僥倖という旗を掲げて突進する事それ自体が間違っている。登山者の養成と云う目的を犠牲にして部の進歩を計つてはならないと云う事である。

次に我々は声を大にして叫びたい。登山者は山で死んではならないと云う事を。

この当り前の事が果外おろそかにされるのはどうしたことか。好きな山で死ぬのが本望だなどと、はた迷惑も考えない利己主義なヤカラは少くとも学校山岳部からは追放せねばならない。登山をスポーツなりと云う以上健全なものでなくてはならぬ。生命の危険を犯す類な山登りはスポーツマンシップに反したアンフェアな行爲である。命をかけた一かばちかの登攀は、成功すれば記録としてはすこぶる立派なもので、ジャーナリズムをにぎわすのはもってこいものだ。そうして失敗すれば、これまた三面記事の特ダネとなるのである。こんなものをスポーツとは云いかねる。

山登りにおける記録の争いは、あくまでオニオニ的なものであるべきで、学校山岳部においては、登山者を養成する過程における副産物であるべきものではないのか。若い我々はこの点を特に注意する必要がある。山のカミナリ族を一掃するのは我々の使命でもあるのだ。

さて我々が山に向う場合には計画を立てねばならぬ。これはその時の部員の実力に合った山が、ルートが当然選ばれるわけだが、この部員の実力なるものの判断は極めて難しい。現役のリーダー会のメンバーは、部員の中では最も経験のある者ではあるが、まだまだベテランの域には達しないだろう。こう云う中でだけ部員の全ての計画が為される事自体に危険があると云えよう。最近置難を起した各大学の山岳部の多くがこの点に気がついた、そして、B会なるものの存在の意義が拡張され、全ての計画がこのO.B.会で更に検討された上で実施される様になりつつある事は喜ばしい事だ。甲南も大学山岳部としての歴史は浅いが、幸いにも輝かしい伝統を持つ旧制甲南高校山岳部の先輩をO.B.会に迎え、我々の計画の正否判断に一役買っていたらいいわい。

わかりきった事をゴタゴタと書き並べて申しわけないが、特に書き加えたい我々のモットーがある。それは山は楽しむべきものであり、苦しむべきものではないと云う事だ。異論もある事と思うが、私の云ふんとする事は、どんなやさしい

山でもトレーニングを怠ればたちまちに苦しい山となるだろう。要は、「トレーニングでなく、そして山で笑え」と云う事だ。この事は遭難防止に強く結びついているのだと思う。山へ行ってから泣いている人間によく出会う。又こんな新人をへうばう方法をシゴキあげている山岳部にもよく出会う。こんな真似はしたくない。こんな事をすれば、新人はそのシゴキに全体力を費やすだろう。そしていざと云う時に危険からぬけ出すだけの力の余裕を持たないのだ。下級生の犠牲を多く出した遭難事故はこんなところに起因するのだ。ところで、甲角の山岳部に入ればシゴキがないのかと思つてもらつても困る。上級部員中心主義の所謂シゴキはないが、山は容赦なく未熟者にシゴキをかける。この山のシゴキに完全に打ち勝っている事が楽しい登山の条件なのである。平素のトレーニングで自分で自分をシゴいてもらいたい。良き登山者ならんとする者の集まりが山岳部なのだ。はげましあつてかんばろう。

高校山岳部諸君へ !!

僕は昨年君達が夏山合宿の際に先輩の参加を拒んだ事を非常に遺憾に思う。君達は自主性と言う言葉の解釈を間違っている。先輩の指導を受ける事が自主性の欠けになると思つてゐるのだろうか。スポーツの世界では全て指導と云う事が大切なのだ。君達も二三年前までは大学部員の参加の下に合宿した。そしてそれを技術、体力が無かつたから止むをえなかつたと云う。技術や体力さえあればむしろ先輩は必要なしと云うのか？山登りとはそんなものではない。

君達は先輩が合宿に参加すれば高校生の合宿でなくなると云う。何故だ。もし

君達がその先輩の云いなりに行動する様な事になれば、それは君達のせいだ。先輩の意見を聞いてその良し悪しを自分でもう一度検討して見るだけの山の知識を君達が持ち合わせていないのだ。その不勉強さをさておいて自主性がどうのこうのとはまったくあきれる。早い話か先輩が一人来て無くなる様な自主性ならぬ方がましだ。もっともつと勉強してもらいたい。

君達があくまで自分達だけの山登りを望むならそれは可能である。(成功するか否かは別として。)しかしよく考えると問題がある。君達は幼ない中学部員を引率し指導するだけの自信があるのか。北アルプスなどに行かずに六甲山ばかり歩き廻ると云うのならよい。しかしそうもいくまい。自分達のレベルに応じた山へ行きたいと云うのだろう。その自分達のレベルを誰かどうやって判定するのだ。

話をもちす。我々だってかつて高校の合宿に参加したのは何もボッカに行っただけでもなければガイドに行っただけでもない。登山家としての任務でもある後身の指導を志さし、そして高校生と共に山に取っ組んだつもりだ。つれていつてやつたなどとの気持はもうとうない。それをつれていつてもらったと解釈するのは先にも云った様に君達の不勉強の端せるわざである。

正直に云って我々も、君達だけで剣や霧高で合宿する事が心配でならない。と云って六甲山だけでガマンせよとは云いづらいのである。とにかくもう少し勉強してくれ。そして「今度はこんな計画を立てたんだが一緒に行きませんか」と云ってくる日を待ち望む。

もっとおそろかな気持で山に登ろう。登山者の道は果しく長い。その一段階であるべき高校山岳部が自主性などと称して独立すべきものなのか？

~~~~~ 食 糧 計 画 ~~~~~

伊 藤 久三郎

このたびの部報に食糧係としまして、何か研究を発表せよとの申出がありました。食糧係の研究不足のため、何も出来ないうちに締切日も近づき、申し訳ありません。そこで食糧係として一番苦心する食糧計画について色々書いてみたいと思います。まず食糧計画について、費用に関して、無雪期及び積雪期における主食と副食について、今後改良されねばならぬ点に関してまとめてみます。費用に関しては現在の所、無雪期で一日、一人百円、雪積期で一人一日百三十円となっています。次に無雪期及び積雪期における主食と副食に関してありますが、無雪期の主食としては、米、パン、カンパン、ソバ、等を使用しております。米は我々日本人の主食であるため、一番喜ばれるのでありますが、欠点として、重いこと、調理が不便であること、すなわち調理に時間がかかる、そのため燃料を多量に必要とする。以上のような欠点があります。今後無雪期といえどもなるべく米の使用をすくなくすること、又部員諸君もこれになれるように日頃から努力してもらいたいと思います。パンは長所として、軽いこと、調理が便利である、副食も簡単ですむ、燃料もすくなくしてすむ。欠点としては、食べにくいこと、腐敗しやすい、そのため保存に注意せねばならない。カンパンは長所として、軽いこと、調理が便利であること、副食も簡単ですむ、燃料もすくなくしてすむ。欠点としては、食べにくいこと、食べるに際して多量の氷を必要とする。パンよりも費用が高くつく、軽いがパンよりもかさが大きくなる。ソバは特長としては、

米に次いで食べよい、調理が便利である。すなわち短時間で調理が出来る、しかも簡単である。多量の水を必要としない。欠点としては費用が一番高くつく、腹もちが悪い、あまり軽くない。次にこれらの主食に対する副食であります。主食が米、ソバの場合はあまり問題とする所がありませんが、主食がパン、カンパンの場合には色々と工夫する必要があります。現在では、パン、カンパンの副食としてはケヤム、バター、チーズ、ソーセージ、それにつく飲物として、コーナヤ、ココア、ミルク、シユース等を組合せています。これらはたいてい昼食として使用しております。次に一日の主食の組合せは朝食には米、昼食には、パン又はカンパン、夜食には米又はソバとなっています。(これはおもに定着している場合にかきつてゐる。)教人の部員からは昼食として米を使用するようとの注文があり、今後とり入れても良いと思つてゐます。雪積期の主食については、燃費期とあまりかわつた所がなく米の使用回数が減り、モチが新入に加わつてきます。現在では雪積期の主食としてはモチ、ソバをおもに使用してゐます。モチは長所としては、食べよいこと、調理が便利でかつ簡単であること、腹もちがよい。欠点としては、費用が高くつくこと、重いこと等であります。モチの使用の最大の欠点はなんといっても重量の問題であります。この春山ではモチの使用回数を出来るかぎり減して成功しましたので、今後モチはアタック日の朝食として使用するぐらいにしてあとは全廃すべきだと思います。米は小屋において使用してゐるのみでテントにおいては使用しておりません。この春山ではパン、カンパン、ソバを主に使用してきました。次に積雪期において重要なアタック食についてありますが、現在では、チョコレート、アマナット、アメ、ホシフルドウ、ヨーカン、ソーセージ、ケクワ等を使用しております。以上が燃費期及び雪積期において現在使用している主食、副食及びアタック食についての簡単な説明とその長所と欠点をまとめてみました。最後に今後改良せねばならない問題をあげてみますと、化学食料(例えばアルファ米の様な物)を採用してゐること、食糧の保存方法の改

良（特に肉類及び野菜類）、パッキングのしかたの方法等があります。以上が食糧計画に関連して思いついた点をまとめてみましたが、今後よりよい食糧計画が出来るよう努力するものであります。

『山で見る夢』

経る 藤 安 賢 一

夢とは何んぞや、僕は今迄にそんな事を考えた事がない、不思議なものだとは思ふが、何故、人間は夢を見るかと言う事になると、さつぱりわからない。その様な事を考えれば、夢を心理学的その根をたづねて分析しなければならない、この様なことはめんどくさくてやれたものではない、夢とはおかしなものである、これをけわかれは立派なものであろう、或る本によると夢は意識にないものが出て来るとある。意識にないものが出て来る訳がない、素人はこう考えるしかも家の寢床で見る夢と、テントのミラフで見る夢と、そんなに違っていると思われぬ、夢と言うものは生活条件の変化によつて見るものか変わると云うものでもないらしい、しかしながらこれは同一人について云える事であらう、生活条件の異なる他の階級における人間は我々と異つた夢を見るのかも知れぬ、或る国の社会党の代議士などは、その国の自民党の代議士を、けちよんけちよんにやつける夢を見たかも知れぬ、又姓格の相違によつて見る夢は異なるであらうと思ふのであるが、反座に昨夜どんな夢を見たか聞いてみると、大体私が見たものと似ている、夢の種類と云うものはそんなにないらしい、もちろん社会的階級によつてその種類も当然変つて来るのではあろう。

さて山で見る夢にはどんなものがあるのであろう、沈殿が甦いて体力をもてあまして寝もれない夜、又一日教しいアルバイトをしたにもかかわらず寝れない夜、良く寝たにもかかわらず夢を見たと感じる夜等、夢と云うやつは、いつ假ひ出して来るかわかつたものではない、自分の氣に入つた山行では、大てい良く度ろから、他の衆しさにかくれて思い出せない・山で見た夢で一番はつきり記憶しているのは、おふくろと庭で日向ぼっこをしている夢を見た事である、これは三年ぐらい前に見たのであるが、その時には余程氣がこいしかつたのであろう、その他、友達の夢を見る事もある。しかし、この場合にはないてい、一語に山へ来ている奴は見ない、都会にいる先輩とか、幼な友達が出演する、又恋愛ものを見る事もある、誰かわからない、ぼーとして見た事があるようなない奴な、絵に表わせない、しかしなんとなく美人である、何か語り合っている、木がおい繁り、小鳥も儼が交っている、どこかの美しい公園の様な所である、ベンチがあつて、そこに座っている、他人は誰もいない、ええなあと思つていると、場面が変わってしまう、何の事はない、しりされとんぼである、甦きを見ようと努力する、だが見る事は出来ない、不思議なものである、もっとも、甦きを見る事が出来れば、映画などと云うものは差違していなかつたかも知れぬ、しかし甦きが見たいものである、面白かろうと思う、こんな事もある、その日天気が良くても雪の状態が悪くアタックに出られない杯な場合がある、その晩の夢は面白い、きれいな、青い空の下を、パートナーとどんどん登って行く、少々困難な所でも杖魚に超越す事が出来る、まったく調子が良い、早々頂上である、快晴無風、ぽかぽかと暖かい、広い尾根を歩いて行く、テントに滞るのかも知れない、他の所へ行くのかも知れない、どこへ行くかわからない、夢は目的はない、をたぽかぽかと歩いて行く、いい氣持である、又広々とした暖い、笑しく咲き乱れた花が太陽の光を、一ぱい吸い込んでいる野原を、自分一人で、さすらっている姿を見たりする、そうかと思うと突然後ろから悪魔の如きものがおっかけてくる、逃る、なみ足か云う事をさか

い、逃げなければと思う、思いながら壁に這っているうちに目がさめる、をすかった
と思う、しかし目がさめない場合がある。この様な時には大低目の前に断崖絶壁
が現われる、そしてそこから飛びおりる事となる、ものすごく長い、下の方に川
が流れている、すーとすい込まれて行く、大低下に着かないうちに目がさめる。
この様な夢を如何見るか、こんな事は心理学者にまかしておけば良い、しかし、
心理学とは面白い学問である、特に産業心理学などは、圣府学郎である私にとつ
て興味は深い。心理学に怒りの実験と云うのがある、我々に関係はない、しかし
面白い、例えば、或る個室に、或る人間を、何人か、順番に入れて見る、そして、
いろいろのいやからせをすることする、初めのうちは、平気な顔をしているが、段
々と怒り出す、その結果、涙を出すものもいように笑うものも出てくるだろう。
その他色々面白い結果が出て来るであろうか、こんな事は山と関係ない、もう
この辺でやめようと思う

外国の山へ行つて見たいと思う、どこでも良い、アルプスでも、ロッキーでも、
行かしてくれるのならどこでも行きたいと思う、しかし、やはりアルプスが一番
良い、あの辺の山々を数回つてみたい、すばらしいだろうと思う、何とかして行
つて見たい、夢にでも見れば良いと思う、早く見たいものだ。

先生のグループ

“剣尾山”に登る

高校顧問 植村三郎

七月四日(土) 一学期の授業も終りに近づいた頃生徒は試験を控えているが先
生方も夏山が近づいて来るので夏山のトレーニングも兼ねて日曜をかけたの近山

登山を剣尾山に登った。簡単な装備で行けるのだが登山を控えての事だからと高田先生
あたりは装備おさおさ怠りなしという^{しるたさ}様相である。参加したのは山田部顧問の藤
岡、高田、桑原の三先生に日本全土の山岳に悠々と人知れず歩き廻っている
松田先生、新任で講師であるが日頃の話に口数はそう多くはないが「俺が登った
話をこの取組望の先生も話していなさるわい」というような顔でさいておられる
増田先生、同じく新任でこれは又増田先生と全く逆で山そのものを山の装備して
登った事のない川村先生と私の合計七名である。初夏から真夏に入ろ
うとする頃で暑さも相当なもの、コースは阪急能勢口に二時半集合 能勢電で終
点は程近い山下で下車こゝからバスで約一時間乗上で下車して愈々剣尾山という
行程である。カタ電の能勢電鉄も新線の美しさと左右に変化する谷川の青い流れ
は都心を離れて数時間で我々を大自然の中に迎えてくれた、殊上で夏の味覚の面
仏をリックにつめてこて剣尾山はどこだろうと地図を頼りに歩き始めた。福住、
老田街道を面に進む、坦々とした田圃道である。〃山道は強いんだがこんな平な
道には弱い〃とこれから先に胸突きの山の控えているのを知つてか知らずみ先生
方も仲々の放談をしながら約一軒道は二つに分れて向もなく玉泉寺に到着した。
小休止して愈々剣尾山にかかる麓にヒリかかる頃にはあの田圃道の放言古士も大
部息が乱れている、殆んど消えかかった道標を頼りには、胸突八丁目も苦しい、
それもその筈土曜日の午前中を教壇で時間一杯働いた後であるから無理も無いこ
とであるし、日頃多少登って見たいと思つていても意の盡にならない我々である
から苦しいのも無理ないことである。

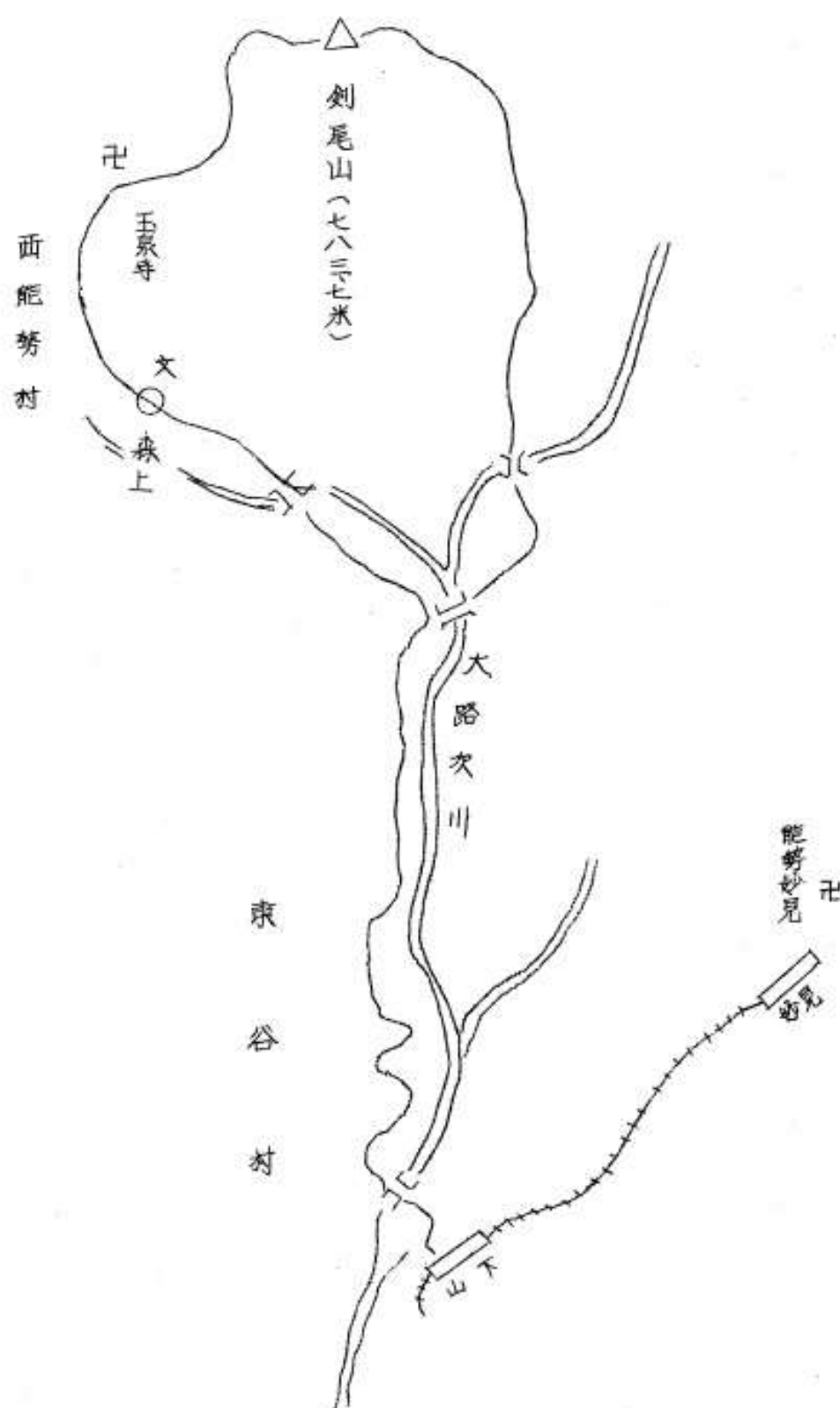
剣尾山の頂上に程近い頃にはすでに陽はとつぷりと暮れ、その上道は益々熊笹が
生え繁つて難路となる、夫々に用意して来た懐中電灯をてらしヘッドライトは道
を求め熊笹の夜露にピツシヨリ濡れ、くもの美に顔を撫でられながら途中脇道に
踏み込んで降りして漸く辿り着いた、もう股はヘリ動くのも苦痛であつたがこゝで
弱音を吐いては今後在取中ゴキ落され通して合うので我慢した、無人小舎が

あつた事はそれこそお助けであつた、この小屋の直ぐにきれいな水をたたえる池があり、イモリも浮んでいるかそんな事をかまっていられない、備えつけのバケツや杓で水を運ぶもの、米をとくもの、玉葱を刻む者、夫々は手荒い料理を依つて夕食を終つたのが十一時頃になつてしまつた、登り道に見えていた遠い村や町の灯もこの頂上では霧のため全然視界がきかずもう履袋や毛布にもぐるしか法がない、腹は膨れたが然し眠るには惜しい、歌声が出て来た、二人が和し、三人が合唱し、次の歌が出る流行歌かと思えば軍歌になり軍歌かと思えばタイタイパツパの雀の学校の先生になる

歌い通して夜の明けるかと思ふ山小屋であつたが自然と疲思かもれて来たのだうう歌の中で寝て朝露の中に朝の光が溢れていた

朝そろそろ歩きかしたかつたが朝露が寒く到底困難であつた、七月五日は永永岡原の打合会を午後に控えていたので他に用事を控えておられた要原先生と二人で他の五人の先生に別れを告げて一足先に下山した、下山はナイロン風呂敷を腰巻きにして朝露を妨ぎ昨夜の睡眠不足を感じながらも四、五日も頂上で暮らした様な気持で名残り惜しい気持ちであつた、

頂上には又格別の晨望と趣があつた事を残られた先生方から聞かされたか味わえなかつた原因が公用にあつたのだから仕方あるまい



秋を歩く

高校顧問 川村啓善

高田先生の山好きはよく知られているが、その高田先生が宝塚の北の方にいゝ山があるから連れて行ってあげようと誘って下さったのは去年の秋のことである。同じく山の好きな松田先生と、山には全く素人の私と三人で歩くことになった。宝塚から嵯峨平由利馬行のバスに乗り塩瀬支所前で下車。しばらくは、街道や田畠の中を歩いてやがて坂道にかかる。そのあたりは高い山は見当らず、周囲の景色を眺めながら歩いてゆつたりとした気分が味わえるところである。やがて池の青々とした水が見え、その付近で一服。そのあたりからは、道も細くなり、余り人も通らないところを進んだ。高田先生の道を確かめながら先頭を、松田先生と私とか、だべりながらその後を。山はあまり鮮やかとは云えないにしても色とりどりの色彩で色づかれ幸いこの好天にも恵まれたせいもあって秋であることを充分に感じさせる。

急な上り坂もなく、頂上を目指して登るというようなこともなく、ハイキングといふのがふさわしい。最高点が秀ヶ辻の403メートルである。見晴らしのいいところで周囲を見渡す。遠くに街らしいものが見える以外は大小さまざまな形の山ばかりである。急ながし場を用心しながら通つたり谷川にぶたりコースは種々の変化に豊んでいる。我々の多い道を進んだ所で静か池に出る。こゝに来れば足を止めて池のほとりでしばらく過ごしたくなる。我々は池のそばに腰をおろし用意してきたカンヅメを配ける。松田先生の山歴を聞く。

こゝまで随分歩いてきたがハイカーには谷川で一人歩っただけである。実・事か
だ。池からはやゝ下道となり、左にどつてしばらく、行くと百丈岩に米る。こゝ
ではクライマー達が最刻に練習中であり、あちこちにハイカーも来ている。百丈
岩から峡谷に下ると福知山線蘆場駅まではすぐである。秋の日曜日、大阪や神戸
の雑沓を離れて楽しい山歩きをするのはいゝコースであらう。僕自身にとっては
昨年一年間のうちで最も印象に残っている日曜日であつたように思われる。

“ 反 省 ”

高 二 安 井 正

僕も山岳部に入つてもう五年目である。その間ある程度の山行を行なつてきた。
そこで過去の山行や部内の出来事等についていろいろ反省し、思いついた事を正
直に書いてみたいと思つている。



いったい僕は本当に山が好きなのだろうか？僕は小学校六年の夏、親父に連れ
られて富士山に登つた。生れて初めての山行、何を見ても楽しく面白かつた。特
に裾野からなかめた富士の大きさに驚き、初めて雲海を見た時の征服感、山の
あまりの寒さに横り、頂上から拡大な眺に目を見はり、広々とした砂走をホイ
ホイとところから様にして下りたあの楽しさ等強く印象に残つた。この一回の山行
で僕はすっかり山登りが好きになつた。中学に入つて二年目の夏、初めて一般読
者の山行がある事を知り、さつそく白馬三山へ連れていつてもらった。今度は仲
間がいるので楽しかつた。白馬尾より見た白馬、杓子の富士に比べて男性的な山

親に気が引しまり、大垂溪を一步一步見をつかって登っては、上の山々をながめ、又よつれた雪面をしつとにらみながら、汗をかきかき登る。その間にみ上げてくる喜びを抑えきれなかった。夕方白馬岳頂上に立つて360度の大展望をむさぼる様にしてながめ、剣岳の雄姿を見た時の感激は未だに忘れる事が出来ない。剣岳を知った事だけでこの山行は満足した位であつた。山から下りてくると僕のクラスに乾君というこれ又大変な山好きいた。二人で死ぬまでには一度はツエルマツトへ行ってみないかと話し合っていた。その矢先、乾君が山岳部へ入った。その翌日、坂田君と乾君が僕を勧誘に来た。その時、僕はきつぱりその場を入部しようと思ひ切れなかった。山岳部へ入ると人を牛馬同様に酷使し、およそ山登りの楽しい面を全部抜き去つた様な山行しかさせてくれないだろう、死ぬ思いをしてまで山へなんか行きたくないと思つたからであつた。僕の前よりうれしそうに勧めていた乾君をバカなやつと輕蔑したり同指したりした。しかし今あの時、強引に入部させてくれた西君に深く感謝している。山岳部に入つた僕は予想を全くくつがえされ、実に楽しい思いをした。山行の楽しさに加え、大岡さんを初めとする上級生の人達の人間的な魅力にひかれた。ところが上級生も卒業されて僕達が高1の時には、部活動出来る上級生はだれもいなくなり当然僕達がリーダーシップをとらざるを得なくなった。以来積雪期、夏を通じて、北アルプスの一帯名の通つた山で合宿を行つてきた。そしてこれみらの合宿は、表向きはほとんど成功している。ところが本当に内面的にも成功しているであらうか、すなわち合宿に参加した部員全部が本当に満足した合宿を行つてきたのだろうか。ここに夏山の例をあげると、こうである。

今年の夏休みも合宿せんならん、「どこかええやろ」と、何んの希望も述べずに大
大学にきさに行く。大学から「どこそこかええのやないか」と云われる。ほん
ならそこえ行こうかと何ら検討もせず決めてしまう。ろくすつぽトレーニングも
やらすは、山行三日前から相変らず鞋な準備をして、大学の人と 3人に来て

むらいどうなりこうなり予定のルートをおいてサッサと山を下りる。下るとやれやれこの合宿も終わったなという気持ちがわいてくる。学校へ帰っても、まともな反省会もせずこの合宿は終わ。いったいこもんなさけない味けない山行があろうか。こんな合宿が度重なるとしまいに山行そのものまで面白くなくなってくる。僕も高2の春はイヤでイヤでしよかなかった、鬼の窟まぬ山行に参加するとあの様である。

それでは何故この嫌な合宿をくりかえすのだろうか、その理由の一つに我々は今までの山行の回数を我々の実力をと鑑量していた事である。山岳人の実力は、経験も勿論大きなパーセンテージをしめるであろうか、山を研究する事も忘れてはならないと思う。我々には、これが欠けていたのではなかろうか。山の勉強、これは登山技術の習得、山の自然界いいかえると気象や地質に関する勉強や山登りに欠かせない装備や食糧に関する研究等々である。以上の様な事が一応マスターされれば、今までのほんの浅い経験とか結びついて、今よりもう少し楽しく山登りが出来るのではないかと思っている。しかし僕はこのような勉強はもう少し年をとってからで十分だと思っている。僕は今までの高校山岳部が対象としてきた山及び登山形式についてリーダー会の一頁として反省している。というのは部の力量と釣り合わない山を送るべき、高校山岳部にふさわしくない登山形式を行ってきた事についてである、我々は今まで夏の徳高、剣、積善期の白馬等に登ってきた。いったいこれからの山々を我々は登れるのだろうか、匪惑く遭難した、その後とるべき行動を行えるだけの余力があるのだろうか、いやそのとるべき行動も解っていない、全くせっぱつま余裕のない山行しかできない我々に、本当の話できないのである。しかし登れている、ここに又山の恐ろしさがあるのをと思う。山登りには順序がある。低い山から高い山へ丸い山から、険しい山へという様には、いくつもの階段がある。その階段を走って登ったり二段も三段もとばして登っていったりしてはいけないのが、一段一段ゆつくりと登るべきだった。もう一

つ登山形式について特に甲南とことわらなかったのはどこの高校でも少しはやっていいるだろうと思う夏の合宿というものである。あんな小さい岩壁を登ったり、きかない雪の上をすべる争ばかり練習していったい何になるのだろう。ちょうどバカな高校生が未だのたはこのうまさも知らず、変な優越感にひたつてたばこを吸ってるのと同じである。こんな事をせずにしつと山々を歩きまわる方がよいと思う。

もっと具体的に云うと、まずリーダー。

結論から云うと、高校生がリーダーになるには少々年が若すぎると思う。生後17~18年、小さい時から山へ行つてると云つてもまともな山行の経験はせいぜい3年、こんな短い期間に、リーダーになりうるだけの力量を備える事はとてもできないと思う。だから高校山岳部はだれかしつかりしたリーダーを求め、山登りの楽しさ、面白さ、美しさ等のすべてを吸収するつもりで方々の山々をいろいろな方面から登り山を歩きまわる。この様な山行を重ねる各部員が振から山にほれこむようにならなければいけないと思う、又このような山行でもけっこう体カも増し、山の力もやしなえると思う。入部したら最後山登りが病みつきになり好きで好きでたまらないようにするように山登りをするのが高校山岳部の有り方なと思う。しかしこの様な楽しい山行をするにも、およそ山へ行く誰もが心にしつかりとどめておかねばならぬ事がある。

「俺は二度三人の仲間を雪崩でやられている。又も失くして帰る時の心持が分るだろう。いいか、君は「いろは」の「い」の字文を知つたのだ。俺にはまだ「ろ」と「は」とがある。ほんの字文をしただけつかりなのだ、それで山が嫌いになる位なら君は男ぢやない、俺は13の時から山に入っているのだ。いいか、君は「い」の字文を知つたんだぞ」この言葉は、横有恒、三田幸夫氏等三名が立山の松尾峠で遭難し、1人の仲間を失つての下山中、時のガイド、佐伯加蔵が、横有恒氏に話した言葉である。この様に山に於ける、人間の生命について我々は勉強しなけ

ればならない。又如蔵の蔵は自然に対する謙虚な気持、自分の力量をわきまを
あの偉大さ、我々はまだまだ学ばなければいけない。そして最後にもう一つ、
もぬ尾峠の遭難の後、横有恒氏のいつた言葉が「そして私等は破れた。だが此
事だけは誇を以つて云おうとする。それは死する程疲労困難した坂倉くバーティ
のノ人」も自ら死を以つて救済を求めて、下った三田氏も此の40時間に亘る困
難の中に在つて徹頭徹尾協同と友の安危のために終始した。只の一度すら自分の
気儘を洩らした事はなかつた。死に至る迄一つであつたのだ。

山という自然界に入り人間同志の堅い堅い結ひつき、何事に於いても自分ごと
いてまず献身的な犠牲的精神を持つて行動する、この事が高校山岳部員が学ぶべ
き最終最大の課題であらう。

この文を書いている僕自身、自分かつてはやりたい事をし、わかま放蕩の事を
云いまわりの人々に迷惑をかけつぱなしてきた。全くはずかしくてしかたのない。
これからは上の様な精神を身につけるために、勉強しようと思つてゐる次第である。
ここで拙い文を終える。最後に一言、文頭の疑問文の答をいう、僕はやっぱり山
が好きだ。

「冬の沢登り」

高 一 乾 隆 也

宝塚駅から20分で探石場に着く。下に武庫川の青い水がキラキラ輝いて蛇行
している。遠方の山々は冬を表わすように茶色一色空は雲一つない快晴である。
その絵のような光景の中に、山の中腹が拓けたささにかこまれ、小石がちらばつ

た狭い山路が物河谷へ通じる峠のような道である。そこを永島と二人で話をし
つてゆつくりと歩く。半時間経てば物河谷支谷へ着く、それよりはペースを上げ
沢登りにとりかかる。今迄の岩場と違って、下は氷なので緊張する。足場やホー
ルなどを考えてトラバースする余地はなく、必死に岩にへばり着きながらトラバー
スをすませた。そのような難関を幾つも渡りぬける内に大小様々な池を見た。一
つは20米もあろう断崖の正面より水が勢いよく流れ落ち、その水音が谷間に
大きく反響する。断崖の中程に巾一丈あまりのテラスが道となっている。鉄靴が
すべりそうなので横ばいになってそろりそろりと歩く。時には濃い緑色をした小
石が敷きつめた様な浅瀬、すぐ近くにはまなまた芽をふき出しそうな赤や、
茶褐色の肌をした木々の小枝が、ちゃんと植えた様になり浅瀬と調和をとれてい
る。その中をジャブジャブ水をはね飛ばし横切る。

最後の池つゆ大きな岩の上で書食をとる。食事がすむと、目の前にそびえる40
米もの岩場にとりかかる。左は壁層でとてもむつかしそうなので右端をラストで
登る、この後ひくい、10米程の岩場を今度はトップで行く。しかしなつたのふ
米程立しか登れない。調子が悪いのでその場を飛つ。しばらくすると生頼に
出る道に着く、顔一面汗をかき口のあたりが塩がらい。滑い水面に顔をひたしゴ
クリゴクリ勢いよく氷をのむ、ひよつと顔を上げるとすぐ目の前に万年草が等か
にはえていた

1月17日物河谷にて。

中一生の春山記

中一 川村 静 若

三月二十三日

番ごう部屋に集合。高校生は荷物をつめたり中学の荷物をだしたりして4時ごろオート三輪で本山駅へ。本山で切符を買い大阪へ向かう20時25分発の「ちくま」にて松本へ。汽車の中ではほとんど寝られなかった。

三月二十四日

よくやくねむくなつたころ雨のふる松本へ到着。窓からおりて荷物をおろす。ここで山本先生はあい一諾に大糸線の電車で「信濃四ツ谷」へ。大町あたりから雪が見え信濃四ツ谷駅へおりた時は吹雪だった。とても寒かった。バスは細野へ行き吹雪で危いということなので「白樺荘」というところに泊った。

三月二十五日

とてもよい天気だった。高校生は朝早くから飯倉へ荷物のかついで行つた。僕等は山本先生といっしょにロープウェイに乗って八方尾根の「鬼平」というところへスキーに行つた。そこで山本先生に色々と言つた。けれどあまりうまくいかなかった。トニー・ザイラーがとてもうまくすべつていた。先生は更にリフトに乗って上へ行き上からすべつて下りて来ていた。帰りはロープウェイに乗らずに「リーゼンスラロームコース」というところを滑った。ここは上級向きと書いてあるだけあつて何度も何度もひつくりかへつたので殆んどあいた。僕等が帰ったすぐあとに高校生が帰って来た。

三月二十六日

朝六時半に「白樺荘」を出発して全員そろって猿倉え向う。僕等の荷物は個人巻桶とスキーで途中25分に5分か20分に5分位の割合で休んだ。しかし二股をすぎたところからとてもしんどかった。沼池尻というところの近くで食べたキヤラメルがとてもおいしかった。昼につれて雪が深くて一歩一歩歩くごとにボソツとうまってしまいそうなどころもあった。最後に休んだところからちよつと急な坂があったがしばらくして小屋が見えた時は急に元氣になった。小屋に着いたのは十一時ごろだった。高校生はテントを置きに上の方へ登っていった。その夜はみんな小屋で寝た。

三月二十七日

とても寒かったが中学生もテントをはるのを手伝いに上の方へ行つた。台地ではものすごい吹雪がった。僕等は木を切つて30cm位に切つた。これはテントのひもをむすんで雪の中にうめるためだ。あまり寒いので僕等はテントの中に入つてふるえていたか堀田さんが滞つていいと云つたのでストックをついて帰つた。お書からは小屋の近くでスキーをした。

三月二十八日

朝堀田さんと安井さんが来て僕等はスキーにシールをつけていっしょに台地まで行つた。そこへ大学の山岳部の人たちもスキーでおりてきた。そして小屋までおりていった。そこでみんなで雪をのこざりで切つて雪のブロックをテントのまわりにつんだ。とても頑丈そうに見えた。帰りはスキーで帰つた。ちょうど小屋の前についた時木下先生が一人で登つて来られた。お昼からスキーをした。

三月二十九日

木下先生が大学のテント運行こうと云つたので高校のテントに行つてみたら無理だろうと云うことなので木下先生はアタックのためにテントへ泊り僕等は又すべて帰つた。大学の人がおりて来てにぎやかになった。

三月三十日

天気が悪くてアタックが出来なかったので夕方にみんなテントをたたんでおりてきた。大学の残りの3人の人もおりて来た。

三月三十一日

雨の中をみんなそろって小屋を出発してスキーで磐梯湖の前まですべってあと細野まで歩いた。道は雪どけ氷でどうどうなつた。

こんどの山は僕にとつて初の山行さなつただけに楽しかった。

中一 佐藤 昌弘

小屋についてから三日目の日朝六時に起きた。

いつものように朝食はんを作ってた。堀田さんと安井さんがテントからおりてきてブロックを切るのを手伝ってくれと云ったがぼくは川村君はさのうの寒さにこりて行かないでおこうと二階の部屋にどづこもつたかとうとうつれていかれた。

さのうは雪が降っていたのでテントに行くまでの景色が全々ちがったようだった。

テントにつくとき雪がやわらかいので雪をみんなでふんで開けた。

ノコギリで雪を切り、スコップで雪を取った。

スキーを裏むけに置きその上に雪をすべらした。

中一は雪をすべらして運ぶ役目である。

ぼくらが置いて雪は堀田さんかきれいにつみ重ねた。

それがすむとみんなで昼ごはんを作った。

昼ごはんはと云つてもパンである。

ぼくはパンかのだにつかえてなかなか通らなかった。

ツアーに行こうか、行かないでおこうかといつたが、けっきょく行かない事になってぼくらと山本先生は小屋に帰った。

スキーをもってきたのだからすべっておいた。

山本先生は上手にすべっておりられたが、ぼくらはうまくすべれない。

斜めこうでおりたが、止ろうと思えばこけて止まった。

小屋の近くまで降りてくると、むこうの方から木下先生が登ってらっしゃった。ぼくらが小屋の近くですべっているとき木下先生も出てこられていつしよにすべった。

小屋の近くのちょっと高くなった所へみんな登った。

登って見るとうさぎの足あとが目についたその前にくまの大きな足あともあった。

ぼくはちょっとこわくなった。

多分、うさぎを追いかけたのであろうかとにかくこわかった。

小屋に帰って山本先生に話すと先生は笑いなされた。

この小屋にはうさかほんとかしらないか首つりを便所でしたという話を聞いていたのでこわいことが二つになったわけだ。

夜ねる時、その便所へ行くのがこわいのだろうかのつきあたりのドラムカンをおいてねた。

この日はすぐねられた。

朝食事当番でない人は七時までねていられる。

朝はいつもみそ汁だったがこの日はワカメだったので食やる気がしない。

この日木下先生が大学のテントまで行こうとおっしゃったので行った。

高校のテントまで行く途中はきのうみたクマの足あとより大きいクマの足あとがあった。

ぼくはとにかくクマが来たら死んだふりをしようと思つてセクビクしていた。

遅く高校のテントまで行けた。

先生がこれから大学のテントまで行くとおっしゃったが高校の人は天候が悪いので無理だと言った。

そこで大学のテントまで行くのをやめて小屋に帰った。

中　一　三　沢　寛　也

ぼくたちは三月二十三日の夜から、春山合宿に出かけた。

ぼくは、合宿に行くのが、初めてなので一寸心配だった。

一時埤大学の部屋に集り荷をつめなをしてから八百屋さんの三輪トラックに乗って本山南口まで行きそこから大阪駅へいった。

大阪駅では、二時間頃まって汽車に乗り松本駅まで行つたが、夜の向は一時間程しか寝なかったがそうねむくもなかった。

松本駅で、山本先生といつしよになつて信濃四ツ谷までいつなが、行く途中は吹雪がしたが、四ツ谷の方も「吹雪だろうか」と話ましていたがその通りだった。

そこでバスが来るのを待つ間にヤツグを着た。

バスで細野まで行き今日は横倉へ行くのはむりだということで丸山徳栄さんの所にとまることになった。

この日は雪からすこし晴れたので佐藤、川村、ぼくとでスキーをしたがあまりすべらなくおもしろくなかった。

この日は夜も早く寝た。

三月二十五日ぼくと佐藤君、川村君とは食当たつたので6時におきこはんを依

つた。この日は高校生は狭倉に荷物の半分ほどを持っていった。

ぼく等と山本先生とで八方尾屋の鬼平にスキーに行つた。

ゴンドラに乗り二十分ほど行くと鬼平に着くとすぐスキーをはいて練習したか
ぼくは冬妙高に行つていたので少しできるが川村君と佐藤君は神鍋に行つただけ
だったか佐藤君は少し上手だった。

山本先生はどこからリフトで上に登って滑ってこられたかとても上手だった。

書きすぎにザイラーも滑っていた。

それから帰りは滑って帰つたかものすくなくおい道を滑ってかえつたか一ヶ
所だけスキーをぬいた高校生もぼくたちが帰つてからすぐかえつてきた。

この日はスキーはおもうぜんぶんやった。

夜は三人でトランプなどをして遊んだ。

三月二十六日は高中いっしょに狭倉小屋へいったこの日は昼からも休んで遊ん
でいた。

三月二十七日七時頃からテント張りをしたが寒くてたまらないので昼ごろ三人
で帰ってきた。

書からは小屋の前で入ロープを休めてスキーをした。

三月二十八日朝からブロックを積に行つたその日は大学もテント場から下りて
きた。

大学生がきていることをしつた。

それからすぐ小屋に帰つて行つたら「おーい、甲角か。」という声かしたので
ぼくが「はい」といってあつと気がついて君がえると木下先生がいらっしゃ
ることを、思いだした。

「木下先生ですか」とさくと

「あーそうや」とおっしゃいましたのでスキーでむかえに行つた。

それから二時同級先生といっしょにスキーをして遊んだ、そこにとてつ大さな

足あとかのこつていたので「これ何の足あとですか」と聞くと「これはくまのた」ということを聞きました。

その夜は四人で楽しく遊びました。

この間の日々は毎日大学の人とスキーをして遊びました。

三月三十一日の朝から細野へもかった。

四月一日の日には家についた。

先輩近況

近 藤 実

甲南山岳会の諸兄とも全く御無沙汰している。時々上京時に西村、足立両氏に会う事があるだけ。西村さんは学校でも先輩だが、今は同じ会社の上役ということになる。頭もきれいに円くなったか人格円満な紳士で昔の「格さん」の面影はない。小生此の冬はスキーに行つて若い連中と一緒に滑り体力の衰えを身に受けて感じたが、昔断は多少血圧の高い事を除けば先ず健康に過している。

伊 藤 収 二

二十年ぶりに神戸に転勤してきてから一年以上になりますが生来の出不精で関西の岳友諸氏には御無沙汰し申し訳ありません。一度子供と六甲をハイキングしたら、学生時代近かったと記憶している所が、大変遠く感ぜられて今更足のオトロ工を思い知らされて、日曜毎に阪急電車からどっと出て来る若いハイカー達の変を見たり、たまに行く芦屋のゴルフ場で昔の甲南時代をなつかしく思い出してい

るだけで、独身生活をもてあましている身でありながら六甲歩きをする元気もあります。

武 田 六 郎

今年長男が甲南中学に入学し、私自身は40代という最も嫌な年頃になりました。さて自らを振り返って見ると春夏秋冬両の日も風の日も午前7時に阪急御影駅の大阪行プラットフォームで電車を待つ一見勤直なサラリーマンとなった自分を発見した次第です。

宇 尾 洋 介

卒業後は旧神商大在学中に時々ロックガーデンに同行した程度ですっかり御無沙汰して居りますが、元気で居ります。

現在東京甲南会の世話役をやらされ居りますが、山岳会の東京在住諸兄からもう一度東京で甲南山岳会の集りを世話しろと云われ乍ら、公私共多忙で今迄果たせません。とにかく山男は不揃者が多く、小生としてその類を外れない訳で、世話役なぞやれた義理でもないのですか、お手伝い位はやりますから、東京在住の山岳諸氏をフレと思う方、イニシアティブをとってほしいと思います。尚、東京甲南会としては毎月オノ永曜日に味の素ビル七階で月例会を（正午一時半）やつて居ます。関西より御上京の際は、月初めであれば出席される事を歓迎致します。但し次は6月/日（水）に新卒業生の歓迎会を兼ねて総会を野村ビルで開く予定ですので五月は休会です。取急ぎ近況お知らせ位。

佐 野 源 一

御無沙汰しています。小生共の機細々乍ら先づ先づどうやら無事過しています。今年は20年振りにスキーに行つて来ました。何しろ余り休養などとれる身分で

はありませんので、正月に神鍋、二月中旬に野沢と、ほんのちよつかりではありましたが、そして用具からスキー場、スキーテクニックの大変化に一驚した次第です。でもリフトのお蔭で体力の弱った小生にでも何とかスキーが出来るのですから大助りです。新聞によれば大分色々なパーティーかヒマラヤに出掛けて行った奴ですが、その内甲府会からもパーティーを送る奴はならないものですね。

徳 末 省 三

日本エヤープレーキKK設計課勤務、毎日図面に囲まれて過しております。去る三月志賀丸池にスキーに行き久し振りに春スキーを満喫しました。山に入る元気はありませんがスキー合宿でもされる場合には参加させて頂き度く存じます。奥田さん、中村さんに音頭を取って頂きRBのコンパを開催して頂き度く希望します。

米 山 悦 郎

拜啓、皆様お元気の事と思います。小生仕事に追われて最近山には全々行っておりませんが冬にはスキーに通算して二週間程日曜日毎に行きました。おかげでスキーは一級になれましたが暇が仲々ないので困ります。国会で初の休日法案が通るのを期待を持って待つています。ではお元気で、

前 田 産

拜啓、御無沙汰しております。実は小生昨年6月体をこわし、静養しておりましたか、この4月7日より名古屋の東海旅客鉄道株式会社に勤務しております。以上の様なわけで山の方もとんど御無沙汰ですが、何んとかヒマを見つけてスキーぐらいは行きたいと思っております。日曜には度々帰りたと思いますので良うしくお願いします。

敬 具

時報編集に当たられている方々、その労苦に感謝します。若い日でありながら、何一つ御手伝い出来ず申し訳ありません。又原稿も、何か良い山行でもしていれば書くのですが、それもなく今回は近況だけで御勘弁願います。

現実には、山へ行くことが出来ずとも、山へ行けるだけの体力を残して置きたいと、会社の乗入のラクビーに入って走つてみたり、そのシーズンが終れば、会社の建中と六甲をおいたりしていますか、どうも会社と言う所は都合よく自分の思う時に休みが取れなくて、五月や秋の山を来だ楽しむことが出来ず、毎回計画倒れを歎いています。卒業后かかさず行つて行っているのは、正月のスキー位で一回目は、抑沢、柏の両君と、小日向合宿を覗きに行きに行き、C I 建設の御手伝いをほんのチヨツヒリしオ二回目は抑沢君と八方根に出かけ、久し振りに後立山の純白の山々を眺めることかでき。そして今年は阿部、田辺、米山君達と現役の人達とをまじえ家安の甲南ルームで楽しい数日を過ごすことが出来ました。

その他のシーズンでは、去年の夏、会社の若い人達（僕よりと言う意味）にせかまれ、蒲田—石段—槍平—槍—穂高—上高地のコースを歩きましたが、蒲田の谷は人も少なく、自然もそれほど荒らされていず、とても良い所です。特に竜谷の眺は素晴らしく圧倒されました。もう登つてやろうと言うフアイトは、沸きませんでしたか、あかす眺めてきました。

もう現役時代のような登山は憧れるだけで出来そうもありませんか、自分の体力、環境に合った山登りは焼けて行くつもりでいますから、又何かの時は声をかけて見て下さる叔母様に頼いしておきます。

平井吉夫

永い間、無沙汰しました。

あゝ山に行きたい、山に行きたいと願いつつも、世の中をさわがす事に忙しく、想えば、四年間というものの山らしい山に一度も登っていないのです。

こんな馬鹿げた話はありません。

でも、古い山行記や時報をひもとく盛に考えます。岳友の皆さん、怒らずに諷んで下さい。世の中をさわがす人たちが山に登ったら、山に登る人達が世の中をさわがしたら、どんなにか素晴らしいだろうと思ふんです。表甲車のバリケードに真正面からぶつかる事の出来る人達をなれば甲南ルートなんか炸れないんじゃないでしょうか。

四年間山に行かなかったこれかくしに他愛もないことを書いてしまいました。

山登りは僕の生涯の快楽であり責務です

僕もその末席をけがしている光輝ある甲南山岳会の発展を心からお祈りします。



大 学 3 4 年 度

高校顧問の活動状況報告（34年度）

甲南山岳会総会記録

甲南山岳会会計報告

甲南山岳会名簿

山岳部現役名簿

五月の南股新人合宿

(参加)

福田 泰次 (O.B)
 広瀬 健三 (E.3) C.L.
 伊藤 久三郎 (E.3) S.L.
 伊丹 弘忠 (E4)
 美田 靖男 (E4)
 柏木 宏文 (E2) 食糧係
 大関 和夫 (E2) 記録係
 倉藤 孝次 (E2) 食糧係
 大津 肇宏 (E2) 装備係
 岡田 英暉 (L1)
 飯田 進 (E1)
 森本 全彦 (L1)
 鶴木 洋 (L1)
 二谷 和成 (E1)

以上 計 14 名

(日誌)

4月28日、大阪発(北陸経由)

4月29日 (晴)

信濃四ッ谷より小型トラックにて二股まで乗入れる。トラック道を進み、南股発電所までノビッチ。発電所の下河原で昼食をとる。こゝより見る不帰東面はすばらしい。これより川を溯行したが渡渉とガレ場で苦勞する広瀬、伊藤、伊丹、美田は

南滝寒越まで偵察に出る。

二股(11.45) - 南股発電所(12.20) - 南股B.C(15.30)

偵察 B.C(15.30) - 南滝寒越(16.30~16.50) - B.C(17.25)

4月30日(快晴)

①、不帰第一峯尾根アタック

福田、広瀬、伊藤、柏木、大関、大津、倉藤、(紀行文の頃に記す)

②、八方押出より八方尾根へ、

四年生と一年生、八方押出上部で新人の雪上技術の訓練を行なう。

5月1日(雨)

沈黙、午前一時起床するが雨、

5月2日(晴強風)

全員で八方尾根より不帰の峻の徒走を行う。午前2時起床、朝食を取るが気温は19℃と云う異状高温の急、一応日がよるまで出発をみあわす。

6時出発、ダムの渡渉は毎度の事ながら冷たい。美田氏スリッパしてずぶぬれとなる。八方押出しを一年生は、アイゼンをつけて登る。八方尾根に出ると不帰を全望出来る。

八方尾根に山学同窓会のテントがある。不帰沢で遺体捜索をやっているらしい。

第三ケルンの上で福田さんは下山される。唐松小屋の横で昼食、小屋は雪が入っていて快適でない。外の方が良い。唐松岳へ偵察に行っていた美田、広瀬は唐松沢へ下降してダイレクトリッジを見ようとするが不可能なので又同行する。不帰の嶺二峰の下りが悪く時間を喰う。一峰へ登り、又引返へして、一二峰間のルンゼを走り下る。

(大関記)

B、C (6.00) — 八方尾根
(8.10) — 第三ケルン (9.00) —
牛首ピーク (9.55) — 唐松小屋
(11.45) — 唐松岳 (12.25) — 第二峰 S.P (13.00) — 1.2 峰間鞍部
(15.15) — 第一峰 (15.25) —
1.2 峰間鞍部 (15.45) 南股平 B、C (17.10)

5月3日 (快晴)

① 唐松岳ダイレクトリッジ
広瀬、美田、

(記行文参照の事)

② 不帰沢より天狗の大下りまで、
上記二名の他全員、

広瀬と美田を送り出した後、4時出発。今朝の飯はメチャクチャで皆あまり食わずに出発。南滝乗越からは快適なピッチで進む。唐松沢との出合で沢の上部にダイレクトパーティーらしき姿を見て声をかけるが返答なし。不帰沢は雪の状況悪く一峰側で小さい雪崩が

落ちる。第一峰東北壁は圧倒的である。天狗のゴルへ急な雪壁をよじ登る。回境稜線は夏道の完全に出ていて夏の徒走と変わらない。標本が腹満をうったへ、皆も相当バテが来た様だ、リーダーは鳥囀子のゴルから引き返すことに決めた。はるの彼方に白馬鍾ヶ岳が望まれたがやれやれと云うのが本音であった。パインの缶詰、チョコレートとすこぶる豪華なものを食べ引返す。不帰沢は雪崩がないが、第一峰、天狗岩稜よりの雪崩が問題だ。

雪壁を下り、あとは尻セード。快適なピッチで南滝乗越へ。南滝のルンゼは悪くなって来た。テントへ早く帰れたのでぬれたズボンやシラフを乾す。

B、C (4.00) — 南滝乗越
(4.50) — 唐松沢出合 (6.30)
— 天狗のゴル (7.30 ~ 8.20) —
鳥囀子ゴル (9.40 ~ 10.20) — 天
狗のゴル (11.00) — B、C (12.45)

5月4日 (晴)

概収。朝食にのびきったラーメンを食べ、テントをたぐむ。食糧はほとんど残りがなく荷は軽い。南股平のベースを発って夏道に行く。取入口小屋より300m位で南股の池があり、少し登る、そこから道は山腹をまいて走っている。所々丸木橋があり快適な道だ。発電所だ。発電所で一休みする。新緑の若葉が美しい。

そして雪を残した不帰第三峰、八方尾根。二股までは車道を歌をうたって飛ばす。二股で写真を撮る。細野はもう春だ。徳栄さん宅で解散。

南股(8.30) - 南股発電所(9.15) - 二股(9.40) - 細野(10.20) (大関記)

〔夏山剣岳二股合宿〕

(参加)

広瀬 健三 (E.3) C.L
越田 和男 (S.3) L、
牧野 宏 (F.3) L
伊藤 久三郎 (E.3) L
伊丹 弘忠 (E.4)
大津 肇宏 (E.2) 装備
大関 和夫 (E.2) 記録
倉藤 秀次 (E.2) 食糧
森本 全彦 (L.1) 食糧
鶴木 洋 (L.1) 食糧
小松 史朗 (S.1) 装備
飯田 進 (E.1) 装備
中田 晃一 (S.1) 装備

日記

7月16日

宮本、前田、田辺先輩や残留部員、高校部員の尾送りを受け、大阪出発。

7月17日

久方振りでは立山ドライブは脂れていた。箱名の池を初めて見る。富山県富山荘に一部の荷物を残し出発。相変わらずの美松坂のボッカである。

例の水場を登食天狗平あたりで晴上り気持良し。雷鳥沢では数人のスキーヤーが残雪の上にシュプールを美しく垂れていた。ミダガ原(9.10 ~ 9.45) 水場(10.20 ~ 11.45) 地獄谷(13.50) 雷鳥沢(14.20)

7月18日 曇のち雨

伊丹・広瀬の他はミダガ原へボッカに下る。越田入山。快適なペースで引返すが、テントに着く頃雨となる。雷鳥荘に徒走用食糧をあずける。雷鳥沢(8.10) ミダガ原(9.50) 雷鳥沢(12.30)

7月19日 雨後晴

午前6時の天気予報は大雨注意報を告げている。沈黙と決まる。午後天気は完全に晴れ上がり、全員グリセード、ストップの練習をする。

7月20日 晴

雷鳥沢より二股へ。別山來越の急坂では、一年生はバチ出す。関学の縦走へ入る日で、途中で会う。奥砂子沢の滝の所は大きなクレバスがあいまって、高まきする。今年は雪が少ない様だ。二股では渡渉する。

雷鳥沢(7.05) 別山來越(9.10)
鍋沢(10.35) 奥砂子沢(12.15)
二股(14.10)

7月21日 快晴

三冠雪溪の入ッ峰56間ルンゼ下で雪上訓練。午後、広瀬、越田は56峰間ルンゼより八峰に至るルート偵察に出る。他は三ノ怒まで登る。BC(7.30) 雪上訓練(8.30~10.20)
三冠ゴル(12.10~12.30)
BC(13.30)

7月22日 雨時々曇
沢 激

7月23日 曇時々小雨
広瀬池7名 池の平へ。

牧野、大関、鍋沢よりハシゴ谷へ偵察、
BC(10.05) 鍋沢渡渉(10.30)
ハシゴ谷(11.40) ハシゴ谷二股(12.30) ハシゴ 來越(13.25)
(14.15) BC着。

鍋沢の渡渉はザイル必要。雨の中を來越まで行ってみる。

7月24日 雨
沢 激

7月25日 快晴

○大庭 小庭縦走(越田 牧野 大関)
(証行参照の事)
○ハッ峰上半より鍋本峰(伊藤、大津、中田、飯田)
BC(7.00) 長次郎出合(8.25)
鍋頂上(13.05~14.45)長次郎出合(15.15) BC(16.25)
○源次郎尾根より鍋本峰(広瀬、倉藤、森本、鶴木)

7月26日 晴

○チンネ(左方ルンゼg4ムニーCクラックBクラック)大関、越田 BC(7.00)チンネ(9.20) 取付(11.30) 中央バンド(13.00)チンネ頂上(14.00~15.10) 三冠(15.20) BC(15.50) チンネに取付くまで2時間位待たされる。左方にゼイトラバースする所の他、中央バンドまででは門戸とゲートはない。g4ムニーからCクラックへ移る時、半分位しか入っていないピトンをもたよりにトラバースするが、足下がスパーと100m位切れていて気持ち悪し。時々上から落石かうなりをたてて落ちくる。後は快道にチンネ頂上へ、学習院の人達と一語に、BCへ下る。
○チンネ(中央g4ムニーaバンドCクラック) 大津、広瀬、

BC (7.00) チンネ取付 (9.30
 ~ 12.30) 中央バンド (1.35
 ~ 4.00) チンネ頂上 (5.00
 ~ 5.15) BC (6.00)

中央チムニーはスケールを感じな
 り。Bバンドは下がスツキリしてち
 ゃっとこわい。Cクラックは浮石が
 多くて、やばい所だった。

○ 六峰Cフェース廻り会ルート (倉藤、伊藤) BC (7.00) C
 フェース取付 (9.15) Cフェース
 頂上 (11.45) セ峰ピーク (1.40)
 真砂子沢 (2.30) BC (3.00)

○ 八峰下半 (伊丹、牧野、鶴木、
 森本、中田、小松、飯田)
 BC (7.00) 真砂子沢 (8.05)
 56のゴル (14.20) 真砂子沢 (15.00) BC (16.40)

八峰下半は人が多く、アップサイ
 レンの所で大分待たされる。

7 月 27 日 晴

○ 伊藤パーティ脱走へ出発
 ○ 小窓三窓ジャングルムAルート (越田、
 大澤、大岡)

BC (7.00) 小窓 (8.40) 小窓王
 コル (11.00) ~ 12.00) ジャングル
 ム取付 (12.10) PII (13.30 ~ 14.
 20) 三窓 (15.30 ~ 16.00) BC
 (16.30).

○ ハッ峰上半、クレオパトラニードル
 (広瀬、森本、鶴木)
 BC (6.45) 三窓 (8.30)
 56のゴル (9.30) ニードル (12.00)
 ニードル登攀 (12.00 ~ 12.30)
 三窓 (13.00 ~ 15.00) BC (15.
 30)

本日で合宿は終了、明日より脱走に出
 発。

二股合宿行動表

	キ ー パ ー	池の平	八峰 上半	ハッ峰 下半	源次郎 尾根	大窓 小窓	小窓 三窓	ジャング ルム、 ニードル	チンネ	六峰 Cフェース
7 月 23 日	テ シ	伊丹 広瀬 他 4名 ※ 牧野								

		大関 (ハシゴ谷 使 案)							
7 月 25 日	伊 丹 小 松		伊 藤 大 津 中 飯		広 瀬 倉 森 鶴 木	越 田 収 野 大 関			
7 月 26 日	ナ シ			伊 丹 収 野 飯 田 小 松 鶴 木 森 本 中 田				越 田 大 関 (左カルセ Cクラス) 広 瀬 大 津 (中カキム ニイ Bクラス)	伊 藤 倉 森 (鈴 稜) (合ルト)
7 月 27 日	伊 丹 収 野 中 田		広 瀬 森 本 鶴 木			越 田 大 津 大 関	越 田 大 津 大 関 (ジャングル) 広 瀬 森 本 鶴 木 (ニードル)		

夏山縦走行動表

班	銀 穂高 徒走	内蔵助平、薬 師	玄 の 平
参 加	伊藤、倉藤 小松、飯田	牧野 大関、森本	広瀬 越田、大津、堀水
7月27日	二 股 別山来越 雷 鳥 沢		
7 28	雷 鳥 沢 ガラ峠 五色原	二 股 ハンゴ谷 本谷出合	二 股 別山来越 雷 鳥 沢
7 29	五色原 スゴ来越 間 山	本谷出合 内蔵助平 内蔵助谷	雷 鳥 沢 スゴ来越 五色原
7 30	間 山 薬 師 岳 太郎山	内蔵助谷 真砂岳カール 一の越	五 色 原 スゴ来越 間 山
7 31	太郎山 黒部五郎岳 五郎カール	一の越 雷鳥沢(往復) 立山東面横断	間 山 薬 師 岳 薬師沢出合
8月1日	五郎カール 三俣連華岳 硫黄沢来越	一の越より 竜王東尾根登攀	(沼 瀬)
ス	硫黄沢来越 木倉ヶ岳 北穂小屋	一の越 ガラ峠 越中沢来越	薬師沢出合 免 平 出 水 平

8月3日	北 穂 小 屋 酒 沢 上 高 地	越中沢乗越 スゴ乗越 間 山	出 永 平 祖 父 沢(往復) 雲 の 平
4		間 山 薬 師 岳 太郎矢仁平	出 永 平 五郎沢右股 五郎カール
5		太郎矢仁平 折 立 峠 有 峰	五郎カール 三侯蓮華岳 三侯小屋
6			三侯小屋 伊藤新道 湯の侯

(軽走各パーティの記録は「紀行」を参照して下さい。)

by Ohzeki.

秋 山 行 動 表

対 称	白 馬 三 山	前 穂 東 壁	木曾駒 宝 殿	大 山
参 照	玄瀬、藤安、伊藤	越田、田中、小松、	大関、森本、飯田	牧野 二 谷
10	10	四 谷 二 股 南 股		
	11	南 股ヨリ 六佐仁門滝		
	12	南 股 六佐仁門滝 杓 子 沢		
	13	杓子沢より 杓子東壁		

10	14	杓子沢にて (汎 瀬)	上 高 地 傍 沢 松高ルンゼ	上 松 金懸小屋	大 山 口 大 山 寺 六合目小屋
	15	杓 子 沢 小日向コル 傍 倉	松高ルンゼ 中 島 新 道 奥 又 白 池	金 懸 小 屋 牛 登 敷 クール 宝 剣 小 屋	六 合 目 小 屋 頂 上 地 獄 谷
		猿 倉 より 大 雪 溪 細 野 へ	A 沢より前穂高 柱 優	宝 剣 東 壁 中 岳 東 面 岩 登 り 上 松 へ 下 山	地 獄 谷 急 か 山 大 休 口
	17		前 穂 東 壁 A B フェイス		大 休 口 野 井 倉 浦 守
	18		奥 又 白 池 上 高 地		

(記録は「紀行」の本文を参照されたい。)

by Ohzeki

白馬三山偵察行

広 瀬 健 三 (E3) リーダー
藤 安 賢 一 (E3)
伊 藤 久三郎 (E3)

10月9日

大 阪 発

10月10日 曇

台風15号で二股の辺りもかなり荒ら
されている。南股平までは、例によって
沢をつめる。四谷(1.35)二股(2.
15) 南股平(5.55)

10月11日 晴

台風を沢の地形が変っているの
で、六旋門滝迄の沢は、ものすごく
えぐられている。滝まで約1時間。
滝は思ったよりスケールがある。
向って左の急な斜面をつめる。
所々岩場があり、ここを荷上げ
するのは、無理の様なので明日
は右をつめることにする。

10月12日 晴のち曇

昨日見て来た滝の右斜面をつめる。
安外簡単に滝の上へ出る。滝から
5分程、杓子沢をつめてテントを張
る。

10月13日 曇

天気は良くなくガスがかかっ
ているが、とにかく杓子東壁
附近まで行くことにする。
白馬鍾岳北稜、杓子東壁
の下まで行き、ガスの晴れる
のを待って偵察する。東壁は
浮石が多く、無雪期の登攀は
危険の様だ。明日北稜の下
半部のトレースをすることに
する。

テント(8,10) 一北稜下(9,50)
一東壁下(12,00) テント(14,30)

10月14日 雪

北稜の下半部をトレースする
ことにしていたが、昨夜からの
雨が雪と変わっているので、
断念する。一日中雪が降る。

10月15日 晴のち曇

北稜へ行こうとするが、雪崩
と土砂崩れの危険が大なので、
あきらめ、テントを猿倉へ移
すべく、小日向のゴルを越えて
猿倉へ入る。

小日向のゴルまではラッセルが
あって、かなりのアルバイであ
る。ゴルからは夏道を猿倉ま
で下る。

テント(杓子沢下部)(8,45) 小日向
ゴル(10,45) 猿倉(13,30)

10月16日 曇

白馬主稜、三合尾根及び杓子
尾根の偵察に出る。白馬尾を
30分位登った所で一面のガス
につつまれ、ガスの晴れるのを
待つ。主稜と三合尾根を偵察、
更に東尾根の末端に登って見る。
一応予定通りの偵察が出来た
ので下山することにする。

猿倉(7,10) 馬尻(8,00)

大雪溪(8,30) 杓子尾根(9,00)

猿倉(10,15) 猿倉迄(11,30)

二股(13,20) 細野(14,00)

(広瀬記)

冬山乗鞍岳位原スキー合宿

参加 伊 丹 弘 忠 (E4)
 芦 田 匡 平 (S4)
 稲 井 修 (S4)
 C.L 広 瀬 健 三 (E3)
 伊 藤 久三郎 (E3)
 藤 安 賢 一 (E3)
 牧 野 宏 (E3)
 越 田 和 男 (E3)
 田 中 収 (E3)
 倉 康 秀 次 (E2)
 大 関 和 夫 (E2)
 二 谷 和 成 (E1)
 森 本 全 彦 (L1)
 飯 田 進 (E1)
 小 松 史 明 (S1)

他に高校部員11名も参加。O.B.
 本全氏を加え、27名の多数で位
 原山荘甲南ルームを使用して、新
 人訓練を主目的に合宿を行った。

日 誌

12 月 21 日 曇時々雪
 鈴瀬小屋(8,20)位山荘(15,
 20)

12 月 22 日 曇時々晴
 合宿第一日目。スキー練習、屋根
 板の上で直滑降、斜滑降の練習、

飯田ねん座。

12 月 23 日 快晴

鷺見ハツアーに行く。富士尾のコルの
 下で全制動を練習。午後 牧野リーダー
 他一年の小松、森本 二谷が鷺池ヘテン
 トを上げる。伊藤、大関はサポートして
 鷺ヶ池までスキーで登る。なお他の者は
 ワカンのみで行く。

この日、高校山岳部員が入って来る。

12 月 24 日 吹雪

大学一年生はテントへ入ったので、大
 学部員は高校生とスキー練習

12 月 25 日 快晴

晴れたので、岩壁登攀訓練、及びアイゼ
 ンテクニクの訓練を行うため、頂上手
 前のピークヘダイレクトに突上げるパッ
 トレスへ登る。

高校生は肩の小屋まで登る。この岩は割
 合おもしろく、良い練習となる。風が強
 く凍傷にかかる者が出た。鷺ヶ池より東
 鞍本峰へ登ってくるはずの一年生が来な
 いので、大関、伊藤は鷺ヶ池へ登り、テ
 ントを撤収する。

広瀬、藤安、伊藤、大関

B、H(6,30)パットレス取付き(スキ

BH(6.30)バットレス取付き(スキーデポ)(7.50)ジャンクションピーク(9.30)スキーデポ(10.10) BH(10.40)

なお、この日、伊丹等入山する。

12月26日 曇

高校生と共に、スキー練習、

12月27日 曇

高の小屋までツアーに出る。

12月28日 曇

スキー練習 越田他入山。

12月29日 曇のち吹雪

頂上へ大学、高校共に向うが吹雪となり肩より引返す。夜、27名が甲南ルームに集まり、合宿最後の夜を、大いに歌い、語りあかす。高校一年から大学四年生までの甲南学園山岳部部歌は吹雪の小屋をゆがした。

12月30日 快晴

合宿終了、一部の若者は入山して来る。OBとスキーをする為残る。なお、午前中、越田、芦田は、安井、小山、乾の高校生と東鞍頂上を往復する。下山する途中、田辺、砂川先輩と会う。

(大関記)

~~~~~

この後、現役残留組は、OB諸氏と1月3日まで位ヶ原生活する。

参加者次の通り。

(OB) 岡部公、砂川、本全、

米山夫妻、田辺

(現役) 藤安、伊藤、越田、

福井、芦田、広瀬

(高校) 安井、

## 山岳セミナー

1959年度

トレーニング期間中の毎週月曜日は全部員が部室に集まり山岳セミナーを行っています。講師はリーダー会を中心に受持ち各種の登山の研究あるいは講習を行っています。

此處に本年度行われた研究課題を記して置きます。

| 月日           | 研究課題       | 担当者 | 解 説                                       |
|--------------|------------|-----|-------------------------------------------|
| 4.29<br>5.11 | 不帰東面の<br>② | 広 瀬 | 後立山不帰東面の概念及び不帰一尾根等の旧甲南高校山岳部の足跡についての説明5月の新 |

|        |               |     |                                            |
|--------|---------------|-----|--------------------------------------------|
|        |               |     | 人合宿の鳥、                                     |
| 5. 18  | 岩登りの基礎        | 広 瀬 | 岩登りと山登り。岩登りの意義                             |
| 5. 25  | 飯、穂高          | 伊 藤 | 北アルプスの山々、                                  |
| 6. 1   | 雲の平について       | 越 田 | 黒部川源流の谷と雲の平について                            |
|        | 内蔵助平山         | 牧 野 | 立山東面の岩場と谷の研究                               |
| 6. 8   | 飯 岳           | 越 田 | 飯岳合宿の鳥の解説                                  |
| 6. 15  | 登山に對する<br>考え方 | 広 瀬 | トレーニング中の事故についての反省会                         |
| 6. 22  | 夏山の気象         | 牧 野 | 夏の北アルプスの気象解説、本日より一週間ラジオ<br>より天気図を書く練習を行う。  |
| 6. 29  | 装 備           | 大 津 | 夏山装備解説                                     |
| 7. 6   | 夏山合宿に<br>ついて  | 広 瀬 | 夏山合宿の計画、                                   |
| 10. 26 | 白馬東面          | 広 瀬 | 10月の偵察山行より白馬三山東面の概念、                       |
| 11. 9  | 積雪期の食<br>糧    | 伊 藤 | 過去の本校の合宿食糧のデーターから見て、                       |
| 11. 30 | 凍傷、雪<br>盲     | 越 田 | 在入129、139号を参考に積雪期登山の医学                     |
| 12. 7  | 冬山の気象と<br>雪崩  | 牧 野 | 雪崩と天気図の関係、冬春の北アの気象、                        |
| 3. 1   | 杓子東壁<br>研究    | 大 関 | 甲南高、国字大、名大、千大、明大、白根会、登攀<br>会の記録より杓子東壁の登攀史、 |
|        |               | 広 瀬 | A、B、C、D各尾根の概念。                             |
| 3. 1   | 杓子東面<br>の雪崩   | 牧 野 | 明大、千大の二重遺難 嶺山岳会等のアクション<br>等、実例のデーターより      |

by Ohzeki.

# 六甲近辺山行記録

1959年度

| 月 日         | 場 所                 | 参 加 (備 考)                                                                  |
|-------------|---------------------|----------------------------------------------------------------------------|
| 4. 7        | ロックガーデン             | 柏木、倉藤、大関                                                                   |
| 4. 14<br>15 | ロックガーデン             | 越田、大関、倉藤 (伊藤、大津 ⇒ 15日のみ)<br>キャッスル下ダムサイドにキャンプ                               |
| 4. 21       | ロックガーデン             | 伊丹、美田、鳥居、広瀬、越田、伊藤、藤安、<br>大関、大津、倉藤、柏木、二谷、森本                                 |
| 4. 25       | 岡本バットレス             | 伊丹、美田、鳥居、広瀬、越田、伊藤、藤安、<br>大関、大津、倉藤、柏木、二谷、森本、飯田、<br>岡田、小松、                   |
| 5. 16       | ロックガーデン             | 美田、広瀬、伊藤、藤安、大津、柏木、大関、<br>倉藤、小松、飯田、森本、二谷、岡田、中田、                             |
| 5. 23       | ④ 道場石火岩             | 伊藤、藤安、柏木、大関、吉田、二谷、小松、                                                      |
| 24          | ⑤ 逢来峽               | 広瀬、越田、大津、倉藤、森本、飯田、鶴木                                                       |
| 6. 6<br>7   | ロックガーデン             | 伊丹、広瀬、越田、藤安、伊藤、大関、大津、<br>柏木、倉藤、森本、二谷、小松、鶴木、飯田、<br>岡田、                      |
| 6. 13       | ロックガーデン             | 伊丹、広瀬、越田、藤安、伊藤、大関、大津、<br>柏木、倉藤、森本、二谷、鶴木、岡田、飯田、<br>ブラックにて柏木浮石をつかみツイ落、ビテイ骨骨折 |
| 6. 20<br>21 | ④ 奥池 → 宝塚           | 広瀬、越田、伊丹、大関、飯田、小松、田中、<br>吾楽園より登り奥池にてキャンプ                                   |
|             | ⑤ 住吉川 → 宝塚<br>東六甲徒走 | 伊藤、牧野、倉藤、二谷、岡田、鶴木、中田<br>本庄橋にてキャンプ                                          |
| 6. 29       | 岡本バットレス             | 大関、飯田、森本、広瀬、                                                               |
| 7. 4        | ④ 保聖岩               | 広瀬、倉藤、岡田、二谷、森本                                                             |
|             | ⑤ 道 場               | 越田、大津、鶴木、中田                                                                |
|             | ⑥ 逢来峽               | 伊藤、鳥居、藤安、大関、飯田、小松                                                          |
| 9. 3<br>4   | ロックガーデン             | 越田、伊藤、大関、森本<br>ブラック上の岩屋で泊る。                                                |

| 月 日   | 場 所                | 参 加 (備 考)                                                                                          |
|-------|--------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 9 10  | に 川                | 越田、広瀬、倉藤、大関                                                                                        |
| 9、19  | ロックガーデン            | 伊藤、越田、田中、(ゲートロックに登る)                                                                               |
| 10.31 | 道場、百丈岩             | 広瀬、越田、伊藤、藤安、倉藤、森本、二谷                                                                               |
| 11. 1 | ↓ 不動岩              | 鷗木、小松、(大関=11.3のみ)                                                                                  |
| 2     | ↓ 船阪峠経由            |                                                                                                    |
| 3     | ロックガーデン            | (秋期六甲山合宿)                                                                                          |
| 11. 6 | 岡本バットレス<br>ロックガーデン | 広瀬、越田、伊藤、藤安、倉藤、森本、大関<br>大津、二谷、小松、飯田、柏木、                                                            |
| 11 7  | ロックガーデン            | 越田、倉藤、藤安、大関が高校生や、香月大<br>先輩と岩登り、田辺、三木先輩も来たる。                                                        |
| 11 15 | ロックガーデン            | 大学、高校合同岩登り。<br>(大学) 広瀬、越田、伊藤、藤安、倉藤、柏木<br>大関、森本、二谷、飯田、小松、<br>(高校) 越田、竹原、安井、藤原、竹中、永島<br>乾<br>(OB) 田辺 |
| 11、24 | 保里岩→地獄谷<br>⇒住吉川    | 広瀬、藤安、伊藤、越田、大関、柏木、倉藤<br>小松、森本、二谷、飯田、                                                               |
| 11、28 | ロックガーデン            | 広瀬、藤安、伊藤、越田、大関、倉藤、伊丹<br>芦田、小松、森本、中田、二谷、飯田、                                                         |
| 12. 6 | 奥 池                | 伊丹、広瀬、伊藤、藤安、越田、大関、柏木<br>倉藤、飯田、二谷、小松、森本、                                                            |
| 2、27  | 芦屋 → 宝塚            | 広瀬、伊藤、藤安、阿河、倉藤、大関、森本<br>二谷、                                                                        |
| 2 29  | 芦屋→奥地→夙川           | 広瀬、伊藤、田中、大関、倉藤、森本、二谷                                                                               |
| 3. 2  | ロックガーデン            | 広瀬、伊藤、藤安、越田、伊丹、大関、倉藤<br>森本、                                                                        |

### 参加 神鍋山行スキーバス

参加 180名(現役:大学部員

18名、高校中学17名、OB、香月、  
阿部純、阿部公、田辺、麻島、その他

一般学生参加)

1月14日 神戸新聞会館出発(23、30)

1月15日 北の壁を中心に滑る。

### 夏山一般募集白馬登山

大学体育課に協力して、山岳部から藤安、二谷、岡田が参加し、一般学生

30名と体育課の植村先生

8月5～9日

平岩 → 蓮華温泉 → 白馬 →

大雪溪 → 猿倉 → 信濃四ッ谷

## 顧問の活動状況報告 (3年度) 高田 昇

雪のシーズンも終わり、野山に紅葉がツツツツともえ始めるころ、日差しは急に明るくなり、六甲の山はだんだんと活気を増してくる。われわれ山好きな顧問達はもうじっとしてられない。そして、さっそくカレンダーと行事予定表を見くらべ、目ぼしい日には赤鉛筆でマークをつける。昨年度は、トレーニングがたがた、われわれのホームグレンデである六甲山系、および北嶺の山々をもっと詳しく知ろうという目標で出発した。なかなか予定した日を全部使うことが出来ず、思ったほどの成果はあがらなかったが、しかし植村先生、川村先生、増田先生など、顧問以外の先生方の同行を得て、それら諸先生も山に深い関心をよせておられるのを知り、心強く感じた。今後とも部への後助と協力を惜しまれないものと、

われわれは強い期待をかけている。以下一年間の山歩きのコースその他を略記しておこう。

3月22日 晴

- ① 宝塚 — 惣川谷 — 支流分岐点 — 米谷高原 — 清荒神 — 宝塚、  
(参加) 高田

4月1日 晴

- ② 宝塚 — 神戸水道ガード — 桜ノ小場 — 大峰山 — 十万辻 — 中山  
(参加) 高田

4月24日 晴

- ③ 宝塚 — 惣川谷 — 沢谷 — 十万辻 — 中山  
(参加) 桑原、高田、松田

5月31日 晴

- ④ 宝塚 — 勝尾寺 — 高山 — 余野川

— 川尻金石橋 — コル — 能勢妙見 — 妙見駅。  
(参加) 桑原、高田、松田

7月4日～5日 曇

- ⑤ 能勢口<sup>電車</sup>山下<sup>バス</sup>森上 — 玉泉寺 — 釣尾山(無人小屋に泊) — 宿野<sup>バス</sup>山下  
(参加) 植村、川村、桑原、高田、藤岡、松田、

10月5日 晴

- ⑥ 御影 — 白鶴美術館 — 西山谷 — 天狗橋 — 六甲山頂駅 — 摩耶山 — 西灘  
(参加) 石渡、高田、松田

10月15日 晴

- ⑦ 御影 — 白鶴美術館 — 地獄谷 — オリエントホテル — 山頂 — 阪急六甲  
(参加) 石渡、高田、松田、

10月25日 晴

- ⑧ 宝塚<sup>バス</sup>塩瀬支所前 — 国見池 — 秀が辻 — 静が池 — 道場 — 宝塚  
(参加) 高田

11月3日 晴後雨

- ⑩ 宝塚 — 宝塚尾根 — 奥地 — 宝塚  
(参加) 高田

11月15日 晴

- ⑪ 宝塚<sup>バス</sup>塩瀬支所前 — 国見池 — 秀が辻 — 静が池 — 取石 — 道場 — 宝塚  
(参加) 川村、高田、松田、

なお夏休みには燕・槍の徒走(松田) 釣岳(松田)、朝日・雪倉・白馬徒走(高田)などがある。

その他、山歩き以外に研究講座を計画して古島先生を講師に招き、「天気図の書方」を主に「山の気象」の勉強を始めた。(6月～7月、毎週水曜日) この種の研究は今後も続けたいと思っている。なお熱心に御指導くださった古島先生には、この紙面をかりて、厚く御礼申しあげます。

こうして一年をふりかえってみて、気のつくことは、部員と同行の山歩きが意外と少ないことである。35年度はそのことを考慮に入れて計画をたてたいと思っている。

## 甲南山岳会総会記録

1958年3月2日(大学学友会館)

(出席者)

梅月、佐野、小川、奥田、川崎

柳沢、阿部、柏、宮本、砂川

(議題)

大学現役田辺以下13名、高校大関以下6名、高校高田先生、

大学学生部より禁止令の出た春山合宿について。大学、高校山岳部の在り方について。

高校春山合宿計画について etc.

1958年12月14日 (大学学友会館)

(出席者)

川崎、阿部純、柳沢、柏、前田澄木全、

大学現役伊丹以下11名、高校大関、大学鈴木助教授

(議題)

大学、高校 冬春山合宿計画について、

1959年6月28日 (大学学友会館)

(出席者)

春月、福田、鷺尾、小川、奥田、阿部純、柳沢、柏、宮本、前田澄、鈴木、田辺、竹中、福永

大学現役広瀬以下19名、

高校堀田以下8名、

1. 冬山、春山、五月の合宿報告、

2. 夏山、合宿計画、

3. コンパ

4. 福田氏機銃のカラー8mmの映写

(五月の南股、秋の穂高 etc)

1960年3月6日 (大学学友会館)

(出席者)

春月、福田、阿部純、阿部公、柳沢、

雨宮、田辺、竹中、

大学、広瀬以下15名、

高校、守井

1. 1959年度 主要山行報告

2. 春山計画検討

大学：杓子、鎌束面、

高校：猿倉、杓子岳、

3. 雑談

昭和35年6月1日 印刷

昭和35年6月5日 発刊

——（非売品）——

編集者

越 田 和 男

印刷所

神戸市灘区永手町一丁目  
天 竜 雕 写 堂

発行人

甲南山岳会・甲南山岳部